

高原町所在

ひろ わら だい

# 広原第1遺跡

西諸県地区総合制専門高校設置事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

宮崎県埋蔵文化財センター





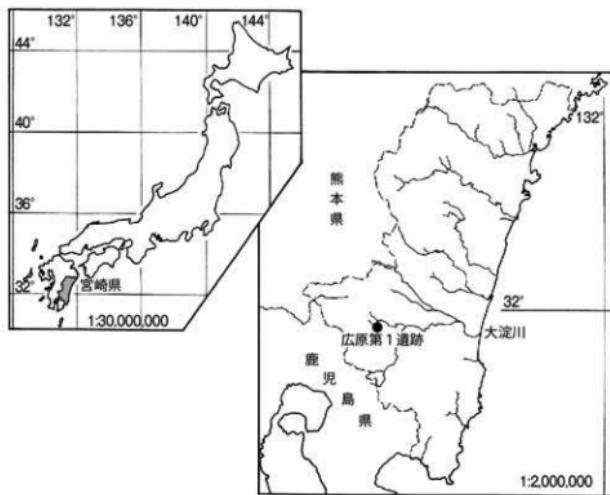


高原町所在

ひろ わら だい

広原第1遺跡

西諸県地区総合制専門高校設置事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書







広原第1遺跡遠景（標高1,344mの夷守岳を仰ぐ）



基本層序堆積状況（調査区南壁）



S C 2 断面の状況



赤色顔料、白色顔料付着土器

# 序

宮崎県教育委員会では、西諸県地区総合制専門高校設置事業に伴い、平成23年5月30日から9月16日にわたり高原町・広原第1遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

今回の調査では、縄文時代前期から古代に至るまでの遺構や遺物を確認することができました。中でも、縄文時代後期の竪穴建物跡や九州では珍しい同時期の乾燥型貯蔵穴等の遺構が多数検出されました。遺物についても、貝殻文土器や磨消縄文土器が多数出土し、当該期の様相を考える上でも良好な資料が蓄積されました。

これらの調査成果は高原町の歴史、ひいては九州の歴史を知る上において大変貴重な情報を提供する内容と言えます。この成果を、学術資料として研究者のみの活用にとどまらず、学校教育や生涯学習の場で活用され、地元はもとより、より多くの方にご活用いただき、宮崎県の埋蔵文化財についての認識と理解を深め、そして関心を高めていただけたら幸いです。

地下に眠る歴史を顕彰することは我々の務めであり、近い将来、当該周辺域の歴史構造が解明されることを祈念するとともに、今後もたゆまぬ調査・研究に邁進していく所存でございます。

最後になりましたが、調査にあたってご協力を賜りました関係諸機関をはじめ、ご指導ご助言をいただいた先生方、地元の皆様方に心より厚くお礼申し上げます。

平成25年3月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所長 北郷泰道

## 例　　言

- 1 本書は、西諸県地区総合制専門高校設置事業に伴う事前調査として、宮崎県教育委員会が実施した広原第1遺跡（宮崎県高原町大字広原4981番地2）の発掘調査報告書である。調査は宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
  - 2 発掘調査は平成23年5月30日から9月16日まで（現地調査66日間）実施した。
  - 3 本書で使用した位置図及び地形図は、それぞれ次の地図を基に作成した。
    - ・ 周辺遺跡位置図 … 『野尻(宮崎13号)』『霧島山(鹿児島1号)』5万分の1地形図  
国土地理院 昭和59年4月30日発行
    - ・ 周辺地形図 … 『高原町全国1』1万分の1図  
高原町 平成24年3月発行
  - 4 現地における遺構等の実測・写真撮影などの記録は、泊俊一郎・宗廣睦子・吉本正典・和田理啓・山田洋一郎が担当した。
  - 5 空中写真撮影、自然科学分析は次の業者に委託した。
    - ・ 空中写真撮影：有限会社スカイサーバイ九州
    - ・ 自然科学分析（放射年代測定・樹種同定・種実同定）：株式会社 古環境研究所
    - ・ 自然科学分析（放射年代測定・樹種同定・種実同定）：パリノ・サーヴェイ株式会社
  - 6 遺物・図面の整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面作成・遺物実測・トレースは、泊俊一郎が整理作業員の補助を得て行った。
- 【実測図凡例】**
- (1) 土器実測（調整等の表現方法）について
    - ア 土器の残存状況が径1/4未満でも、反転復元できる場合には、外形線・稜線を復元した。
    - イ 調整の不鮮明なものや、最終調整ではなく下調整であるもの（ナデ消されたもの等）については、実線ではなく長破線で表現するようにした。
  - (2) 石器実測（使用痕等の表現方法）について
    - ア 節理面は1点鎖線、自然面はドットを使って表現した。
    - イ 欠損面については、調査時等の新しい欠損面と判断できるものは白抜きとし、それ以外の欠損面に関してはリング及びフィッシャーを入れて表現した。
    - ウ 磨面・敲石・研石・台石の使用痕跡は、平面上、断面上、網掛を用いて使用の範囲を表現した。

(3) 採図の縮尺について

以下の縮尺を基本とし、それ以外のものも含めて採図中にその縮尺を明示した。

ア 遺構実測図に関しては、遺構の規模に応じた縮尺を用いており、使用範囲は以下のとおりである。

　竪穴建物跡〔1：40〕　　土坑〔1：30〕

イ 遺物実測図に関しても、基本的には遺物の大きさに応じた縮尺を用いている。以下に基準を示す。

　縄文土器〔1：3〕　　石器（石鏃・石匙・ドリル・スクレイバー等）〔2：3〕

　弥生土器〔1：3〕　　石器（石斧・磨石・敲石・砥石・台石等）〔1：3〕

　土師器・須恵器〔1：3〕

7 調査に際しては、世界測地系に準拠した10mグリッドを設定した。この座標グリッドにアルファベットと整数で名称を与え、この区画を基準として遺構等の図化作業を行った。また、本書中の座標値についても世界測地系に準拠した。

8 本書で使用した方位は、全て座標北「G.N」で示している。レベル表示（L）には海拔絶対高を使用した。

9 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。

S A：竪穴建物跡（竪穴住居跡）　　S C：土坑　　S H：単独の小穴

10 遺物観察表中の土器等の色調及び土層注記内の土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財團法人日本色彩研究所監修の「新版 標準土色帖」に準拠した。

11 本書の執筆は第1章・第1節を日高広人が、その他の執筆・編集を泊俊一郎が行った。

12 第IV章付論は、熊本大学文学部教授 小畠弘己氏により玉稿を賜った。

13 石材の分類は、松田清孝、加藤徹の協力を得て泊俊一郎が行った。

14 出土遺物・実測図・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

# 本文目次

## 第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2
第4節 整理作業及び報告書作成	3
第5節 教育普及活動	4

## 第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5

## 第Ⅲ章 調査の記録

第1節 調査の概要	
1 基本層序	9
2 グリッド及び確認トレーン配置	9
第2節 繩文前期（VI b 層）の遺物	13
第3節 繩文後期前葉・中葉（VI b 層）の遺構と遺物	
1 概要	13
2 繩文時代後期前葉の出土遺物	13
3 壁穴建物跡と出土遺物	13
4 土坑と出土遺物	21
5 包含層出土遺物	39
第4節 繩文後期後葉から晩期（VI a 層）の遺構と遺物	
1 概要	67
2 遺構	67
3 包含層出土遺物	67
第5節 弥生から古代（V 層）の遺物	
1 弥生時代の遺物	72
2 古墳時代の遺物	72
3 古代の遺物	72

## 第Ⅳ章 自然化学分析

第1節 放射性炭素年代測定	85
第2節 樹種同定	87
第3節 種実分析	88
第4節 種実遺体の同定	92
付 論 圧痕レプリカ法による広原第1遺跡出土土器の圧痕とその意義	95

## 第V章 総括

第1節 縄文時代後期について	
1 遺構	99
2 遺物	101
3 生業	101
4 生活	102
第2節 縄文時代後期後葉から晩期について	102
第3節 終わりに	102

## 挿 図 目 次

### 第Ⅰ章 はじめに

第1図 【フローテーション装置】	4
第2図 【高原高校生徒発掘体験活動】	4
第3図 【現地説明会】	4
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	
第4図 【広原第1遺跡及び周辺遺跡位置図 S=1/50,000】	7
第5図 【広原第1遺跡周辺地形図 S=1/10,000】	8
第Ⅲ章 調査の記録	

第6図 【土層堆積状況】	11
第7図 【グリッド及びトレンチ配置図 1 グリッド=10m】	12
第8図 【包含層出土遺物土器実測図①(縄文前期、S=1/3)】	13
第9図 【包含層出土遺物土器実測図②(縄文後期、S=1/3)】	13
第10図 【広原第1遺跡遺構分布(VII a面) S=1/250】	14
第11図 【1号竪穴建物跡実測図 S=1/40】	16
第12図 【1号竪穴建物跡出土遺物実測図 S=1/3】	16
第13図 【2号竪穴建物跡実測図 S=1/40】	17
第14図 【3号竪穴建物跡実測図 S=1/40】	18
第15図 【3号竪穴建物跡出土遺物実測図 S=1/3】	18
第16図 【4号竪穴建物跡実測図 S=1/40】	19
第17図 【5号竪穴建物跡実測図 S=1/40】	20
第18図 【5号竪穴建物跡出土遺物実測図 S=1/3】	20
第19図 【1号土坑実測図 S=1/30】	26
第20図 【1号土坑出土遺物実測図 S=1/3】	26
第21図 【2号土坑実測図 S=1/30】	27
第22図① 【2号土坑出土遺物実測図 S=1/3】	27
第22図② 【2号土坑出土遺物実測図 S=1/3】	28
第23図 【3号土坑実測図 S=1/30】	29
第24図① 【3号土坑出土遺物実測図 S=1/3】	29
第24図② 【3号土坑出土遺物実測図 S=1/3】	30
第25図 【4号土坑実測図 S=1/30】	30
第26図 【4号土坑出土遺物実測図 S=1/3】	31
第27図 【5号土坑実測図 S=1/30】	32
第28図① 【5号土坑出土遺物実測図 S=1/3】	32
第28図② 【5号土坑出土遺物実測図 S=1/3】	33

第29図	【6号土坑実測図 S=1/30】	33
第30図	【6号土坑出土遺物実測図 S=1/3】	34
第31図	【7号土坑実測図 S=1/30】	34
第32図	【7号土坑出土遺物実測図 S=1/3】	35
第33図	【8号土坑実測図 S=1/30】	36
第34図	【8号土坑出土遺物実測図 S=1/3】	36
第35図	【9号土坑実測図 S=1/30】	36
第36図	【10号土坑実測図 S=1/30】	36
第37図	【11号土坑実測図 S=1/30】	37
第38図	【11号土坑出土遺物実測図 S=1/3】	37
第39図	【12号土坑実測図 S=1/30】	37
第40図	【13号土坑実測図 S=1/30】	37
第41図	【14号土坑実測図 S=1/30】	38
第42図	【15号土坑実測図 S=1/30】	38
第43図	【16号土坑実測図 S=1/30】	38
第44図	【包含層出土遺物土器実測図③（縄文後期、S=1/3）】	45
第45図	【包含層出土遺物土器実測図④（縄文後期、S=1/3）】	46
第46図	【包含層出土遺物土器実測図⑤（縄文後期、S=1/3）】	47
第47図	【包含層出土遺物土器実測図⑥（縄文後期、S=1/3）】	48
第48図	【包含層出土遺物土器実測図⑦（縄文後期、S=1/3）】	49
第49図	【包含層出土遺物土器実測図⑧（縄文後期、S=1/3）】	50
第50図	【包含層出土遺物土器実測図⑨（縄文後期、S=1/3）】	51
第51図	【包含層出土遺物土器実測図⑩（縄文後期、S=1/3）】	52
第52図	【包含層出土遺物土器実測図⑪（縄文後期、S=1/3）】	53
第53図	【包含層出土遺物土器実測図⑫（縄文後期、S=1/3）】	54
第54図	【包含層出土遺物土器実測図⑬（縄文後期、S=1/3）】	55
第55図	【包含層出土遺物土器実測図⑭（縄文後期、S=1/3）】	56
第56図	【包含層出土遺物土器実測図⑮（縄文後期、S=1/3）】	57
第57図	【包含層出土遺物土器実測図⑯（縄文後期、S=1/3）】	58
第58図	【包含層出土遺物土器実測図⑰（縄文後期、S=1/3）】	59
第59図	【包含層出土遺物土器実測図⑱（縄文後期、S=1/3）】	60
第60図	【包含層出土遺物土器実測図⑲（縄文後期、S=1/3）】	61
第61図	【包含層出土遺物土器実測図⑳（縄文後期、S=1/3）】	62
第62図	【包含層出土遺物土器実測図㉑（縄文後期、S=1/3）】	63
第63図	【包含層出土遺物石器実測図㉑（縄文後期、S=1/3）】	64
第64図	【包含層出土遺物石器実測図㉒（縄文後期、S=1/3）】	65
第65図	【包含層出土遺物石器実測図㉓（縄文後期、S=1/3）】	66
第66図	【遺構分布 (VI b面) S=1/250】	68
第67図	【包含層出土遺物土器実測図㉔（縄文後期、S=1/3）】	69
第68図	【包含層出土遺物土器実測図㉕（縄文後期、S=1/3）】	70
第69図	【包含層出土遺物土器実測図㉖（縄文後期、S=1/3）】	71
第70図	【包含層出土遺物土器実測図㉗（弥生、S=1/3）】	73
第71図	【包含層出土遺物土器実測図㉘（古墳時代・古代、S=1/3）】	74
<b>第IV章 自然化学分析</b>		
第72図	【炭化種実】	90
第73図	【炭化材】	91
第74図	【種実遺体】	94
第75図	【広原第1遺跡土器压痕・レプリカSEM画像①】	97
第76図	【広原第1遺跡土器压痕・レプリカSEM画像②】	98

## 挿・付表目次

### 第III章 調査の記録

第1表	【基本層序】.....	10
第2表	【遺物観察表①(包含層:前期、後期前葉の土器)】.....	75
第3表	【遺物観察表②(遺構内:後期中葉~古代の土器)】.....	75
第4表	【遺物観察表③(包含層:後期中葉~古代の土器)】.....	77
第5表	【遺物観察表④(石器)】.....	84
第IV章	自然科学分析	
第6表	【試料の採取箇所、種類、前処理・調整法および測定法】.....	85
第7表	【放射性炭素年代測定】.....	86
第8表	【樹種同定結果】.....	87
第9表	【炭素種実同定結果】.....	88
第10表	【種実同定結果】.....	93
第11表	【広原第1遺跡出土土器と圧痕の属性①】.....	97
第12表	【広原第1遺跡出土土器と圧痕の属性②】.....	98
第V章	総括	
第13表	【竪穴建物跡(縄文時代後期)概要】.....	99
第14表	【種実分析の結果】.....	100

## 図版目次

### 巻頭図版1

【広原第1遺跡遠景(標高1,344mの夷守岳を仰ぐ)】

### 巻頭図版2

【基本層序堆積状況(調査区南壁)】【S C 2 断面の状況】【赤色顔料、白色顔料付着土器】

図版1.....	105
----------	-----

【調査区と調査区周辺/調査区全景】

図版2.....	106
----------	-----

【現場風景①/現場風景②/基本層序堆積状況(調査区西壁)/基本層序堆積状況(C 5区トレチ)/  
作業風景/S A 1完掘状況/S A 2完掘状況/S A 3完掘状況】

図版3.....	107
----------	-----

【S A 4完掘状況/S A 5完掘状況/S C 1検出状況/S C 1底面の遺物検出状況/S C 1底面の遺物検出状況/S C 1完掘状況/S C 2半截状況/S C 2完掘状況】

図版4.....	108
----------	-----

【S C 3半截状況/S C 3完掘状況/S C 4完掘状況/S C 5完掘状況/S C 6完掘状況/S C 7半截状況/S C 7完掘状況/S C 8完掘状況】

図版5	109
【SC9完掘状況／SC10完掘状況／SC11完掘状況／SC12完掘状況／SC13完掘状況／SC14完掘状況／SC15完掘状況／SC16完掘状況】	
図版6	110
【SA1、SA3、SA5、SC1、SC2出土の土器／SC1、SC2、SC3出土の土器】	
図版7	111
【SC3、SC4出土の土器／SC7、SC8、SC9、SC10出土の土器】	
図版8	112
【SC5、SC6出土の土器／Ia類土器①／Ia類土器②／Ia類土器③】	
図版9	113
【Ia類土器④／Ib類土器①／Ib類土器②／Ib、Ic類土器】	
図版10	114
【Id、Ie類土器／Ie類土器／II類土器／IIIa類土器】	
図版11	115
【IIIa類土器／IIIb類土器／IV類土器】	
図版12	116
【Va類土器①／Vb類土器②／Vb、VI類土器／VII、VIII類土器】	
図版13	117
【VII類土器①／三万田式土器①／VII類土器②／三万田式土器②】	
図版14	118
【三万田式土器③／三万田式土器④／縄文晩期の土器／弥生時代の土器／古墳時代の土器／古代の土器】	
図版15	119
【石錐とドリル／SC2、SC5、SC6出土の土器、包含層出土の土器①／包含層出土の石錐／包含層出土の土器②】	

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第Ⅰ節 調査に至る経緯

宮崎県教育委員会では、少子化や社会情勢の変化に対応した特色・活力ある高等学校の創造を目指し、平成13（2001）年度から中長期的な展望に立った県立高等学校の再編整備についての計画策定に取り組んできた。平成15（2003）年1月には「宮崎県立高等学校再編整備計画」を策定し、平成15（2003）年度から平成24（2012）年度までの10年間を計画期間と定め、順次整備事業を実施している。

このうち西諸県地区総合制専門高校設置事業については、小林工業高等学校・小林商業高等学校・高原高等学校の三校を再編整備するため平成17（2005）年度より着手し、平成20（2008）年度に小林工業高等学校と小林商業高等学校を統合、校名を「小林秀峰高校」として開校している。平成25（2013）年度には高原高等学校の編入も完了するが、農場の一部を小林秀峰高等学校の栽培部門・飼育部門の農場として利用するため管理棟・牛舎棟・堆肥舎棟等を建設する計画があり、主管課である学校政策課から文化財課に対して埋蔵文化財に関する協議の申し入れがあった。

文化財課では、建設予定地が昭和43（1968）年に発掘調査が行われた高原畜産高校遺跡（広原第1遺跡）に近接し、遺跡の範囲が予定地まで延びる可能性があることから、平成22（2010）年1月12日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、縄文時代後期等の遺構や遺物を確認し、遺跡の存在が明らかになったことから広原第1遺跡の範囲を拡大し、その取扱いについて学校政策課と協議を行った。このうち牛舎棟・堆肥舎棟予定地（1,400m<sup>2</sup>）については、埋蔵文化財が影響を受けることから記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は宮崎県教育長の依頼を受けて、県埋蔵文化財センターが平成23（2011）5月30日から9月16日まで実施した。

## 第Ⅱ節 調査の組織

広原第1遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成は以下の組織で実施した。

調査主体 宮崎県教育委員会

平成23年度 発掘調査

調査機関 宮崎県埋蔵文化財センター

所長	森 隆 茂
----	-------

副所長	北郷 泰道
-----	-------

総務課長	坂上 恒俊
------	-------

総務課総務担当リーダー	長友 由美子
-------------	--------

調査第二課長	永友 良典
--------	-------

調査第二課調査第三担当リーダー	吉本 正典
-----------------	-------

調査第二課調査第三担当 主査（調査担当）	泊 俊一郎
----------------------	-------

調査第二課調査第三担当	主査（調査担当）	山田 洋一郎
調査第二課調査第三担当	主査（調査担当）	和田 理啓
調査第二課調査第三担当	主事（調査担当）	宗廣 瞳子
<b>平成24年度 整理作業・報告書作成</b>		
調査機関 宮崎県埋蔵文化財センター		
所長		北郷 泰道
副所長		佐々木 真司
総務課長		坂上 恒俊
総務課総務担当リーダー		高國 寿恵
調査第二課長		永友 良典
調査第二課調査第三担当リーダー		吉本 正典
調査第二課調査第四担当リーダー		松林 豊樹
調査第二課調査第三担当 主査（整理作業・報告書担当）		泊 俊一郎
事業調整担当		
平成23年度 宮崎県教育庁文化財課 埋蔵文化財担当	主査	日高 広人
平成24年度 宮崎県教育庁文化財課 埋蔵文化財担当	主査	堀田 孝博
調査指導・協力		
熊本大学文学部歴史学科 教授		小畠 弘己
鹿児島県埋蔵文化財センター 調査第一課 係長		東 和幸
鹿児島市教育委員会 文化課主事		藤井 大祐

### 第3節 調査の経過

調査は、平成23年5月30日に開始した。5月31日、6月1日に重機にてIV層上面までの表土剥ぎを実施した。調査区北側半分は、Ⅲ層（高原スコリアの一次堆積層）、IV層（黒色土）、V層（黒褐色土）が削平されていた。平成13年度から数年間使用された高原高校の馬場内に調査区の大半があるが、北西部の一部（250m<sup>2</sup>）が柵外にあるため、まずは馬場の柵内にある1,150m<sup>2</sup>の調査区から着手することにした。6月2日には事務所、器材庫、トイレを設置し、調査区のグリッド杭も設置した。

6月6日に作業員18名を動員し人力での作業を開始した。6月14日までにIV層までの掘削を終了した。また、6月30日までにV層の掘削を終了した。V層からは弥生時代、古墳時代、古代の遺物等を検出した。VI b層（黒色土）上面では、小穴を多数確認することができた。小穴は縄文時代後期後葉から晩期の遺構と考えられる。7月2日、3日にVI a層の人力での掘削を実施した。VI a層については、調査区の南西部分（約300m<sup>2</sup>）に縄文時代後期後葉から縄文時代晩期の遺物が集中しており、集中部分以外のVI a層には遺物がほとんどないことが分かり、7月4日、5日に重機で残りのVI a層（850m<sup>2</sup>）を掘削した。その際、馬場の柵外にある調査区である残りの250m<sup>2</sup>の調査区表土剥ぎを重機にて行った。250m<sup>2</sup>の調査区については、7月4日、5日にIV層・V層を人力での掘削を進めていき、VI a層については、

重機での掘削を行った。

7月7日より1,400m<sup>2</sup>の調査区全体のVI b層について人力での掘削を始めた。VI b層からは、多量の縄文時代後期の貝殻文土器や磨消縄文土器、台付皿形土器を始めとした多種多様の土器を検出した。VII a層(明褐色土)上面では縄文時代後期の竪穴建物跡を5軒、土坑16基、小穴多数を確認することができた。遺構や遺物は調査区の西側に集中していた。

8月23日には、遺跡全体をVII a層上面で精査をし、空撮を実施した。9月3日、4日に現地説明会を実施し、町内を始め遠くは鹿児島市より101名の参加があった。9月9日に掘削作業の全てを終了した。

9月12日から15日に現場掘削土の埋め戻し作業を終了し、9月16日に事務所等の撤収作業を行い、発掘調査の全てを終了した。

尚、発掘作業に関わった作業員は以下の18名である。

勝吉 繁、上村 勝雄、川畠 英春、高野瀬 三男、島屋 喜十八、鳥井 久信

花屋禮 照雄、林 和男、松下 宗雄、村山 保夫、興 加代子、加藤 恵

川野 ちえ子、瀬戸山 美子、溝上 純、溝上 恵、山崎 啓子、永峯 清仁

## 第4節 整理作業及び報告書作成

### 1 整理作業及び報告書作成の実際

整理作業は、当センターの整理作業員の協力を得て、平成23年11月1日から12月28日までの期間に水洗を実施し、平成24年5月1日から12月28日までの期間に注記、接合、実測、拓本、トレース、収蔵前整理を行った。同時に遺構分布図や遺構実測図など挿図を作成し、併行して本文執筆を進めていった。尚、整理作業に関わった作業員は以下の6名である。

富士本 智子、小崎 弘美、畠中 美穂、高山 シノブ、高山 千代美、伊井 静

### 2 フローテーション作業について

#### フローテーション作業を実施した理由

本遺跡では、縄文時代後期の土坑が16基検出され、その中の7基は貯蔵穴の可能性があり、その埋土から植物炭化種子や炭化木片が検出される可能性が高かった。植物炭化種子や炭化木片が検出されれば、放射年代測定、樹種同定、種実同定が実施でき、当時の本遺跡における食生活や植生の復元が可能になると想え、フローテーション作業を行うことにした。

#### フローテーション作業の流れ

フローテーション法における一連の作業の流れは、土壤採取→土壤乾燥→土壤水洗→残存物乾燥→選別→分析である。調査現場では貯蔵穴の可能性がある土坑からの土の採取を行い、本センターで土壤乾燥から後の作業を行った。分析（放射年代測定、樹種同定、種実同定）については業者に委託した。

#### フローテーション作業の実際

##### ○ 土壤採取

土壤採取は貯蔵穴の一番底から10cm程の土を北側半分と南側半分に分けて採取した。採取した土壤は土嚢袋で保存した。

##### ○ 土壤乾燥

本センターにおいて、土嚢袋から土壤をメッシュかごに移す作業を行った。深さ5cm程の土壤を入

れた135箱のメッシュかごには新聞紙を敷き、風通しのよい場所に3日間程置いた。その際、異物混入を防ぐために、メッシュかごの上面に新聞紙をかけた。土壤乾燥の結果、S A 1は北側半分14.75kg、南側半分25.91kg、S A 2は北側半分17.57kg、南側半分12.19kg、S A 3は北側半分17.62kg、南側半分15.4kg、S A 4は北側半分26.51kg、南側半分13.88kg、S A 5は北側半分17.35kg、S A 6は北側半分16.24kg、南側半分27.91kg、S A 7は北側半分15.08kg、南側半分31.43kg、合計251.84kgに乾燥された。

#### ○ 土壤水洗

乾燥した土はフローテーション装置を使って水洗作業を進めた。同じ場所から採取された土であれば3～4箱程度まとめて洗い、作業の効率化を図った。

#### ○ 残存物乾燥

篩とタンクに残った残存物を紙箱に入れ、風通しの良い所で乾燥させた。

#### ○ 選別

十分乾燥した残存物を電気スタンドとルーベ、实体顕微鏡を使って、炭化物と土器片や石器片を選別した。



第1図 フローテーション装置

## 第5節 教育普及活動

数々の教育普及活動を現地にて実施した。7月14日（木）、15日（金）に高原高校3年生（生産流通科36名、福祉科34名、食品化学科38名）に発掘体験授業を実施した。8月11日（木）に高原町教育委員会研修会として高原町内の小中学校の先生方22名の参加のもと、現場での研修会を実施した。9月3日（土）、9月4日（日）の両日2回に分けて現地説明会を実施した。高原町内外、遠くは県外から101名の参加があった。他にも多くの団体や個人での本遺跡での現地観察等が行われた。



第2図 高原高校生徒発掘体験活動



第3図 現地説明会

# 第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

## 第1節 地理的環境

高原町は、宮崎県の西南部の町で、宮崎市からは西へ約40kmの場所に位置し、小林市、都城市、鹿児島県霧島市に隣接している。東西約18km・南北約10kmと東西に長く、面積は85.42km<sup>2</sup>であり、韓国岳（標高1,700m）、新燃岳（1,421m）、中岳（1,332m）、高千穂峰（1,574m）等を中心とする霧島火山群の麓にある。本遺跡は、高原町大字広原4981番地2（高原高校敷地内）に所在しており、火山灰により形成されたシラス台地上にある。シラスは、約29,000年前に現在の鹿児島県の錦江湾付近（姶良カルデラ）から噴出した火山灰で、「姶良丹沢（AT）火山灰」「姶良大隅輕石」「入戸火碎流堆積物」等で構成されている。後期旧石器時代最大の噴火で、その火山灰は北海道を除く日本列島だけでなく、韓国（ソウル）・中国（山水省）・フィリピン（フィリピン海）・ロシア（ナホトカ近郊）まで降下したとされている。高原町の台地は、大規模に発生した「入戸火碎流堆積物」で構成され、その厚さは厚いところでは約20mにもなる。さらにその後も、霧島火山群から多種の火山灰が噴出し、高原町を覆っている。牛の脛火山灰下部、鬼界アカホヤ火山灰、牛の脛火山灰上部、御池輕石（霧島御池）、高原スコリア（霧島大谷4～6テフラ）である。これらの火山灰は、地層の年代を比較し特定するため鍵層として重要である。

遺跡周辺の現在の環境をみると、多くの山々に囲まれており、約50%が高原地帯、残り50%が山林で占められている。山合にはダムが構築され、遺跡の周辺は標高200m前後の広い平坦面を有しており、周囲には高低差10m程の「迫」と呼ばれる谷が巡っている。遺跡周辺には、岩瀬川の支流である安丸川が流れている。高原町で水田耕作が開始されたのは江戸時代を通じて行われた用水路整備によるものであり、それ以前は陸稲であった。現在、遺跡周辺の台地上では稲作や畑作が盛んに行われているが、遺跡周辺は、縄文時代当時から水の確保も容易で、これまでにも多くの人々たちが遺跡周辺で豊かな生活を営んできたことが推測される。

## 第2節 歴史的環境

高原町ではシラスを始め様々な火山灰が多く堆積しているため、旧石器時代の調査自体が困難な状態にある。現在のところ遺跡を確認できる時代は、縄文時代早期からである。

本遺跡では、縄文時代後期中葉と縄文時代後期後葉から晩期の遺構が確認されている。遺物については、縄文時代後期中葉の土器を中心に縄文時代前期から古代にかけての遺物が断続的ではあるが確認されている。ここでは、高原町内の当該期の周辺遺跡について概述する。

縄文時代早期では、高原町の市街地、標高200mの広大な台地に位置する荒廃遺跡で、発掘調査の結果、縄文時代早期に位置付けられている塞ノ神式土器が1点出土した。縄文時代早期の遺物が確認されているのは現在のところこれのみである。縄文時代早期の遺構は検出されていない。

縄文時代前期になると、高原町の東側、後川内地区に位置する川除遺跡で、畠遺構を構成する土層から轟B式の破片が数点確認された。また、大谷遺跡でも、曾畠式の破片が数点確認された。縄文時代前

期の遺構は検出されていない。

縄文時代中期の遺構、遺物については確認されていない。

縄文時代後期になると、遺物量が大幅に増加する。高原町で発見された遺跡の殆どが縄文時代後期の土器を含んでいる。本遺跡が接する高原畜産高校遺跡は、高校の新校舎建設のため、昭和43年6月11日から15日まで発掘調査が行われた。明確な遺構を発見するには至らなかったが、遺物は、本遺跡で今回の調査で検出した縄文時代後期中葉の同様の多種多様な土器が検出されている。吉牟田遺跡では、貝殻文土器として、市来式、草野式、丸尾式が、磨消縄文土器としては、鐘崎式、北久根山式、西平式等、多種多様な土器が検出されている。大谷遺跡と佐土遺跡では丸尾式を中心として、北久根山式や西平式が検出された。楠粉山遺跡では、市来式、草野式、丸尾式が殆ど見られず、磨消縄文土器もごくわずかしか見られず、綾式や宿毛式が多く見られた。大谷遺跡、佐土遺跡と楠粉山遺跡は、近い場所にあるが、検出遺物の大きな相違が見られる。高原町において、縄文時代後期の遺構が検出されることはほとんどなく、遺物のみの検出で評価が難しい遺跡が多い。吉牟田遺跡では、土坑墓3基、竪穴状遺構1基、溝状遺構1基、ピット群が確認され、いずれの遺構も同時性を示す確証はないが縄文時代後期中葉から縄文時代晚期初頭の時期に比定されている。

縄文時代晩期については、今までのところ遺構や遺物は殆ど見られない。

弥生時代から古墳時代になると、集落遺跡が確認されている。その中でも、荒迫遺跡、立山遺跡は代表的な遺跡である。荒迫遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡18軒、土坑、溝等の遺構が検出された。立山遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡が30軒検出された。また、古墳時代の遺跡としては、高原町内で数多くの地下式横穴墓も検出されている。

以上のように高原町の歴史的環境は、今までのところ不明な時代も多い。シラスを始め様々な火山灰が多く堆積していることが最大の原因であろうが、これまでの遺跡の発掘調査自体が少なかったことも要因になっていると考える。

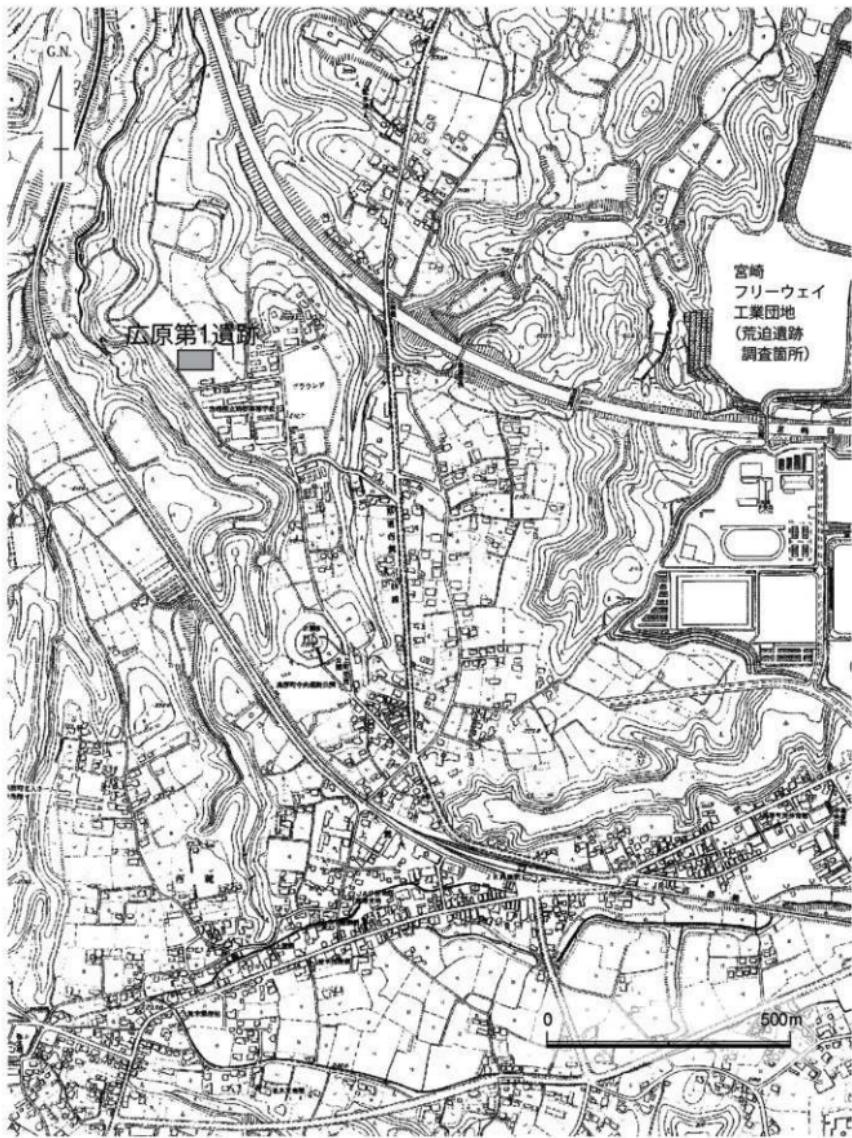
#### [参考文献]

- 高原町教育委員会 1991『立切地下式横穴墓群』高原町文化財調査報告書第1集
- 高原町教育委員会 1997『立山遺跡』高原町文化財調査報告書第2集
- 高原町教育委員会 1999『大谷遺跡表採縄文土器資料』高原町文化財調査報告書第4集
- 高原町教育委員会 1999『川除遺跡』高原町文化財調査報告書第5集
- 高原町教育委員会 2000『楠粉山遺跡』高原町文化財調査報告書第6集
- 高原町教育委員会 2003『楠粉山遺跡』高原町文化財調査報告書第10集
- 高原町教育委員会 2003『町内遺跡Ⅲ』高原町文化財調査報告書第11集
- 高原町教育委員会 2004『宇津木遺跡』高原町文化財調査報告書第12集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1998『荒迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2007『吉牟田遺跡』宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書第154集
- 宮崎県編 1989『宮崎県史 資料編 考古1』



- |               |            |              |         |
|---------------|------------|--------------|---------|
| 1 広原第1遺跡      | 2 高原畜産高校遺跡 | 3 立山遺跡       | 4 荒迫遺跡  |
| 5 高原地頭飯屋址     | 6 高原城址     | 7 湯ノ崎地下式横穴墓群 |         |
| 8 大鹿倉遺跡       | 9 常磐台遺跡    | 10 旭台地下式横穴墓群 |         |
| 11 濑多尾権現社跡    | 12 高原水源地遺跡 | 13 佐土遺跡      | 14 大谷遺跡 |
| 15 花堂遺跡       | 16 小塙遺跡    | 17 狹野神社・神徳院跡 |         |
| 18 宇津木遺跡      | 19 楠粉山遺跡   | 20 高原町古墳     |         |
| 21 霧島東神社・錦杖院跡 |            |              |         |

第4図 広原第1遺跡及び周辺遺跡位置図 S=1/50,000



第5図 広原第1遺跡周辺地形図 S=1/10,000

# 第Ⅲ章 調査の記録

## 第1節 調査の概要

### 1 基本層序

今回の調査対象範囲における土層の堆積状況は、高原スコリア（A D1,235）、牛の脛火山灰上部（約7,000年前）、牛の脣火山灰下部（約7,600年前）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約7,300年前）の4層を鍵層とし、谷地形等の特異な場合を除いて遺跡内の各地点とも大きな差異は認められなかった。そのため、第1表に示した基本層序が本遺跡の基本層序ととらえてよい。

I層は白砂の表土である。聞き取り調査によれば、平成13年度から20年度まで高原高校馬術部の馬場として使われた際に白砂を敷いていたということである。II層は馬場以前の表土で耕作地である。聞き取り調査によれば、平成13年以前、馬場は農業用自動車の運転練習場であり、表土はかなり固められていたようである。III層は、高原スコリアの一次堆積土で A D1,235案を採用している。（長岡信治 2010）。IV層は黒色土。平均層厚は約5cmである。V層は黒褐色土。平均層厚は約10～20cmである。弥生時代・古墳時代・古代の遺物包含層である。VIa層は黒色土。平均層厚は約15～30cmである。縄文時代後期後葉から晩期の遺物包含層である。VIb層は黒色土。今回の調査により、縄文時代後期に関して、竪穴建物跡、土坑等の遺構を検出することができたが、Vlb層が縄文時代後期の遺構、遺物包含層である。Vlb層の平均層厚は約50～70cmであるが、遺物の殆どは、VIb層下部約25～35cmから検出されている。遺構については、VIb層下部では検出することができず、全ての遺構をVIIa面上面で検出した。また、VIb層は、5mm～2cm程度の御池軽石（明黄色：Hue10YR6.8）を少量含むが、VIb層下部約25～35cmに集中していたことを付け加えておく。VIIa層は明黄褐色土。平均層厚は約30cmである。VIIb層は牛の脣火山灰上部の一次堆積層。オリーブ褐色土。平均層厚は約50cmである。VII層は鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の一次堆積層。明黄褐色土。平均層厚は約50cmである。発掘調査で掘削した層は以上VII層までであり、IX層以下の層は深掘りトレンチで確認した。IX層は牛の脣火山灰下部の一次堆積層。黒褐色土。平均層厚は約30cmである。X層は黒色土。平均層厚は約30cmである。XI層は黒褐色土。平均層厚は約30cmである。XII層は黒色土。平均層厚は約30cmである。XIII層は黒褐色土。平均層厚については調査を実施していないため不明である。

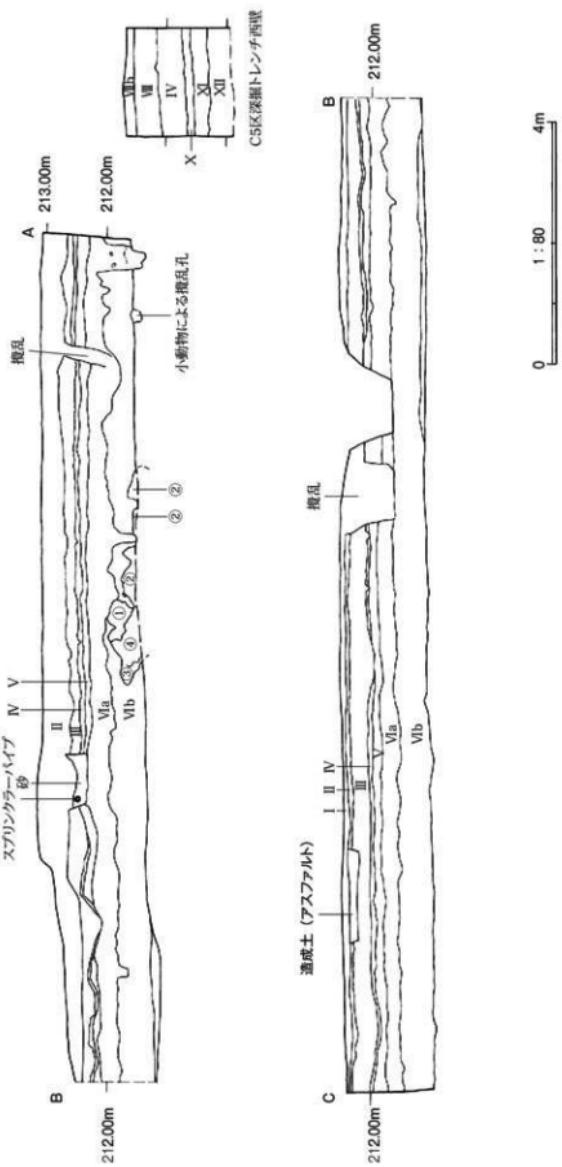
### 2 グリッド及び確認トレンチ配置

調査に際しては、現地での記録図作成のため、世界測地系に準拠した10m単位のグリッドを設定し、アルファベットと整数で名称を与えた。南北方向は北から南へB～F、東西方向は西から東へ3～8に区画し、この二つの組合せで第2図に示す区画を設定した。

また、今回の調査においては、遺構・遺物を検出するため、確認用のトレンチを第2図（網掛部）に示すとおり設定し、掘削を進めた。Tr2とTr3については宮崎県教育委員会文化財課が試掘時に設定したトレンチで本調査でも再掘削し利用した。その他のトレンチ（Tr1、Tr4、TrA、TrB、TrC、TrD、北側トレンチ、南側トレンチ、C5区トレンチ）は全て本調査で設定し掘削した。

第1表 基本層序

層序	色調	特徴
I層	にぶい黄橙色土 (Hue10YR7/2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>砂の表土である。</li> <li>砂層である。粘性はなく、しまりもない。 ※平成13年度から20年度まで高原高校馬術部の馬場として使われていた際に砂を敷いていた。</li> </ul>
	黒褐色土 (Hue7.5YR3/1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>馬場以前の表土であり、耕作土であった。</li> <li>やや粘性あり、固まっておりしまりあり。</li> </ul>
III層	にぶい黄橙色土 (Hue10YR7/2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>高原スコリアの一次堆積土である。</li> <li>粘性はなく、しまりもない。径5mm程度の粒子。水分を含むと黒色に変化する。</li> <li>* AD1235案を採用している(長岡信治2010)。</li> </ul>
	黒色土 (Hue10YR2/1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>平均層厚は5cm程度。</li> <li>やや粘性あり、しまりもある。</li> </ul>
V層	黒褐色土 (Hue10YR3/1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>平均層厚は10~20cm程度。</li> <li>やや粘性あり、しまりもある。(IV層より粘性あり、しまりもあり。)</li> <li>弥生時代、古墳時代、古代の遺物包含層。</li> </ul>
	黒色土 (Hue10YR2/1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>平均層厚は15~30cm程度。</li> <li>やや粘性あり、しまりもある。(V層と同じ粘性、V層よりはしまりなし。)</li> <li>縄文時代後期後葉から晩期の遺物包含層。</li> </ul>
VIb層	黒色土 (Hue10YR7/2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>平均層厚は50~70cm程度。</li> <li>やや粘性あり、しまりもある。(VIa層と同じ粘性、同じしまり。) 5mm~2cm程度の御池軽石(明黄色:Hue10YR6/8)を少量含む。</li> <li>縄文時代後期の遺物包含層。</li> </ul>
	明黄褐色土 (Hue10YR6/8)	<ul style="list-style-type: none"> <li>平均層厚は30cm程度。</li> <li>やや粘性あり、しまりもある。皇子スコリア(褐色:Hue7.5YR4/6) 5mm~2cmを少量含む。</li> </ul>
VIIb層	オリーブ褐色土 (Hue2.5Y4/3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>牛の脛火山灰上部の一次堆積層である。</li> <li>平均層厚は50cm程度。</li> <li>やや粘性あり、しまりもある。5mm程度の明赤褐色(Hue10YR6/8)の粒子を10%含む。下層部に鬼界アカホヤ火山灰を少量含む。</li> </ul>
	明黄褐色土 (Hue10YR6/8)	<ul style="list-style-type: none"> <li>鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)の一次堆積層</li> <li>平均層厚は50cm程度。</li> <li>やや粘性あり、しまりもある。全体的に満遍なくきれいな明黄褐色である。</li> </ul>
IX層	黒褐色土 (Hue10YR3/1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>牛の脣火山灰下部の一次堆積層である。</li> <li>平均層厚は30cm程度。</li> <li>やや粘性あり、ややしまりもある。全体としては固結しておりかなり堅い。粘性が少しある。</li> </ul>
	黒色土 (Hue10YR1.7/1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>平均層厚は30cm程度。</li> <li>やや粘性あり、ややしまりもある。5mm~1cm程度の褐色(Hue7.5YR4/4)の粒子を10%含む。</li> </ul>
XI層	黒褐色土 (Hue7.5YR3/1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>平均層厚は30cm程度。</li> <li>やや粘性あり、ややしまりもある。5mm~2cm程度の明褐色(Hue5YR5/8)の粒子と明黄色(Hue5YR7/6)の粒子を併せて3%含む。</li> </ul>
	黒色土 (Hue7.5YR1.7/1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>平均層厚は30cm程度。</li> <li>粘性あり、ややしまりもある。5mm~2cm程度の明褐色(Hue5YR5/8)の粒子と明黄色(Hue5YR7/6)の粒子を併せて15%含む。</li> </ul>
XIII層	黒褐色土 (Hue10YR3/2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>平均層厚は不明。(未調査)</li> <li>ややしまりあり。粘性かなりあり。粘土質。</li> </ul>

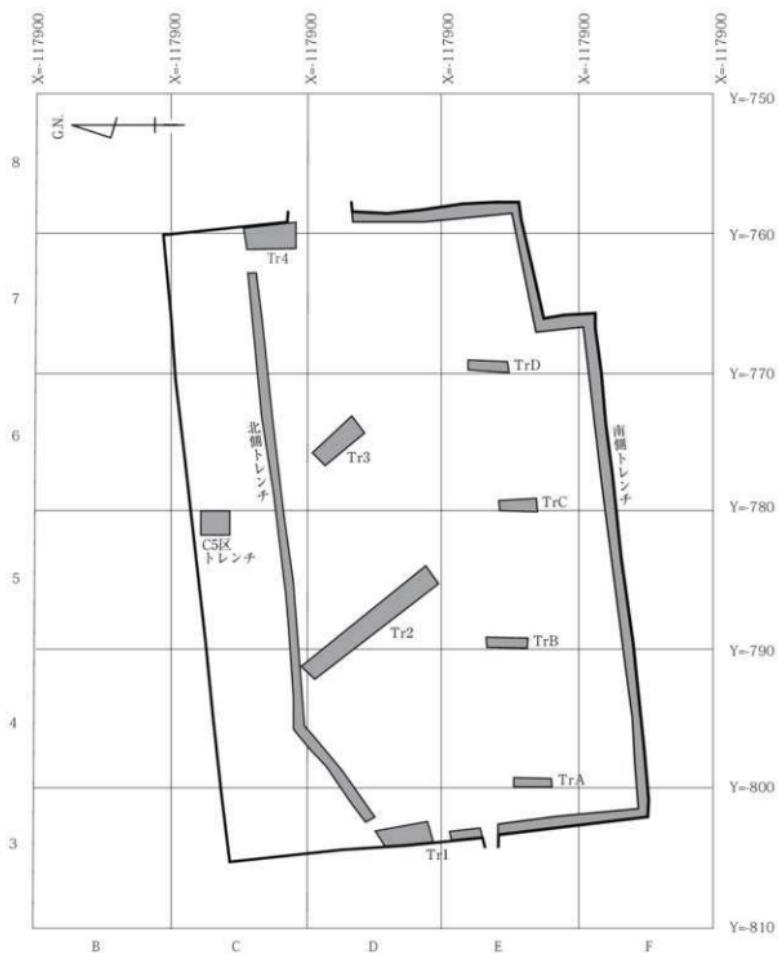


調査区西壁：土層記

- ① Hue10YR6.8 明黄褐色土、やや粘性あり、しまりもある。皇子スコリア（褪色：Hue7SYR4/6）を少量含む。
- ② Hue2.5Y4/3 オリーブ褐色土牛の肥火山灰上部の堆積層である。やや粘性あり、しまりもある。5 mm程度の明赤褐色（Hue10YR6.8）の粒子を含む。下層部に鬼界アカホヤ火山灰を少量含む。
- ③ Hue10YR6.8 明黄褐色土、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の堆積層である。やや粘性あり、しまりもある。黒色（Hue10YR17/1）のやや粘性があり、しまりもある。全体的に満遍なくきれいな明黄褐色である。
- ④ Hue10YR6.8 明黄褐色土、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の堆積層である。やや粘性あり、しまりもある。全体的に満遍なくきれいな明黄褐色である。

\* ①～Vlb層、Vb層～Ⅱ層は基本層序の通りである。

第6図 土層堆積状況



第7図 グリッド及びトレンチ配置図 1グリッド=10m

## 第2節 縄文時代前期（VI b層）の遺物

VI b層が縄文時代後期の包含層であるが、VII a層との層界に近い部分で曾畠式土器が1点検出された。1は深鉢の脚部で縦位横位に刺突文を巡らせている。

## 第3節 縄文時代後期前葉・中葉（VI b層）の遺構と遺物

### 1 概要

第10図は、縄文時代後期中葉の遺構分布を示している。VI b層が縄文時代後期の包含層である。調査区西側にかけてVII a層上面で竪穴建物跡5軒、貯蔵穴7基、土坑9基を検出した。竪穴建物跡としたものは、ほとんどが壁の立ち上がりをとらえることはできず、中央の土坑と周辺のピット群のみ検出した。その他、小穴を多数確認しているが詳細は不明である。第10図に付記した等高線は、VII a層上面での地形を示す。

### 2 縄文時代後期前葉の出土土器

VII a層より縄文時代後期前葉の土器が2点出土した。2は深鉢の口縁部で、横位、縦位の凹線文を施す。3は深鉢で口縁部下と突堤上に連続した竹管による連続刺突文を施す。

### 3 竪穴建物跡と出土遺物

#### ① 1号竪穴建物跡【SA1、第11図】と出土遺物【第12図】

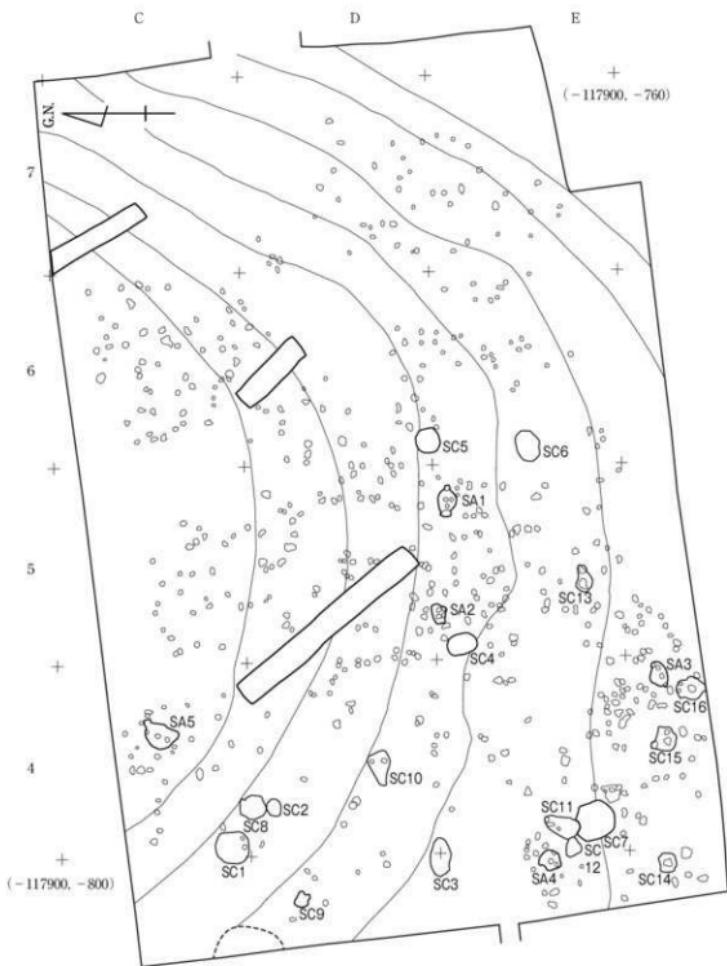
SA1は、E5グリッド北東部を中心に検出された。床面はVII a層となる。住居の形態は不明だが、類例から円形プランと推測している。検出面から床面までの深さは最深部で38cmとなる。住居内の中央土坑での焼土等は確認できなかったが、この部分が炉の役割を果たしていた可能性も考えられる。中央土坑両脇に小穴2基、中央土坑中央部に小穴3基、計5基の小穴を確認することができた。また、中央土坑の周囲には16基の小穴を確認することができた。

遺構に伴う遺物を第5図に示した。出土遺物は、土器1点である。4は鉢の口縁部で、数条の沈線文、2条の沈線文の間に連続貝殻腹縁文がある。後述するIV類に分類される。



第8図 包含層出土遺物  
土器実測図①  
(縄文前期、S=1/3)

第9図 包含層出土遺物土器実測図②  
(縄文後期、S=1/3)



第10図 広原第1遺跡遺構分布 (VII a面) S=1/250

#### ②2号竪穴建物跡【S A 2、第13図】

S A 2は、E 5 グリッド北西側を中心には検出された。床面はVII a層となる。住居の形態は不明だが、類例から円形プランと推測している。検出面から床面までの深さは最深部で42cmとなる。住居内の中央土坑での焼土等は確認できなかったが、この部分が炉の役割を果たしていた可能性も考えられる。中央土坑の南西側に1基、中央土坑稜線上に2基、中央土坑中央部に小穴2基、計5基の小穴を確認することができた。また、中央土坑の周囲には15基の小穴を確認することができた。

#### ③3号竪穴建物跡【S A 3、第14図】と出土遺物【第15図】

S A 3は、F 4 グリッド北東部を中心には検出された。床面はVII a層となる。住居の形態は不明だが、類例から円形プランと推測している。検出面から床面までの深さは最深部で68cmとなる。住居内の中央土坑での焼土等は確認できなかったが、この部分が炉の役割を果たしていた可能性も考えられる。中央土坑両脇に小穴2基、中央土坑稜線上に1基、中央土坑中央部に小穴2基、計5基の小穴を確認することができた。また、中央土坑の周囲には12基の小穴を確認することができた。S C 16が近接して存在する。

遺構に伴う遺物を第8図に示した。出土遺物で図化可能なものは、土器1点である。5は深鉢の口縁部で、斜位の刺突文を施す。後述するI a類に分類される。

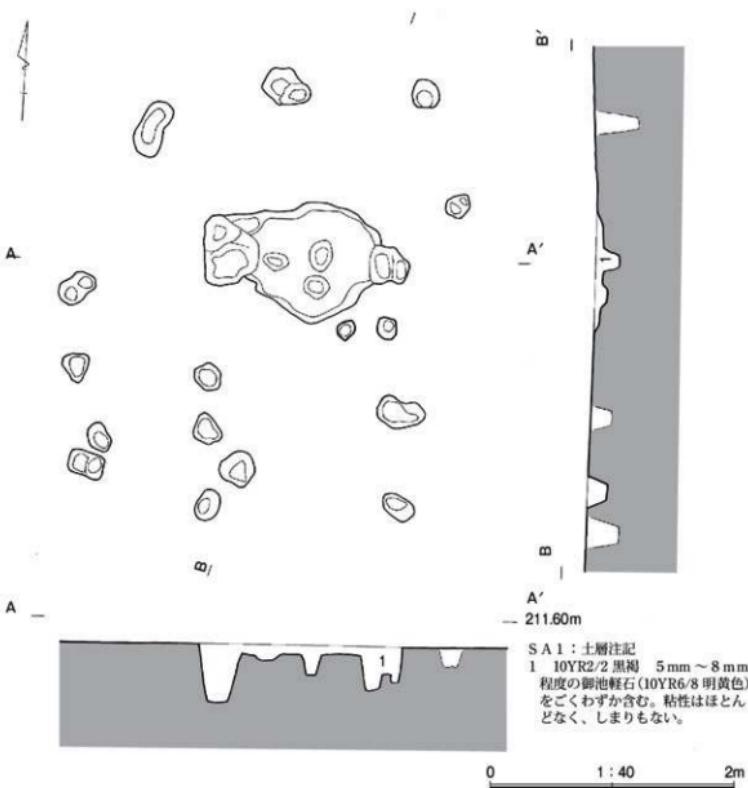
#### ④4号竪穴建物跡【S A 4、第16図】

S A 4は、E 4 グリッド杭地点とF 4 グリッド杭地点の間で検出された。床面はVII a層となる。住居の形態は不明だが、類例から円形プランと推測している。検出面から床面までの深さは最深部で60cmとなる。住居内の中央土坑での焼土等は確認できなかったが、この部分が炉の役割を果たしていた可能性も考えられる。中央土坑主軸線上に小穴1基、中央土坑内に小穴2基、計3基の小穴を確認することができた。また、中央土坑の周囲には14基の小穴を確認することができた。遺構に伴う遺物は検出されなかった。

#### ⑤5号竪穴建物跡【S A 5、第17図】と出土遺物【第18図】

S A 5は、C 4 グリッドで検出された。床面はVII a層となる。住居の形態は不明だが、類例から円形プランと推測している。検出面から床面までの深さは最深部で56cmとなる。住居内の中央土坑での焼土等は確認できなかったが、この部分が炉の役割を果たしていた可能性も考えられる。中央土坑稜線上に小穴2基、中央土坑中央部に小穴2基、計4基の小穴を確認することができた。また、中央土坑の周囲には17基の小穴を確認することができた。北側に地山のわずかな傾斜、立ち上がりが認められる。

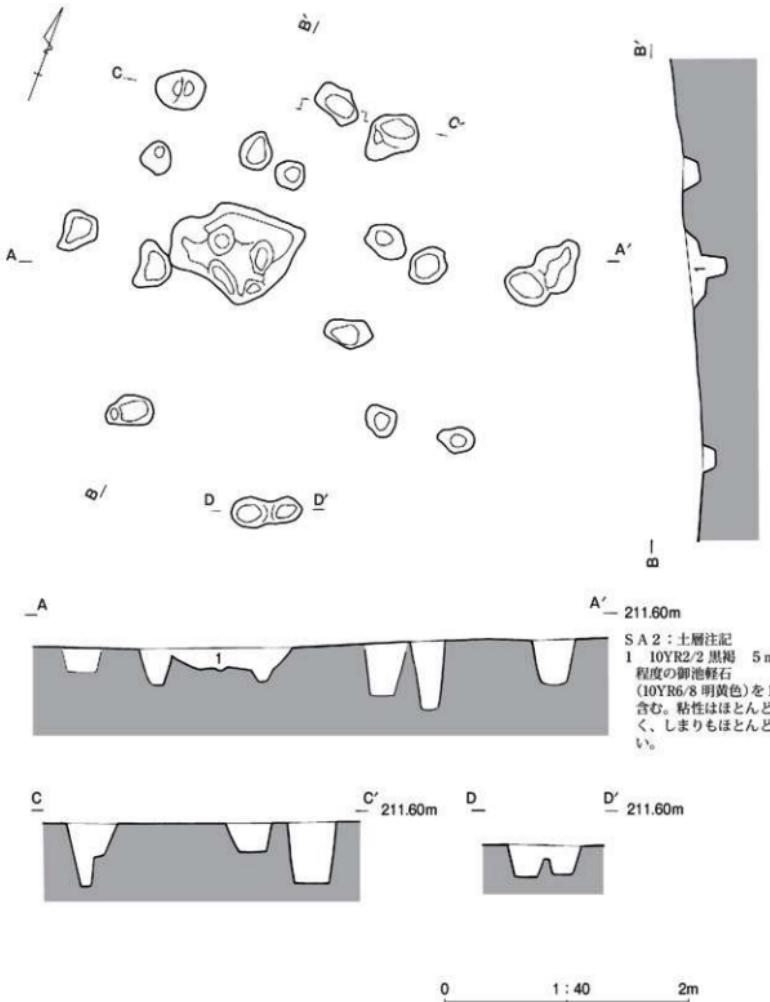
遺構に伴う遺物を第11図に示した。出土遺物は土器6点である。6は深鉢の無文土器で刺突文を施し、後述するI a類に分類される。7は深鉢で口縁部は斜位の貝殻腹縁文を施し、I a類に分類される。8は小鉢で口縁部は太い短沈線を施し、I a類に分類される。9は深鉢で口縁部の両端に連続刺突文、中央に短沈線を施し、I b類に分類される。10は深鉢で口縁部の両端に刺突文、中央に短凹線文と1条の沈線文を施し、I b類に分類される。11は深鉢で無文土器であり、I e類に分類される。



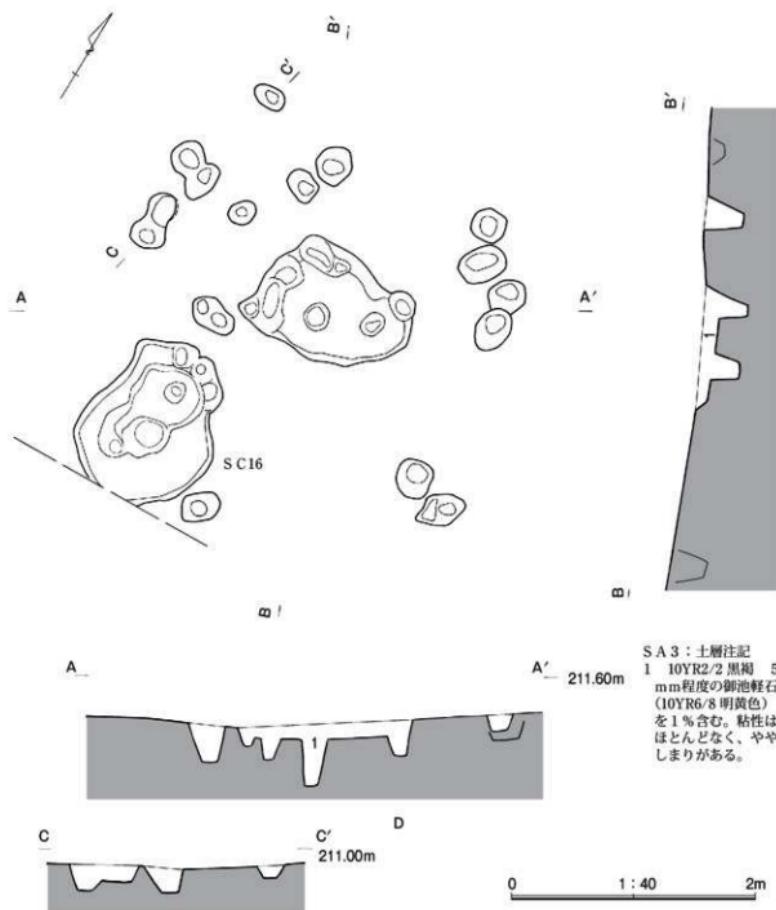
第11図 1号竪穴建物跡実測図 S=1/40



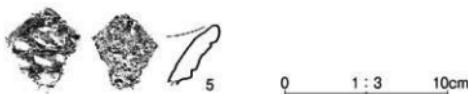
第12図 1号竪穴建物跡出土遺物実測図 S=1/3



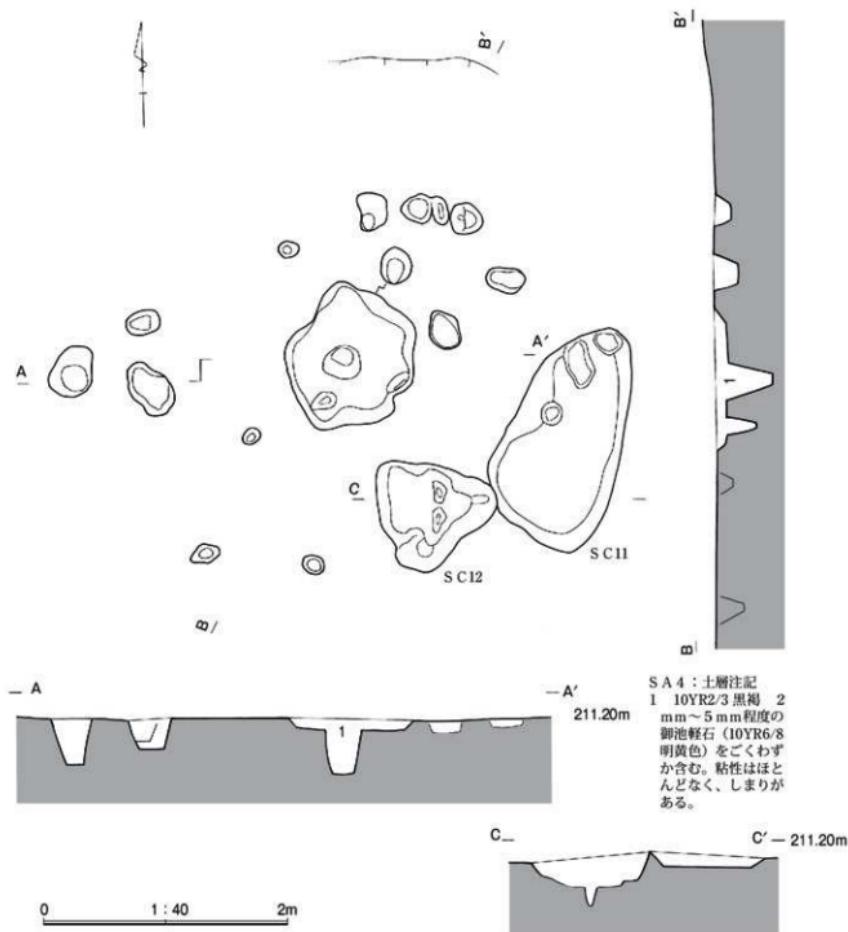
第13図 2号竪穴建物跡実測図 S=1/40



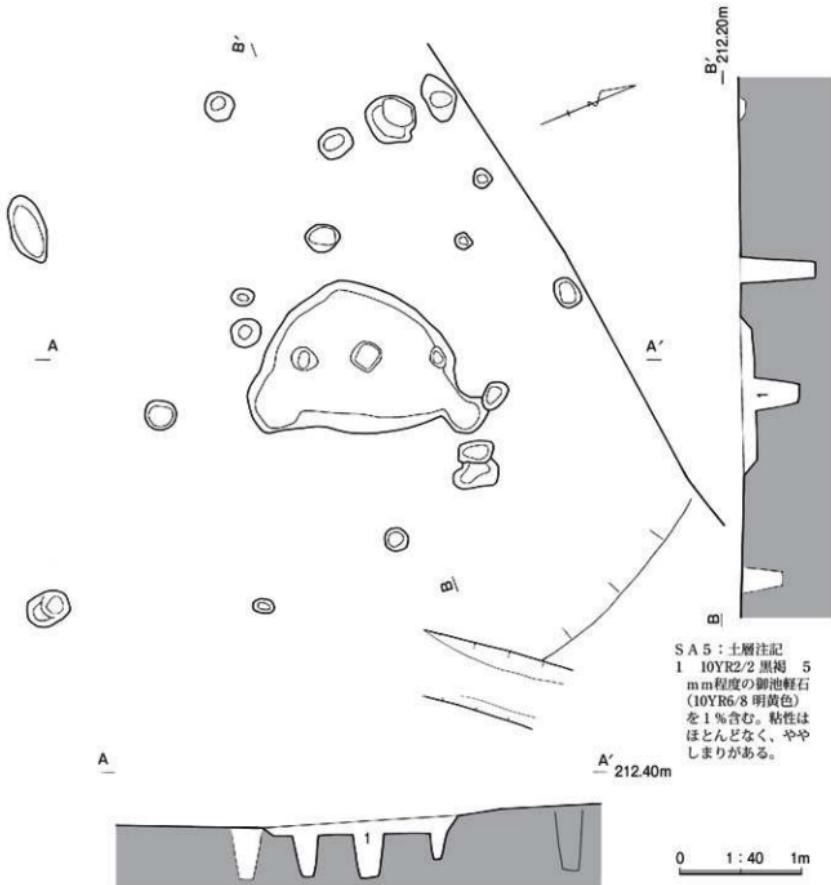
第14図 3号竪穴建物跡実測図 S=1/40



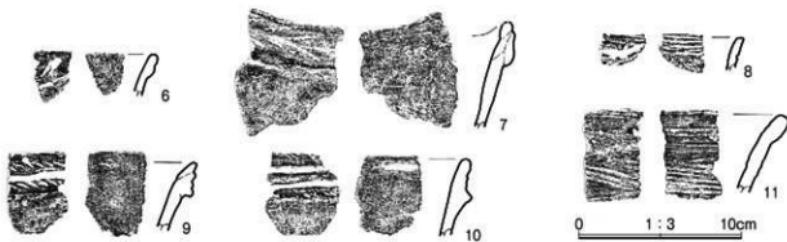
第15図 3号竪穴建物跡出土遺物実測図 S=1/3



第16図 4号竪穴建物跡実測図 S=1/40



第17図 5号竪穴建物跡実測図 S=1/40



第18図 5号竪穴建物跡出土遺物実測図 S=1/3

## 4 土坑と出土遺物

### ①1号土坑【SC1、第19図】と出土遺物【第20図】

SC1は、C4グリッド南西部で検出した。床面はVIIa層となる。直径1.18m～1.32mの円形プランの土坑である。検出面から底面までの深さは83cmである。縦断面は平坦な底面から内湾気味に立ち上がり、中位から外反するフラスコ状の形態となる。埋土は、基本土層のVIb層、VIIa層、VIIb層である。

遺構に伴う遺物を第13図に示した。出土遺物は、土器6点を図化した。12は深鉢で口縁部は連続刺突文を施し、後述するIa類に分類される。13は深鉢で口縁部は貝殻押引文を施し、Ia類に分類される。14は深鉢で口縁部は沈線文、貝殻腹線文、刺突文で飾られており瘤状の飾りもあり、II類に分類される。15は深鉢で口縁部は無文であり、Ie類に分類される。16は円盤形土製品で口縁部は無文、市来式土器片で作成されている。

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、1号土坑中の炭化材では $3565 \pm 20$ 年BP( $2\sigma$ の曆年代でBC2010～1990, 1980～1870, 1850～1820, 1800～1780年)の年代値が得られた。種実分析の結果、コナラ属・シイ属?の子葉4、イチイガシの子葉1が同定された。また、土坑中から採取された炭化材は樹種同定の結果、散孔材であることが分かった。

上記の特徴と出土した種実より、1号土坑は、貯蔵穴であると推定している。

### ②2号土坑【SC2、第21図】と出土遺物【第22図】

SC2は、D4グリッド北西部で検出した。床面はVIIa層となる。直径0.93m～1.13mの円形プランの土坑である。検出面から底面までの深さは91cmである。縦断面は平坦な底面から内湾気味に立ち上がり、中位から外反するフラスコ状の形態となる。埋土は、基本土層のVIb層、VIIa層、VIIb層である。

遺構に伴う遺物を第15図に示した。出土遺物は、土器10点石器3点を図化した。17は深鉢で口縁部は連続刺突文を施し、後述するIa類に分類される。18は深鉢で口縁部は太目の短四線文を、口唇部は1条の四線文を施し、Ia類に分類される。19は深鉢で口縁部は斜位の太目の沈線文であり、三角断面部分に連続刺突文を施し、Ib類に分類される。20は深鉢で、口縁部の両端に連続刺突文、その中に3条の沈線文、沈線文の途中に縦位に並ぶ深めの刺突文を施し、Ib類に分類される。21は深鉢で口縁部は2条の刺突文、その下に連続刺突文、波長部に沈線文を施し、Ib類に分類される。22は深鉢で口唇部は2条の沈線文、口縁部は波状の突帯文、突帯文状には刺突文を施し、突帯文の下にも沈線文を巡らして飾り、Ic類に分類される。23は深鉢で口縁部は無文であり、口唇部は連続刺突文であり、Id類に分類される。24は深鉢で無文土器であり、Ie類に分類される。25は深鉢で無文土器であり、Ie類に分類される。26は深鉢で底部は器壁が薄く直立に立ち、無文、平底である。Ie類に分類される。27は深鉢で胴部は渦巻き状の沈線文を施し、IV類に分類される。

石器は、28はチャート製の打製石器であり、全体の形状は二等辺三角形である。基部形態からは深い正三角形になっている。29は敲石・磨石であり、砂岩製で周縁全面に敲打痕が認められる。表裏両面は殆どが磨面である。折損後も使用している。30は安山岩製のスクレイバーである。

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、2号土坑中の炭化種実(コナラ属)では $3585 \pm 20$ 年BP(BC2020～1990, 1980～1880年)の年代値が得られた。種実分析の結果、コナ

ラ属10、トチノキ（？）2、ササゲ属1、ヒシ（？）1が同定された。また、土坑中から採取された炭化材は樹種同定の結果、カヤであることが分かった。

上記の特徴と出土した種実より、2号土坑は、貯蔵穴であると推定している。

#### ③3号土坑【S C 3、第23図】と出土遺物【第24図】

S C 3は、E 4 グリッド杭地点で検出した。床面はVII a層となる。直径1.48m～1.88mの円形プランの土坑である。検出面から底面までの深さは74cmである。縦断面は平坦な底面から内湾気味に立ち上がり、中位から外反するプラスコ状の形態となる。埋土は、基本土層のVI b層、VII a層、VIII層である。

遺構に伴う遺物を第17図に示した。出土遺物は、土器9点を図化した。31は深鉢で口縁部は横位の貝殻腹縁文を施し、底部は器壁が厚く直立に立つ。後述する I a 類に分類される。32は深鉢で口縁部は斜位の貝殻腹縁文を施す。I a 類に分類される。33は深鉢で三角形断面の両脇に連続貝殻腹縁文を施す。その下に斜位の短沈線文を施し、I c 類に分類される。34、35は深鉢で無文土器である。I e 類に分類される。37は鉢で胴部は横位、渦巻き、斜位の沈線文を巡らし、部分的な連続刺突文を施す。瘤状の突起があり、裏面に連続沈線文を施す。IV類に分類される。

36は台付き皿形土器で底部は器壁が厚く斜めに立つ。無文で、白色顔料が付着している。VIIに分類される。38は円盤形土製品で、胴部は太目の沈線文を数条施し、土器片で作成されている。39は円盤形土製品で、胴部は無文で、市来式土器片で作成されている。

種実分析の結果、コナラ属1が同定された。また、土坑中から採取された炭化材は樹種同定の結果、ヤブツバキであることが分かった。

上記の特徴と出土した種実より、3号土坑は、貯蔵穴であると推定している。

#### ④4号土坑【S C 4、第25図】と出土遺物【第26図】

S C 4は、E グリッド北西部で検出した。床面はVII a層となる。直径1.12m～1.30mの円形プランの土坑である。検出面から底面までの深さは80cmである。縦断面は平坦な底面から内湾気味に立ち上がり、中位から外反するプラスコ状の形態となる。埋土は、基本土層のVI b層、VII a層、VIII層である。

遺構に伴う遺物を第19図に示した。出土遺物は土器8点を図化した。土器は、40は深鉢で口縁部の両端に連続刺突文、中央に2条の沈線文を施し、後述する I b 類に分類される。41は深鉢で、口縁部の両端に連続刺突文、中央に2条の凹線文、途中に三日月状の刺突文を施し、I b 類に分類される。42は深鉢で、口縁部は四点、凹線があり、三角形断面に連続刺突文を施し、I b 類に分類される。43は深鉢で口縁部の両端に連続刺突文、中に四点、凹線を施し、I b 類に分類される。44は深鉢で口縁部の両端に連続刺突文、中に刺突文、四点、凹線を施し、I b 類に分類される。45は深鉢で口縁部の両端に連続刺突文、中央に2つの刺突文を施し、I b 類に分類される。46は深鉢で口縁部は無文、口唇部は刻目刺突文を施し、I d 類に分類される。

47は深鉢で口縁部、胴部は無文、口唇部は1条の沈線文で、I e 類に分類される。

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、4号土坑中の炭化材では $3660 \pm 20$ 年BP（B C 2140～1950年）の年代値が得られた。また、土坑中から採取された炭化材は樹種同定の結果、ヤブツバキであることが分かった。

上記の特徴と出土した種実より、4号土坑は、貯蔵穴であると推定している。

#### ⑤5号土坑【SC5、第27図】と出土遺物【第28図】

SC5は、E6グリッド杭東側で検出した。床面はVIIa層となる。直径1.25m～1.47mの円形プランの土坑である。検出面から底面までの深さは77cmである。縦断面は平坦な底面から内湾気味に立ち上がり、中位から外反するフラスコ状の形態となる。埋土は、基本土層のVIb層、VIIa層、VII層である。

遺構に伴う遺物を第21図に示した。出土遺物は、土器6点と石器1点を図化した。土器は、48は深鉢で口縁部は斜位の貝殻腹縁文、波上部の口唇部に貝殻腹縁文を施し、後述するIa類に分類される。49は深鉢で口縁部は連続刺突文を施し、Ia類に分類される。50は深鉢で底部は無文、まっすぐ立つ。平底であり、Id類に分類される。51は深鉢で胸部は無文であり、Id類に分類される。52は深鉢で口縁部は、横位、縦位、渦巻き状の沈線、一部磨消縄文もあり、IV類に分類される。赤色顔料を付着する。53は円盤形土製品で、胸部、無文、市来式土器片で作成されている。

石器は、2点出土している。54、55はホルンフェルス製の磨製石斧である。

種実分析の結果、コナラ属1、サンショウウ属1が同定された。また、土坑中から採取された炭化材は樹種同定の結果、散孔材であることが分かった。

上記の特徴と出土した種実より、5号土坑は、貯蔵穴であると推定している。

#### ⑥6号土坑【SC6、第29図】と出土遺物【第30図】

SC6は、E6グリッド西側で検出した。床面はVIIa層となる。直径1.41m～1.76mの円形プランの土坑である。検出面から底面までの深さは90cmである。縦断面は平坦な底面から内湾気味に立ち上がり、中位から外反するフラスコ状の形態となる。埋土は、基本土層のVIb層、VIIa層、VII層である。

遺構に伴う遺物を第23図に示した。出土遺物は、土器3点と石器2点を図化した。土器は、56は深鉢で口縁部は貝殻押引文を施し、後述するIa類に分類される。57は深鉢で口縁部は貝殻腹縁文を施し、Ia類に分類される。58は深鉢で口縁部の両端に連続刺突文、中央に数条の沈線文、途中それを切るよう大きな凹点を施し、Ib類に分類される。

石器は、2点出土している。59、60はホルンフェルス製の磨製石斧である。

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、6号土坑中の炭化種実(ササゲ属)では $3595 \pm 20$ 年BP(B.C. 2030～1890, 1950～1860年)の年代値が得られた。種実分析の結果、コナラ属6、カラスザンショウウ1、ミズキ1、ササゲ属2が同定された。また、土坑中から採取された炭化材は樹種同定の結果、コナラ属アカガシ亜属であることが分かった。

上記の特徴と出土した種実より、6号土坑は、貯蔵穴であると推定している。

#### ⑦7号土坑【SC7、第31図】と出土遺物【第32図】

SC7は、E4グリッド南西部で検出した。床面はVIIa層となる。直径1.78m～1.95mの円形プランの土坑である。検出面から底面までの深さは51cmである。縦断面は平坦な底面から外湾気味に立ち上がる。埋土は、基本土層のVIb層、VIIa層、VII層である。

遺構に伴う遺物を第24図に示した。出土遺物は、土器8点を図化した。61は深鉢で口縁部は凹線文を

巡らし、I a 類に分類される。62は深鉢で口縁部は連続刺突文を施し、後述する I a 類に分類される。63は深鉢で口縁部の両端に連続した刺突文、中央に 3 条の凹線文、凹線文と凹線文の間に斜位の短貝殻腹縁文を施し、I b 類に分類される。64は鉢で口縁部は短沈線文を巡らせ、断面三角形凸部の上下に斜位の連続貝殻腹縁文を施し、I c 類に分類される。65は小鉢で、口縁部は横位の連続刺突文を数条施し橋手があり、I c 類に分類される。66は台付皿形土器の台部で連続刺突文と短沈線文を施し、VII 類に分類される。68は深鉢で口縁部は無文、口唇部は連続貝殻腹縁文を施し、I e 類に分類される。67は円盤形土製品で、胴部、無文、市来式土器片で作成されている。

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、7号土坑中の炭化種実（コナラ属）では $3540 \pm 20$ 年 BP (BC 1850 ~ 1770年) の年代値が得られた。種実分析の結果、コナラ属 9 が同定された。また、土坑中から採取された炭化材は樹種同定の結果、コナラ属アカガシ亜属であることが分かった。

S C 1 ~ S C 6 とは異なり、断面がフラスコ状とはならないが、上部が削平されていた（もしくはどちらも外反しなかった）可能性もある。ここでは、上記の特徴と出土した種実より、7号土坑は、貯蔵穴であると推定しておきたい。

#### ⑧8号土坑【S C 8、第33図】と出土遺物【第34図】

S C 8 は、D 4 グリッド東側に位置する。床面は VII a 層となる。平面直径長軸 1.85m の不整形である。検出面から底面までの深さは 80cm である。縦断面は平坦な底面から内湾気味に立ち上がり、中位から外反するフラスコ状の形態となる。埋土は、基本土層の VI b 層である。

遺構に伴う遺物を第27図に示した。出土遺物は土器が 2 点を図化した。69は深鉢で口縁部は刺突押引文を施し、後述する I a 類に分類される。70は深鉢で口縁部は断面三角形凸部に 1 条の凹線文と連続刺突文を施し、口唇部は連続刺突文で、I b 類に分類される。

#### ⑨9号土坑【S C 9、第35図】

S C 9 は、D 3 グリッドで検出した土坑である。床面は VII a 層となる。平面直径長軸 1.88m、短軸 1.88m の不整形円形プランの土坑である。検出面から底面までの深さは 80cm である。壁は垂直に近い角度で堀り込まれている。埋土は、基本土層の VI b 層である。遺構に伴う遺物は検出されなかった。

#### ⑩10号土坑【S C 10、第36図】

S C 10 は、D 4 グリッドで検出した土坑である。床面は VII a 層となる。平面直径長軸 1.73m、短軸 1.15m で平面は不正楕円形プランの土坑である。検出面から底面までの深さは 41cm である。縦断面は平坦な底面から内湾気味に立ち上がり、中位から外反するフラスコ状の形態となる。埋土は、基本土層の VI b 層である。

#### ⑪11号土坑【SC11、第37図】と出土遺物【第38図】

S C11は、E 4 グリッド南西部で検出された土坑である。床面はVII a層となる。平面直径長軸1.87mの不正楕円形プランの土坑である。検出面から底面までの深さは10cmである。縦断面は平坦な底面から内湾気味に立ち上がり、中位から外反するフラスコ状の形態となる。埋土は、基本土層のVI b層である。

遺構に伴う遺物を第32図に示した。出土遺物は土器1点を図化した。71は台付皿形土器で直線的な台部で器壁が厚く連続した刺突文を2段に施す。後述するVII類に分類される。

#### ⑫12号土坑【SC12、第39図】

S C12は、F 4 グリッド杭北側で検出した遺構である。床面はVII a層となる。平面直径長軸0.98mの不整楕円形プランの土坑である。検出面から底面までの深さは42cmである。縦断面は平坦な底面から内湾気味に立ち上がり、中位から外反するフラスコ状の形態となる。埋土は、基本土層のVI b層である。遺構に伴う遺物は検出されなかった。

#### ⑬13号土坑【SC13、第40図】

S C13は、E 5 グリッドで検出した土坑である。床面はVII a層となる。平面直径長軸1.43mの不整形である。検出面から底面までの深さは39cmである。縦断面は平坦な底面から内湾気味に立ち上がり、中位から外反するフラスコ状の形態となる。埋土は、基本土層のVI b層である。遺構に伴う遺物は検出されなかった。

#### ⑭14号土坑【SC14、第41図】

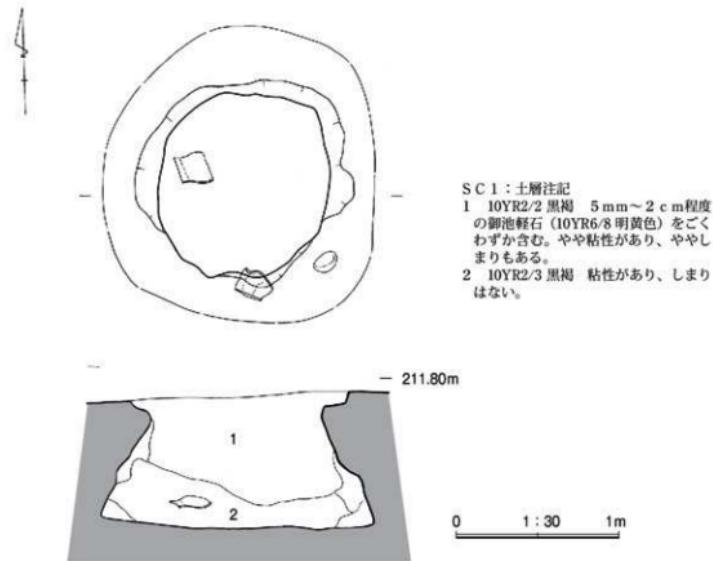
S C14は、F 3 グリッド北東部で検出した土坑である。床面はVII a層となる。平面直径長軸1.07mの楕円形プランの土坑である。検出面から底面までの深さは24cmである。縦断面は平坦な底面から内湾気味に立ち上がり、中位から外反するフラスコ状の形態となる。遺構に伴う遺物は検出されなかった。

#### ⑮15号土坑【SC15、第42図】

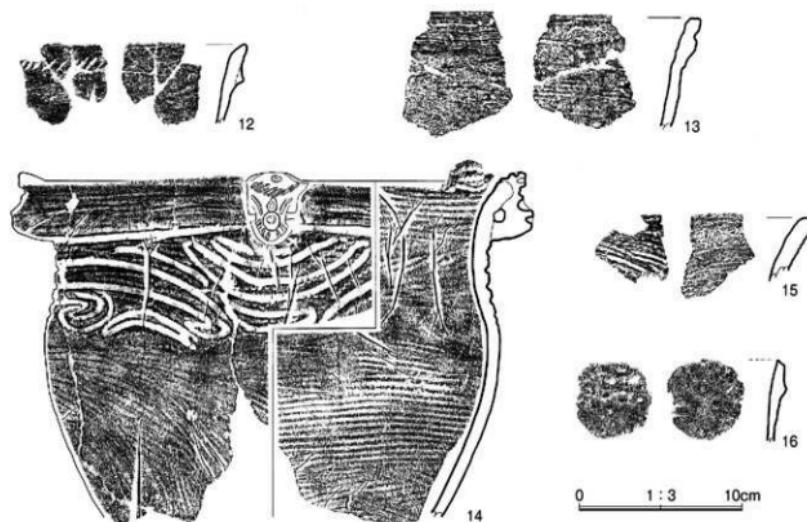
S C15は、F 3 グリッドで検出した土坑である。床面はVII a層となる。平面直径長軸1.29mの不整形である。検出面から底面までの深さは83cmである。縦断面は平坦な底面から内湾気味に立ち上がり、中位から外反するフラスコ状の形態となる。埋土は、基本土層のVI b層である。遺構に伴う遺物は検出されなかった。

#### ⑯16号土坑【SC16、第43図】

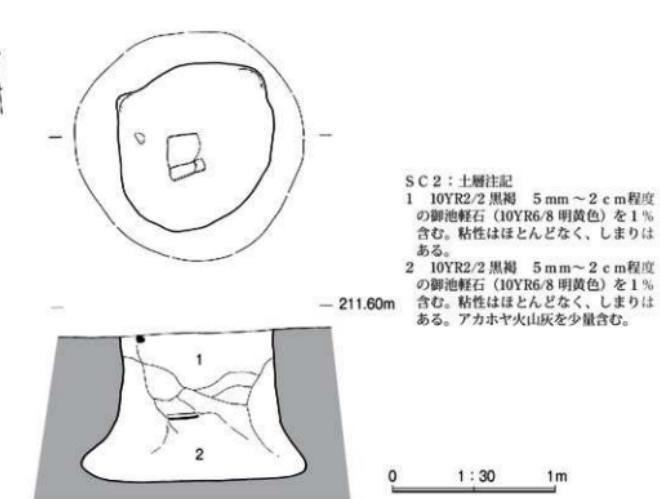
S C16は、F 4 グリッドに位置する。床面はVII a層となる。平面直径長軸1.55m（推定）の楕円形プランの土坑である。検出面から底面までの深さは80cmである。縦断面は平坦な底面から内湾気味に立ち上がり、中位から外反するフラスコ状の形態となる。埋土は、基本土層のVI b層である。遺構に伴う遺物は検出されなかった。



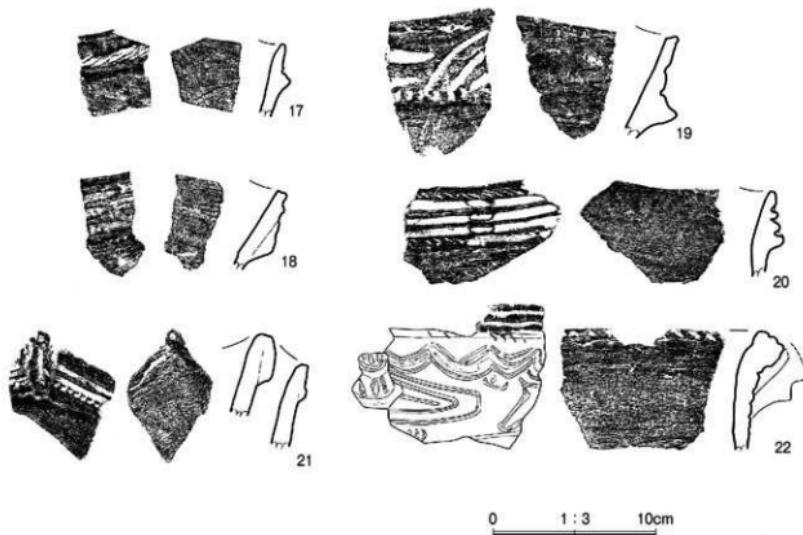
第19図 1号土坑実測図 S=1/30



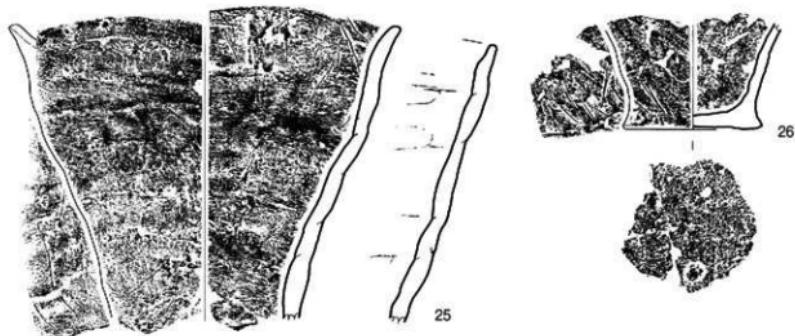
第20図 1号土坑出土遺物実測図 S=1/3



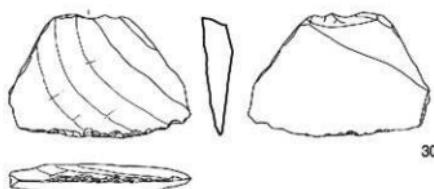
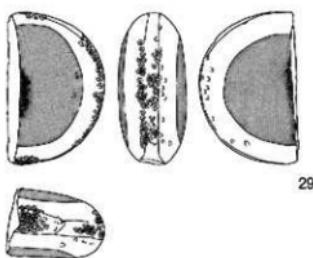
第21図 2号土坑実測図 S=1/30



第22図① 2号土坑出土遺物実測図 S=1/3

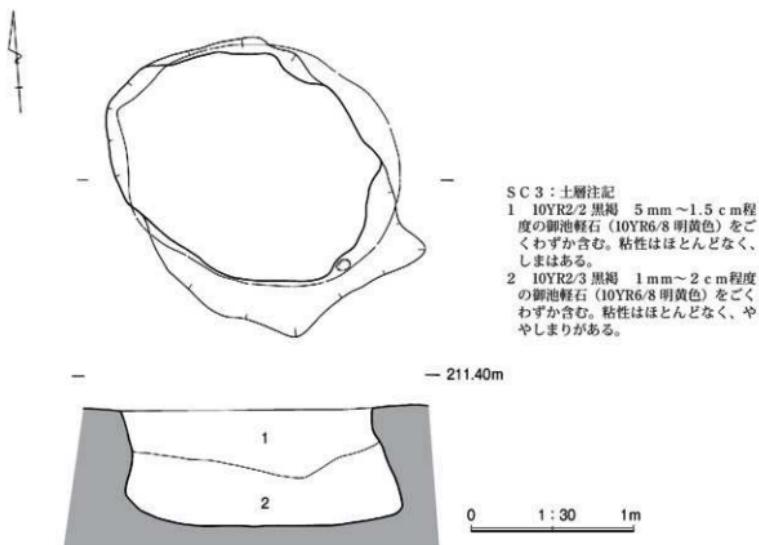


0 (28のみ 1:2) 5cm

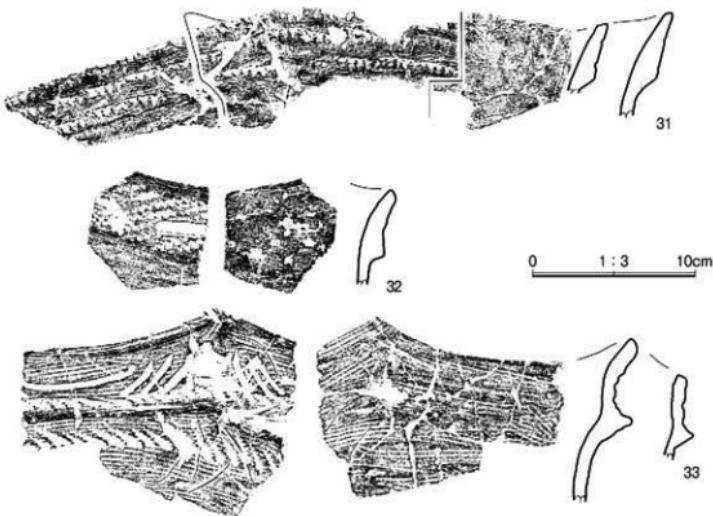


0 1:3 10cm

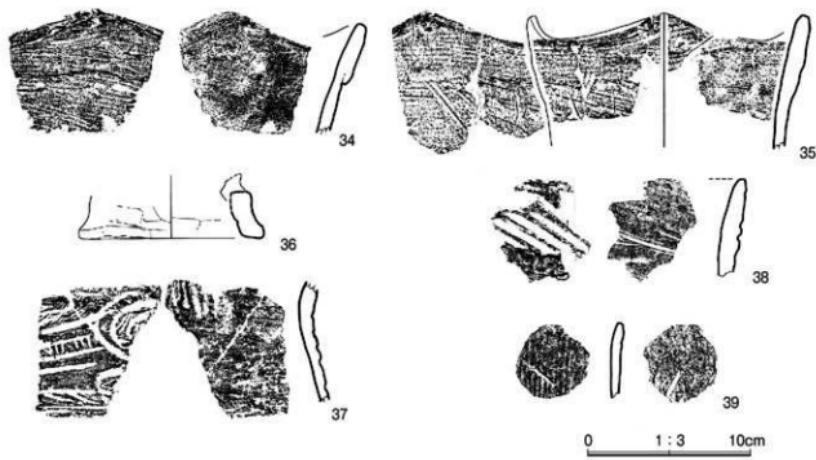
第22図② 2号土坑出土遺物実測図 S=1/3



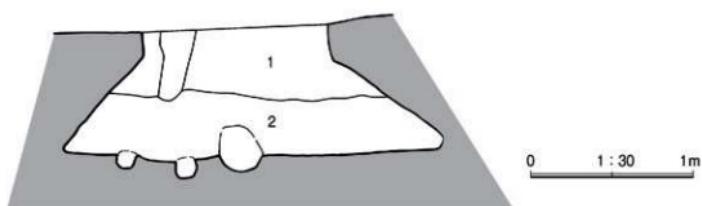
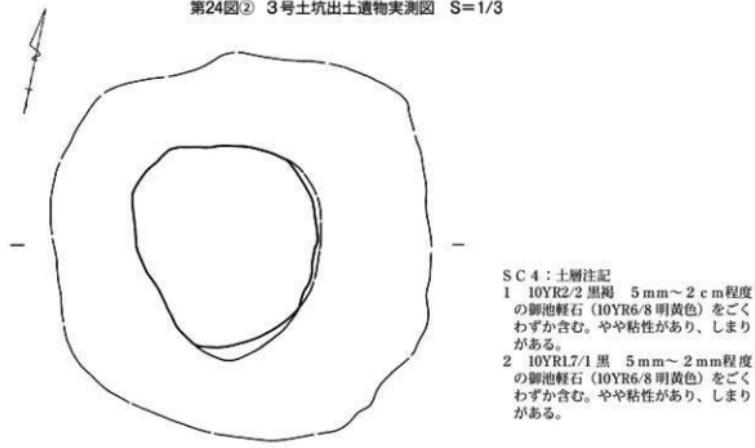
第23図 3号土坑実測図 S=1/30



第24図① 3号土坑出土遺物実測図 S=1/3



第24図② 3号土坑出土遺物実測図 S=1/3

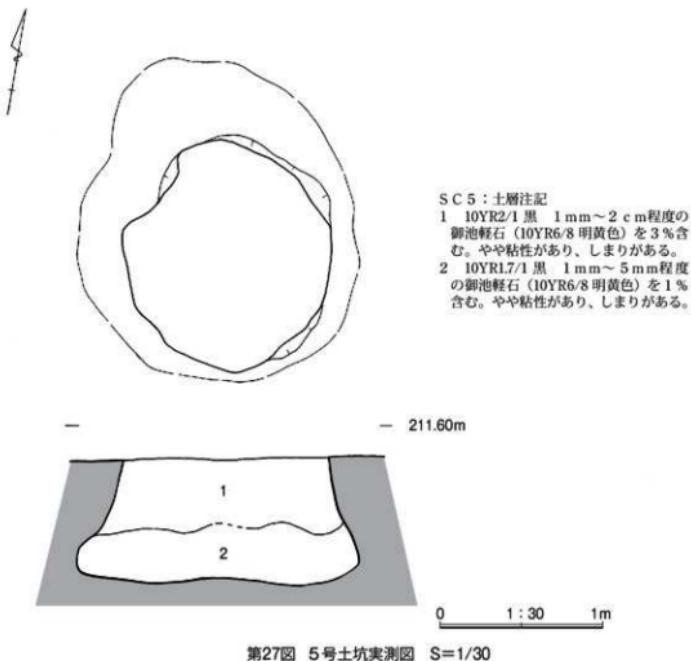


第25図 4号土坑実測図 S=1/30

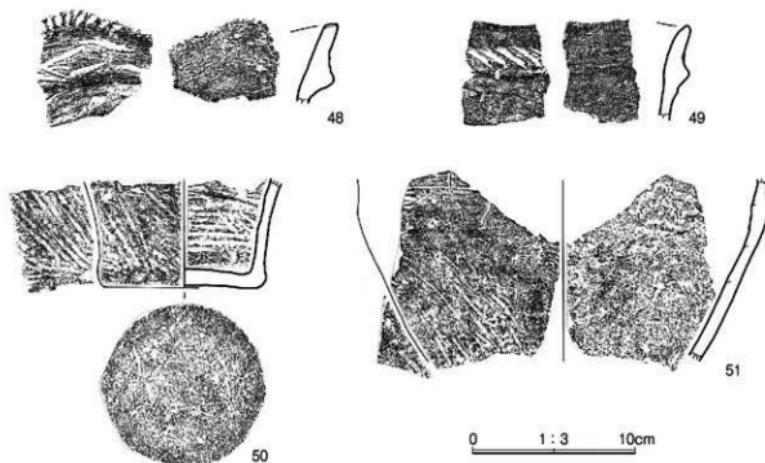


0 1 : 3 10cm

第26図 4号土坑出土遺物実測図 S=1/3



第27図 5号土坑実測図 S=1/30



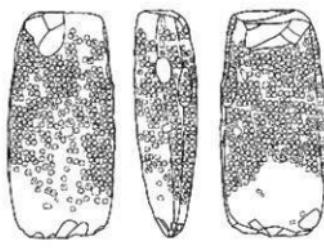
第28図① 5号土坑出土遺物実測図 S=1/3



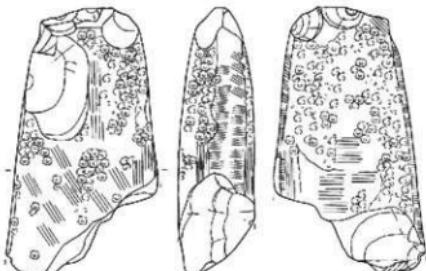
52



53



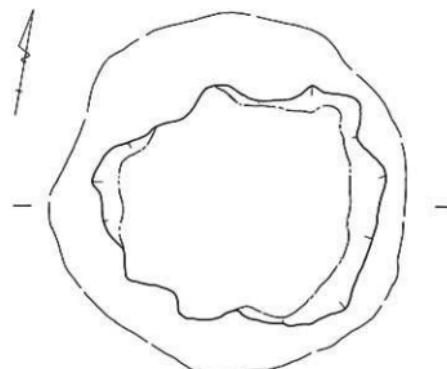
54



55

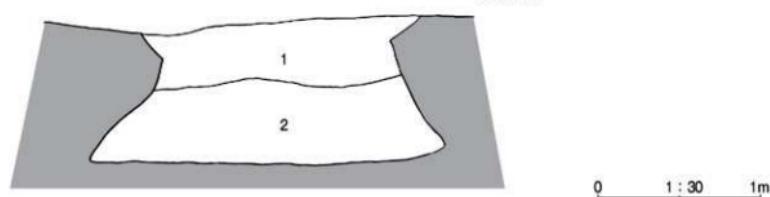
第28図② 5号土坑出土遺物実測図 S=1/3

0 1 : 3 10 cm (52~54)  
0 1 : 2 5 cm (55)

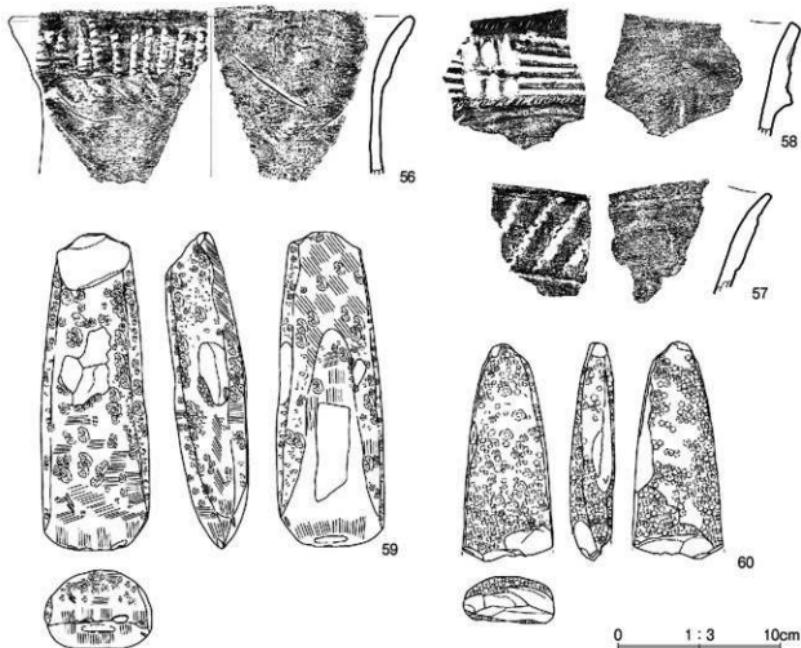


S C 6 : 土層注記  
1 10YR2/2 黒褐色 5 mm ~ 2 cm 程度の御池軽石 (10YR6/8 明黄色) を 2 % 含む。やや粘性があり、ややしまりがある。

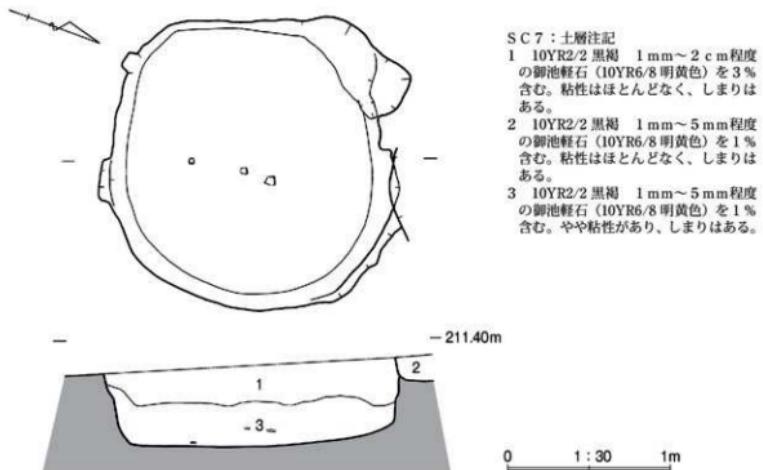
2 10YR2/1 黒 2 mm ~ 1 cm 程度の御池軽石 (10YR6/8 明黄色) を 2 % 含む。粘性があり、しまりもある。



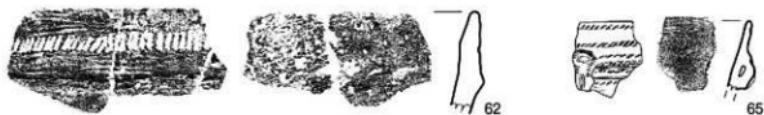
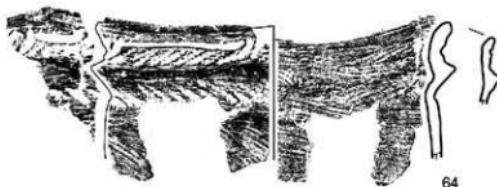
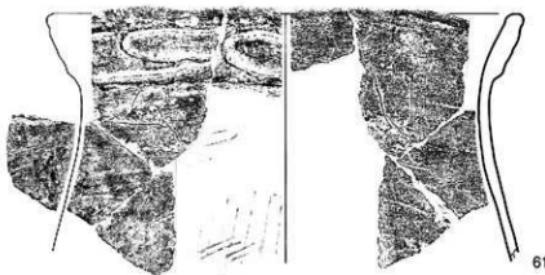
第29図 6号土坑実測図 S=1/30



第30図 6号土坑出土遺物実測図 S=1/3

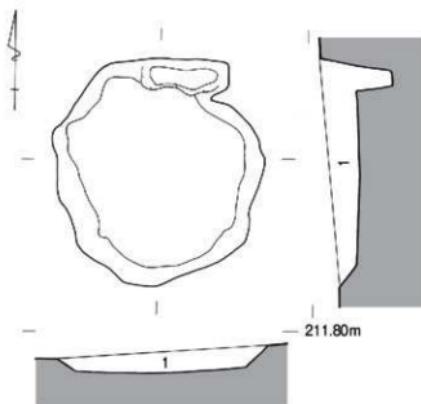


第31図 7号土坑実測図 S=1/30



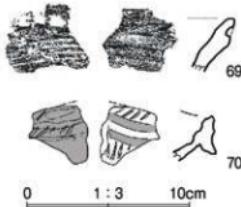
0 1 : 3 10cm

第32図 7号土坑出土遺物実測図 S=1/3

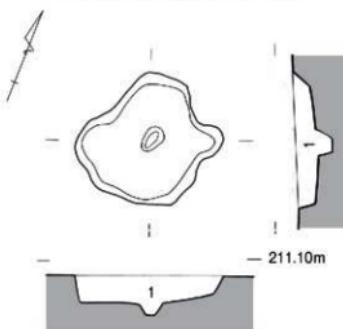


第33図 8号土坑実測図 S=1/30

S C 8 : 土層注記  
1 10YR2/2 黒褐 5 mm ~ 1.5cm の御池軽石  
(10YR6/8 明黄色) を 1 % 含む。粘性はほとんどなく、しまりはある。

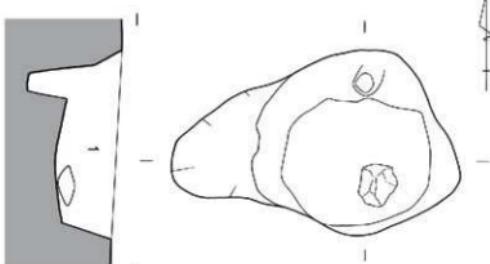


第34図 8号土坑出土遺物実測図 S=1/3



S C 9 : 土層注記  
1 10YR2/1 黒 1 cm ~ 2 cm 程度の御池軽石  
(10YR6/8 明黄色) を 3 % 含む。やや粘性があり、  
ややしまりがある。

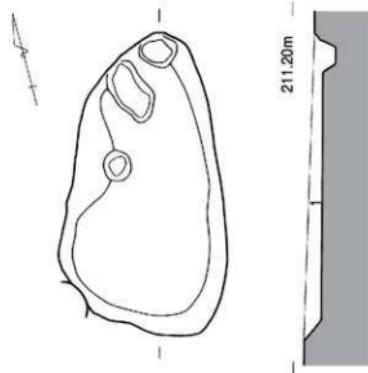
第35図 9号土坑実測図 S=1/30



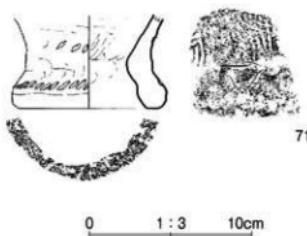
S C 10 : 土層注記  
1 10YR2/2 黒褐 5 mm 程度の御池  
軽石 (10YR6/8 明黄色) を 1 % 含む。  
やや粘性があり、しまりがある。

第36図 10号土坑実測図 S=1/30

0 1:30 1m

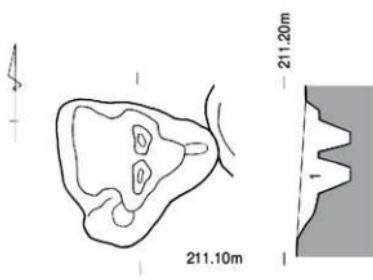


第37図 11号土坑実測図 S=1/30



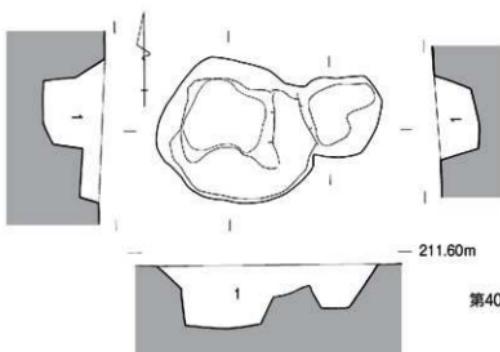
S C11 : 土層注記  
1 10YR2/2 黒褐色 1mm~5mm程度の御池  
軽石 (10YR6/8 明黄色) を1%含む。粘性は  
ほとんどなく、しまりはある。

第38図 11号土坑出土遺物実測図 S=1/3



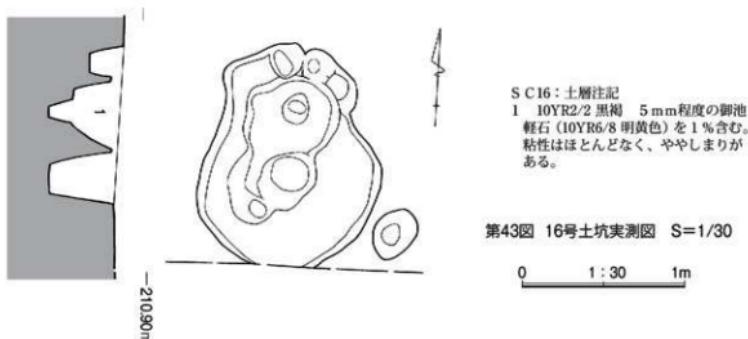
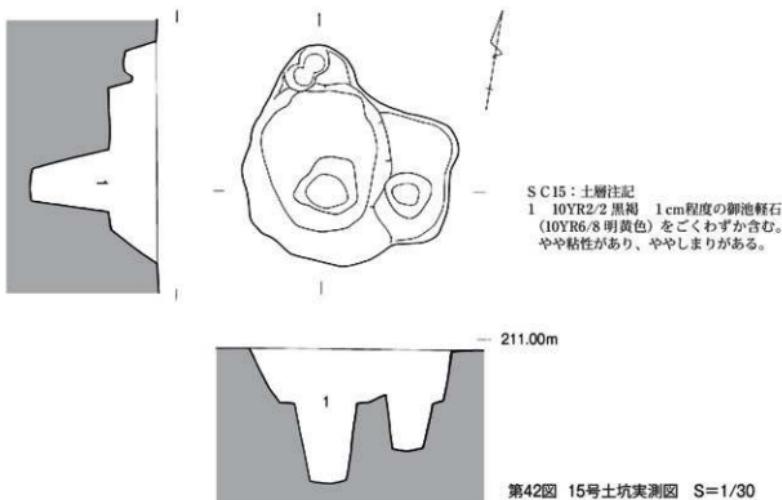
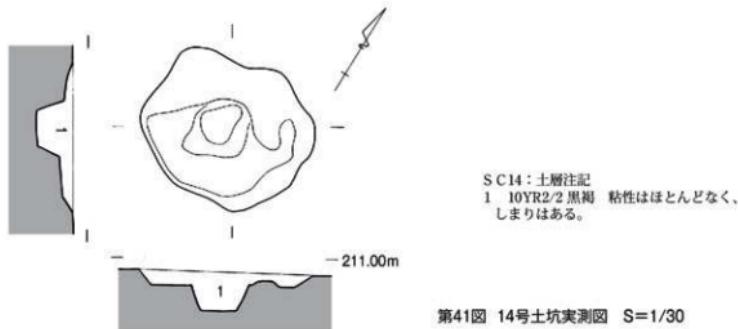
第39図 12号土坑実測図 S=1/30

S C12 : 土層注記  
1 10YR2/2 黒褐色 1mm~5mm程度の御池  
軽石 (10YR6/8 明黄色) を1%含む。粘性はほと  
んどなく、しまりはある。



第40図 13号土坑実測図 S=1/30

0 1:30 1m



## 5 包含層出土遺物（後期中葉）

### （1）土器

本遺跡VI b 層より出土した縄文土器は縄文時代後期中葉に属する土器が主体となる。それらについてこれまで研究された土器編年を基軸として、形態的特徴により鉢形・深鉢型土器をⅠ類～Ⅶ類に分類した。分類された土器類について、以下説明を行う。

本遺跡出土の鉢形・深鉢形土器を文様を中心に分類すると、貝殻文土器と磨消縄文土器に大別される。貝殻文土器は南九州系の市来式土器、草野式土器、丸尾式土器を中心としており、磨消縄文土器は北部九州系の鐘崎式土器と北久根山式土器を中心としている。その他、少量の西平式土器が出土した。

貝殻文土器は、Ⅰ類～Ⅲ類がそれに相当し、磨消縄文土器は、Ⅳ類～Ⅵ類がそれに相当する。Ⅶ類は台付皿形土器、Ⅷ類は円盤形を呈する土器である。

#### ① I 類土器

口縁部が断面三角形をなすものを基本とする。貝殻腹縁部による押圧文を基本文様として、沈線文、凹点文等を交え多彩な文様を構成する。本遺跡の主体をなす土器である。市来式に相当する。

##### I a 類土器

口縁部断面三角形部の上位のみに文様をもつ土器群である。口縁部断面三角形の外面文様帯に貝殻文、連点文、あるいは沈線文などで簡易な文様を施すものである。

72～80の口縁部は連続した貝殻腹縁文を施す。81の口縁部は斜位の貝殻腹縁押引文を施す。82の口縁部は横位の貝殻腹縁文を施す。

83～90の口縁部は連続した刺突文を施す。91、92の口縁部下は連続した半裁竹管による刺突文を施す。93の口縁部は3条の沈線文を施す。94の口縁部は3条の短沈線文を施す。

95～99の口縁部は2条の沈線文を施す。100の口縁部は横位の沈線文を施す。101の口縁部は浅い沈線文を施す。102の口縁部は波状の沈線文を施す。103の口縁部は山形の沈線文を施す。104の口縁部は横位の連続刺突文を施す。105は口縁部の両端に連続刺突文を施す。

##### I b 類土器

I a 類同様、口縁部断面三角形部の上位のみに文様をもつ土器群である。口縁部断面三角形の外面文様帯に貝殻文、沈線文、刺突文などの文様を組み合わせて文様を構成するもので、口縁部断面三角形の場所がI a 類より低くなり、文様帯の幅がI a 類より広くなる。

106～109は口縁部の両端に連続刺突文、中央に3条の沈線文を施す。110、111は口縁部の両端に連続刺突文、中央に2条の沈線文を施す。112、113は口縁部の両端に連続刺突文、中央に3条の凹線文を施し、113は中央に縱方向に凹点文も施す。114、115は口縁部の両端に連続刺突文、中央に2条の凹線文を施す。116、117は口縁部の両端に連続刺突文、中央に1条の凹線文を施す。

118の口縁部は4条の沈線文、その沈線文を弧状の沈線文が切っている。119、120の口縁部は3条の沈線文、口唇部と沈線文の下に連続刺突文を施す。

121の口縁部は3条の沈線文、口唇部に斜位の貝殻腹縁文、波長部に縱方向の刺突文を施す。122、

123の口縁部は2条の沈線文、沈線文の下に連続刺突文を施す。124の口縁部は3条の沈線文、部分的に刺突文を施す。125、126、127、128の口縁部は2条の沈線文、部分的に刺突文を施す。129の口縁部は1条の沈線文の下に連続刺突文を施す。130の口縁部は1条の沈線文の上に連続貝殻腹縁文を施す。131、132、133の口縁部は横位の沈線文と刺突文を施す。

134は沈線文を巡らせ刺突文を施す。135は斜位の沈線文、その下に連続貝殻腹縁文を施す。136は1条の凹線文、その下に部分的に連続刺突文を施す。137は突起物の側面に太い沈線文、突起物の先に凹点を施す。138の口縁部は2条の連続刺突文、口唇部は刻目刺突文、波長部に縱方向の凹点文を施す。

#### I c 類土器

口縁部断面三角形部の上位と胴部に文様をもつ土器群である。I b 類土器同様、文様帶に貝殻文、沈線文、刺突文などの文様を組み合わせて文様を構成するもので、口縁部断面三角形の場所が I b 類より低くなり、文様帶の幅が I b 類より広くなる。

139は口縁部の両端に連続貝殻腹縁文、中央に斜位、横位の短沈線文、胴部は連続貝殻腹縁文で装飾されている。140は口縁部の両端に連続刺突文を施し、口縁部、胴部は沈線文、連続刺突文、貝殻腹縁文で装飾されている。把手がある。141は口縁部の両端に連続刺突文、中央に2条の凹線文、胴部は沈線文と凹点文で装飾されている。142は口縁部の両端に連続貝殻腹縁文、その中央に3条の沈線文、胴部は沈線文で装飾されている。143は口縁部の両端に連続刺突文、中央に1条の凹線文、胴部は沈線文で装飾されている。

#### I d 類土器

口縁部断面三角形がほとんどない土器、または、明確な口縁部断面三角形を確認できない土器である。

144の口縁部は斜位の貝殻腹縁文を施す。145の口縁部は3条の沈線文を施す。146の口縁部は連続した斜位の刺突文を施す。147の口縁部は沈線文を縦位、横位に巡らす。148は口唇部に1条の凹線文を施す。149は波状部に連続刺突文を施す。150の口縁部は斜位の連続刺突文を施す。

151の口縁部は1条の半竹管刺突文を施す。152、153は無文土器である。

#### I e 類土器

口縁部断面三角形はあるが口縁部、胴部は無文の土器である。

154は口唇部に1条の沈線文を施す。155、156、157の口縁部は断面三角形を施す。158、159、160、161は無文の深鉢の底部であり平底である。

#### ② II 類土器

頸部でくびれ、口縁部へゆるやかに外反する。口唇部は丸く仕上げ頸部附近を中心に凹線文や貝殻腹縁による押圧文、刺突文を施す土器である。口唇部に刻目や刺突文を施さず、口縁部分を無文とする特徴をもつ。文様が文様帶を越えて肩部、胴部まで及ぶ。草野式に相当する。

162、163、164、165は口縁部に連続貝殻腹縁文を施す。166の口頸部は連続した貝殻腹縁文、その下に3条の沈線文、沈線文と沈線文の間に斜位の貝殻腹縁文と円形の刺突文を施し、口唇部に突起がある。

### ③Ⅲ類土器

主に貝殻文と沈線文の組み合わせである。断面三角形の肥厚部はなくなり、「く」の字型ないし、外反の口縁部となっている。丸尾式に相当する。下記の a ~ b に細分した。

#### Ⅲ a 類土器

貝殻腹縁刺突文の間に沈線文を施す一群である。Ⅱ類に比べ肥厚部位が口縁部より大きく下がり、口縁部から頸部の断面形は「く」の字状に屈曲する。口縁部の両端に連続貝殻腹縁文をもつ。波状口縁が多く、平口縁は少ない。

167は中央に 4 条の沈線文、三角形断面の下に連続貝殻腹縁文を施す。168は中央に 2 条の沈線文、三角形断面の下に連続貝殻腹縁文を施す。169は中央に 2 条の沈線文、三角形断面の下に連続貝殻腹縁文を施す。170は中央に 2 条の沈線文、三角形断面の下に連続貝殻腹縁文を施す。171は中央に 2 条の沈線文を施す。172は中央に 2 条の沈線文を施す。173は中央に 1 条の沈線文、三角形断面の下に連続貝殻腹縁文を施す。174は中央に 1 条の短沈線文を施す。

175は中央に太目の短沈線文、三角形断面の下に連続貝殻腹縁文を施す。176は中央に横位、斜位の沈線文、三角形断面の下に連続貝殻腹縁文を施す。177はその中に斜位の短沈線文、三角形断面の下の方に連続貝殻腹縁文を施す。178、179は中央に数条の沈線文が推定され、三角形断面の下に連続貝殻腹縁文を施す。180はその中に 2 条の凹線文、三角形断面の下の方に連続貝殻腹縁文を施す。181の口縁部は 1 条の凹線文と連続貝殻腹縁文を施す。

#### Ⅲ b 類土器

連続する貝殻腹縁刺突文を施す一群である。口縁部から頸部の断面形は「く」の字状に屈曲するものと外反するものがある。また、波状口縁と平口縁の 2 つがある。また、貝殻腹縁刺突文も刺突列により 2 段と 1 段に細分される。

182 ~ 185 の口縁部は連続貝殻腹縁文を施し、断面三角形の下にも連続貝殻腹縁文を施す。

186、187 の口縁部は連続貝殻腹縁文を施す。186 の口縁部は連続刺突文を施し、断面三角形の下にも連続貝殻腹縁文を施す。188、189 の口縁部は連続刺突文を施し、断面三角形の下にも連続刺突文を施す。

### ④Ⅳ類土器

膨らむ胴部から頸部がしまり、口縁部は外反するものである。口縁部は外側に向かって肥厚するものや突起をつけたものがある。また、頸部に把手がつくものがある。口縁部と胴部に磨消繩文や 3 本の沈線文が施されている。磨消繩文土器である。鐘崎式に相当する。

190 ~ 196 の口縁部は 3 条の沈線文を施す。195 は口唇部に連続刺突文を施す。196 は口唇部に 2 条の連続刺突文を施す。197、198 の口縁部は 2 条の沈線文を施す。198 は口縁部の両端に連続刺突文、口唇部に 2 条の短沈線文を施す。199 の口縁部は 1 条の沈線文、口縁部の両端の上部は連続刺突文、下部は連続凹点文を施す。200 ~ 204 の口縁部は数条の横位の沈線文を施す。200 は口唇部に 2 条の連続刺突文を施す。202 は円状の沈線文、各沈線文の端に刺突文を施す。203 は口唇部に連続刺突文、孔列文を施す。

205、206の口縁部は孔列文、沈線文を施す。207の口縁部は沈線文を施す。208の胴部は渦巻状四線文、横位、斜位の凹線文を施す。

#### ⑤V類土器

わずかに膨らむ胴部から頸部が縮まり、肥厚する口縁部は外反する。把手やW字状の粘土紐が添付されるものがある。口縁部と胴部に磨消繩文や沈線文が施されている。磨消繩文土器である。北久根山式に相当する。下記のaとbに細分した。

##### V類a土器

沈線文または、刺突文を施す土器である。

209は口縁部に4条の沈線文を施す。210、211、212は口縁部に3条の沈線文を施す土器である。213は口縁部に2条の沈線文、両端に貝殻腹縁刺突文を施す。214、215、216、217、218、219は、口縁部に2条の沈線文等を施す土器である。220、221は口縁部に1条の沈線文等を施す。222は口縁部に1条の沈線文を巡らし、沈線文の間に刺突文を施す。223は口縁部に1条の凹線文、波長部に貼付を施す。

##### V類b土器

沈線文を施さない土器である。

224は口唇部から口縁部上部にかけては1条の貼付を施す。225、226、227は口唇部から口縁部にかけて1条の貼付、貼付の上に刺突文を施す。228は口縁部に2条の貼付を施す。229は、口唇部に部分的に波形の貼付を施す。230は無文である。231は口縁部に横位の貝殻腹縁文、波長部の口唇部に円形の刺突文、把手あり。232は深鉢の底部で平底である。

#### ⑥VI類土器

繩文を主体とする土器で、口縁部が「く」の字状に屈曲し、頸部がくびれて胴部が張りのある膨らみをもつ形態を呈する土器である。

233は口縁部に横位の沈線文を施し、区画内に磨消繩文が施される箇所がある。234は口縁部に3条の沈線文を施す。

#### ⑦VII類土器（台付皿形土器）

深鉢形の土器とは異なり、皿部（浅鉢状にやや深いものも含む）と脚部（脚台部）による形態を呈する土器群である。台部・皿部とも多彩な文様で飾ったものもある。皿部分の内面は、沈線文や貼付突帯文、刺突文等で、また、台部分も沈線文や透かし、刺突文や赤色顔料、白色塗料で装飾されているものもある。

235～240は口唇部に沈線文を施す。235は口唇部に2条の沈線文、口唇部に波状の貼付、その貼付上には2列の連続刺突文が繋がる。236は口唇部に2条の短沈線文、口縁部に2条の沈線文を施す。237は口唇部に1条の沈線文、口縁部に3条の沈線文、途中蛇の様な貼付を施す。238は口唇部に1条の沈線文、波長部に突起物、その突起物に渦巻状の沈線文を施す。239は口唇部に数条の沈線文、輪條の貼付、貼付の中央に孔列文、貼付上には連続刺突文を施す。240は口唇部に横位、縦位に沈線文、斜位の連続

刺突文、波長部に突起物、その突起物の中心に孔列文を施す。

241は口唇部に波状の突起物、突起物には連続刺突文が繋がる。242は口唇部に波状の突起物、突起物には孔列文、凹線文を施す。243は口唇部に波状の突起物、突起物には連続刺突文を施す。244は口唇部に波状の突起物、突起物中に沈線文を施す。245は口縁部に3条の沈線文、その下に連続刺突文を施す。246の口縁部は3条の沈線文、波長部に突起物、突起物に沈線文を張り巡らせ孔列文も施す。247の口縁部は1条の太い沈線文、口唇部に太い縦位の横線を施す。248の口縁部両端に連続刺突文、中央に1条の沈線文、波長部に突起物、突起物には沈線文を張り巡らす。249の胴部は無文。250の底部は無文。

251の底部は器壁が厚く突帯文を張り巡らす。252の底部は器壁が厚く斜めに立つ。横位の貝殻腹縫文、孔列文有り。白色顔料付着。253、254は無文土器。255は台に斜位の刺突文を施す。256は台に1条の突帯文を施す。257は台に突帯文を施す。

#### ⑧Ⅷ類土器（円盤形土製加工品）

円盤形土製加工品である。器としての機能をもつ粘土製品である土器とは異なり、土器の破片を二次的に利用して加工を行った円盤形の土製品である。

258、259、260は、I類土器の胴部を素材として用いて作成されている。無文である。

### ⑨小結

分類した土器を型式学的な編年序列に集約して小結としたい。I類は市来式系、II類は草野式系、III類は丸尾式系、IV類は鐘崎式系、V類は北久根山式系、VI類は西平式系、VII類は台付皿形土器に相当すると考えられる。VIII類は、円盤形土製加工品である。I～III類の貝殻文土器の変遷については市来式期と草野式期は同時期、その後に丸尾式期と考えている。IV、V類の磨縫文系土器については、市来式期と草野式期と同時に鐘崎式期、丸尾式期と同時に北久根山式と考えている。台付皿形土器はI～III類の貝殻文と北久根山式が殆どを占め、鐘崎式の台付皿形土器を見ることはできなかった。

## （2）石器

### ①石鎚

遺構内以外の包含層検出の石鎚は、全部で14点である。そのうち2点は未製品である。出土量は、遺跡の規模を考慮すると多いとは言えない。

261は打製石鎚である。桑ノ木津留産の黒曜石製で全体の形状は二等辺三角形である。基部の片方が欠損している。262は打製石鎚である。桑ノ木津留の黒曜石製全体の形状は二等辺三角形である。263は打製石鎚である。チャート製で全体の形状は二等辺三角形である。基部が一直線に近い曲線になっている。264は打製石鎚である。チャート製で全体の形状は二等辺三角形である。265は打製石鎚である。流紋岩製で全体の形状は二等辺三角形である。基部一直線である。266は打製石鎚である。チャート製で全体の形状は二等辺三角形である。基部形態から浅い二等辺三角形になっている。267は打製石鎚である。黒曜石製で全体の形状は二等辺三角形である。基部形態から浅い二等辺三角形になっている。268は打製石鎚である。チャート製で全体の形状は二等辺三角形である。基部形態から深い正三角形になっている。基部の片方が欠損している。269は打製石鎚である。チャート製で全体の形状は二等辺三角形

である。基部形態から深い正三角形になっている。基部の片方が欠損している。270は打製石鎌である。チャート製で全体の形状は二等辺三角形である。両側が一部鋸歯縁状になっており基部形態から浅い三角形になっている。271は打製石鏃である。チャート製で全体の形状は五角形である。基部形態から深い正三角形になっている。272は磨製石鎌である。チャート製で全体の形状は二等辺三角形である。基部が一直線に近い曲線になっている。273、274はチャート製の石鎌の未製品である。

## ②ドリル

275はチャート製のドリルである。276は珪質頁岩のドリルである。

## ③石匙

277は桑の木津留産の黒曜石製石匙である。横匙に分類される。

## ④石棒

278は砂岩製の石棒の可能性がある。本野原遺跡でも19点の石棒と石刀が検出され、いずれも砂岩の礫を用いている（宮崎市教育委員会2006）。

## ⑤石錘

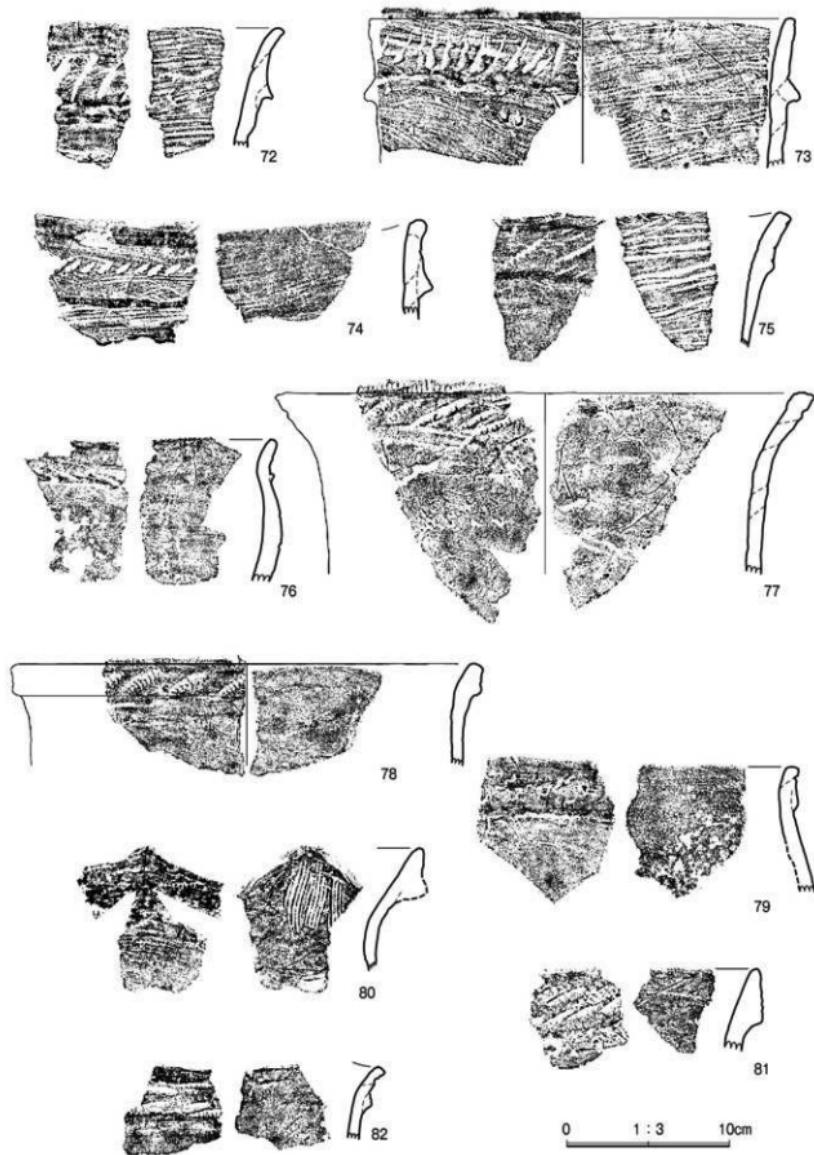
279は四万十系の頁岩製で形状は円形で短軸方向に網掛け用の切込がある。280は四万十系の頁岩製で形状は楕円形で短軸方向に網掛け用の切込がある。281は頁岩製で形状は楕円形で短軸方向に網掛け用の切込がある。282は赤色頁岩製の四つ目石錘である。

## ⑥磨製石斧

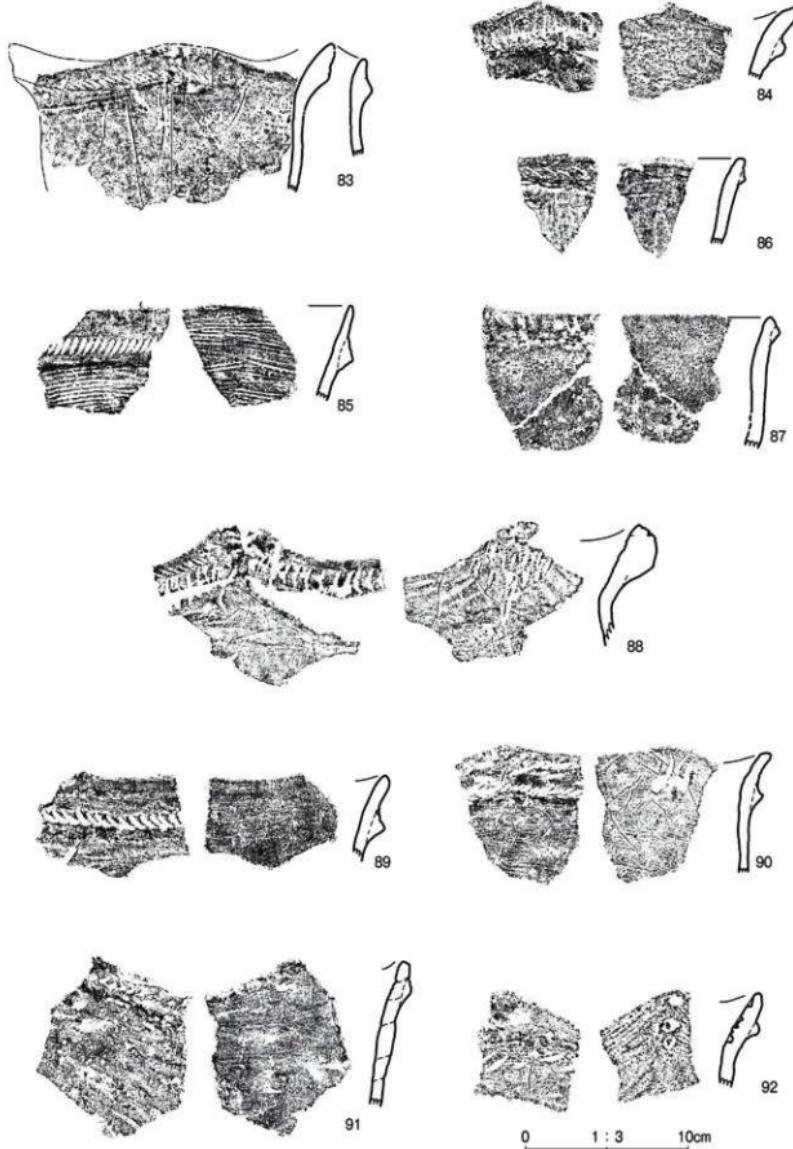
283は頁岩製の磨製石斧である。284はホルンフェルス製の磨製石斧である。

## ⑦砥石・敲石・磨石・台石

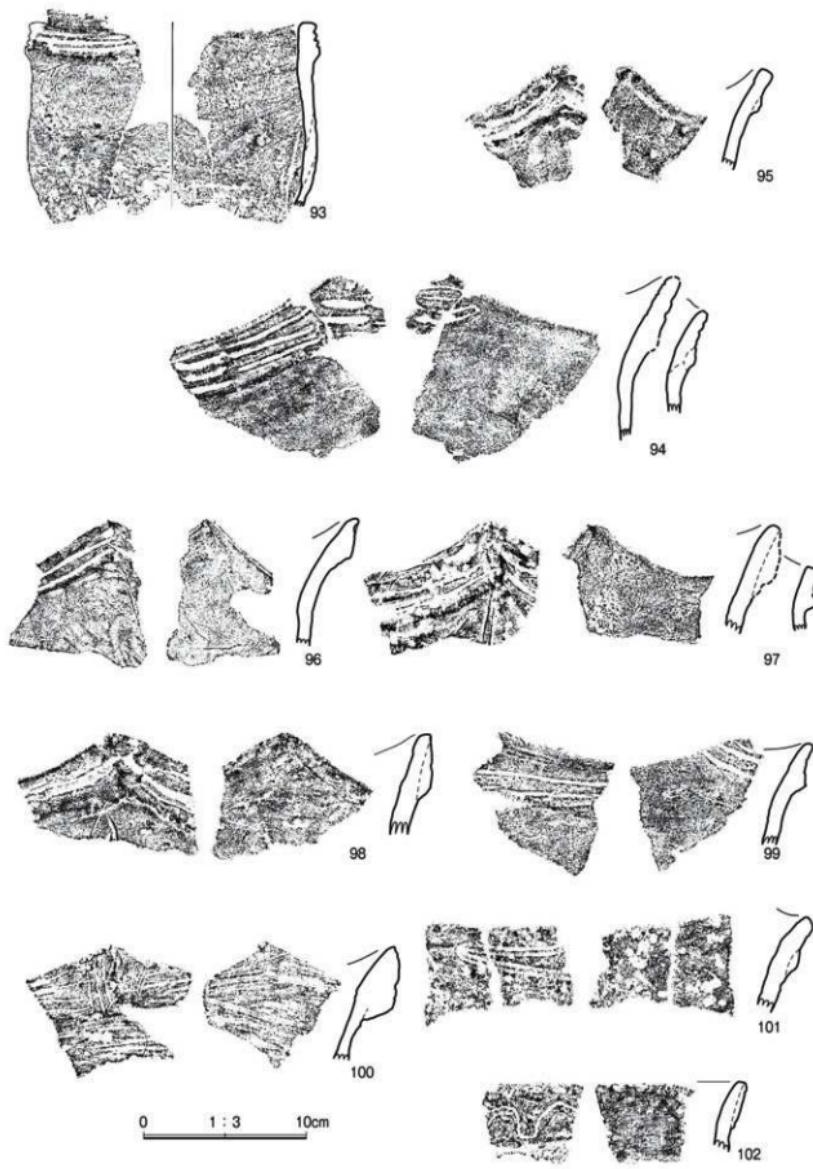
285は砂岩製の研石である。上面は非常に滑らかである（滑らかな面をスクリーントーンで示した）。設置して砥石として使用したと考えられる。286は安山岩製の磨石であり、少し風化している。287は砂岩製の敲石・磨石である。周縁全面に敲打痕が認められる。表裏両面は殆どが磨面であるが表中央部に敲打痕が認められる。288は安山岩製の磨石であり、少し風化している。289は安山岩製の敲石・磨石であり、周縁全面に敲打痕が認められる。表裏両面は殆どが磨面であり折損後は殆ど使用しておらず風化している。290は砂岩製の敲石・磨石であり、周縁全面に敲打痕が認められ、表裏両面は殆どが磨面であり、折損後は殆ど使用していない。291は砂岩製の敲石・磨石である。周縁全面に敲打痕が認められ、表裏両面は殆どが磨面である。292は安山岩製の台石である。厚板状をなし上面も下面も平たい。293は安山岩製の敲石である。周縁全面に敲打痕が認められる。



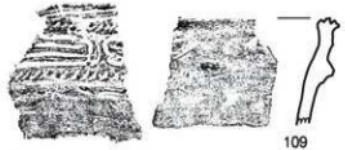
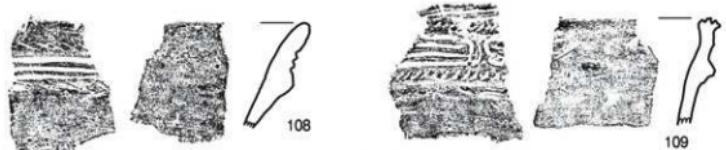
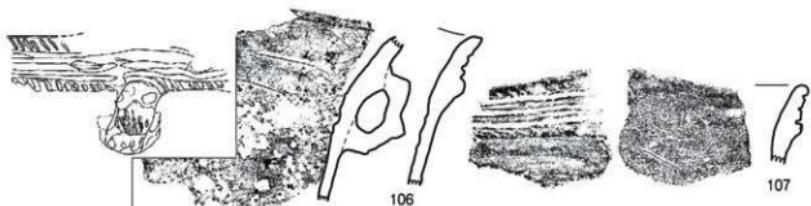
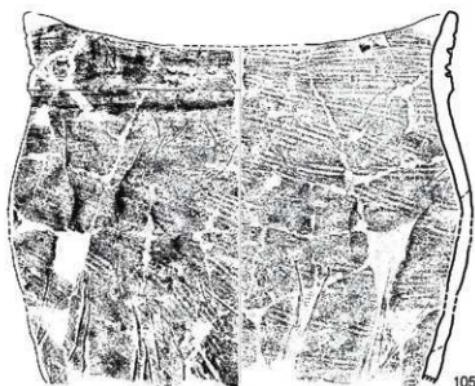
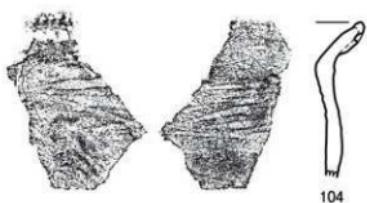
第44図 包含層出土遺物土器実測図③（縄文後期、S=1/3）



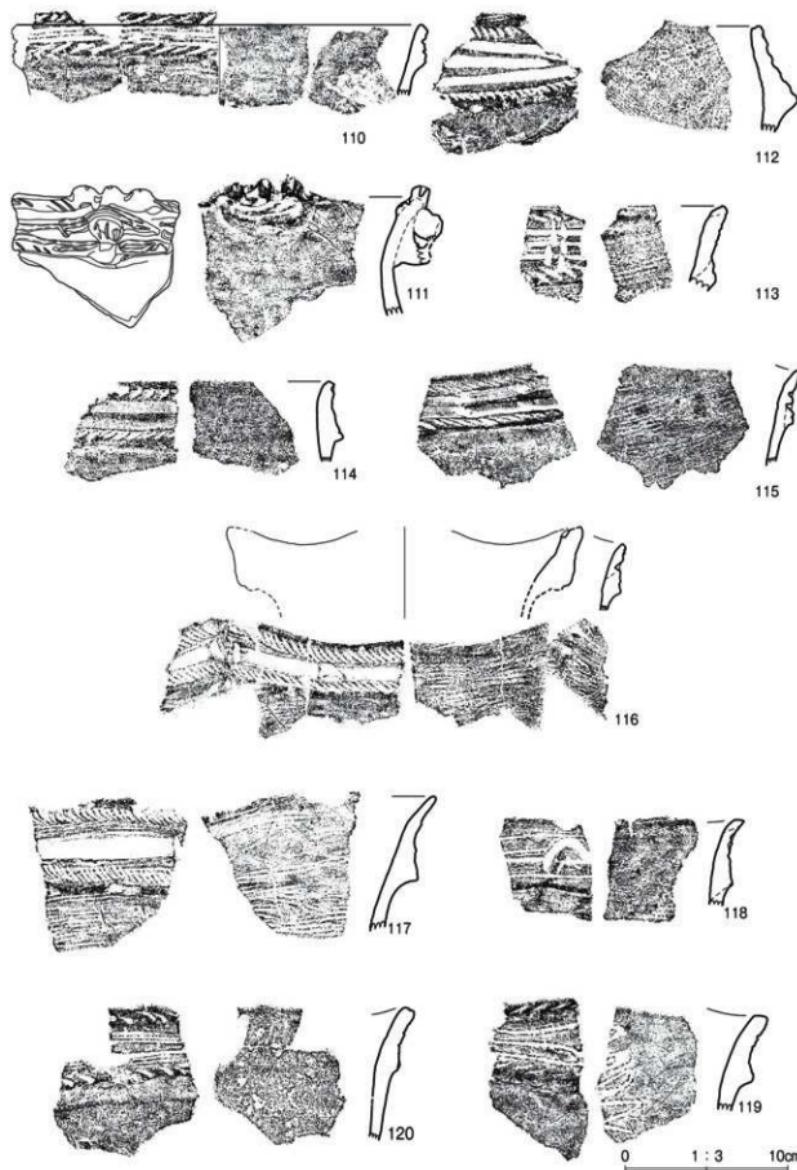
第45図 包含層出土遺物土器実測図④ (縄文後期、S=1/3)



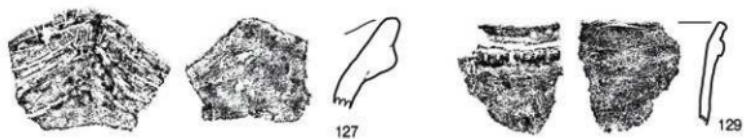
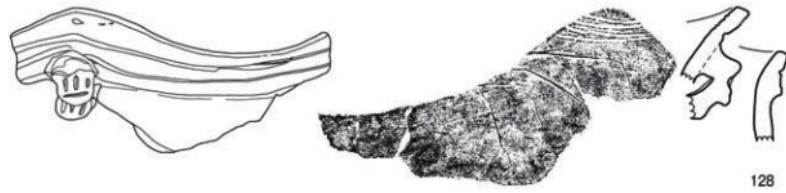
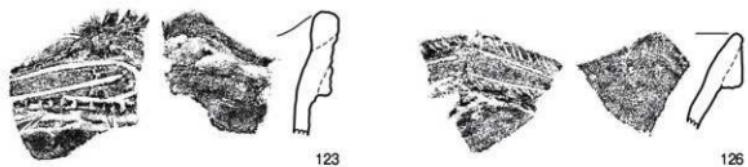
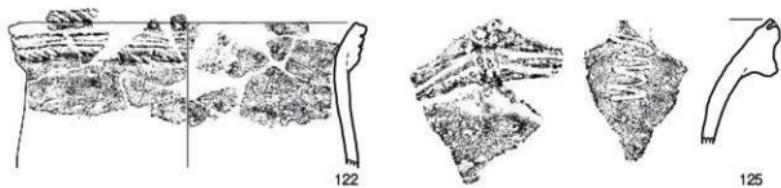
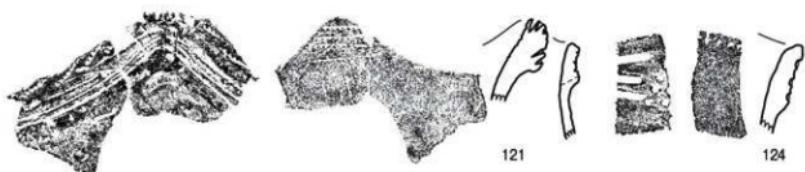
第46図 包含層出土遺物土器実測図③（縄文後期、S=1/3）



第47図 包含層出土遺物土器実測図⑥ (縄文後期、S=1/3)

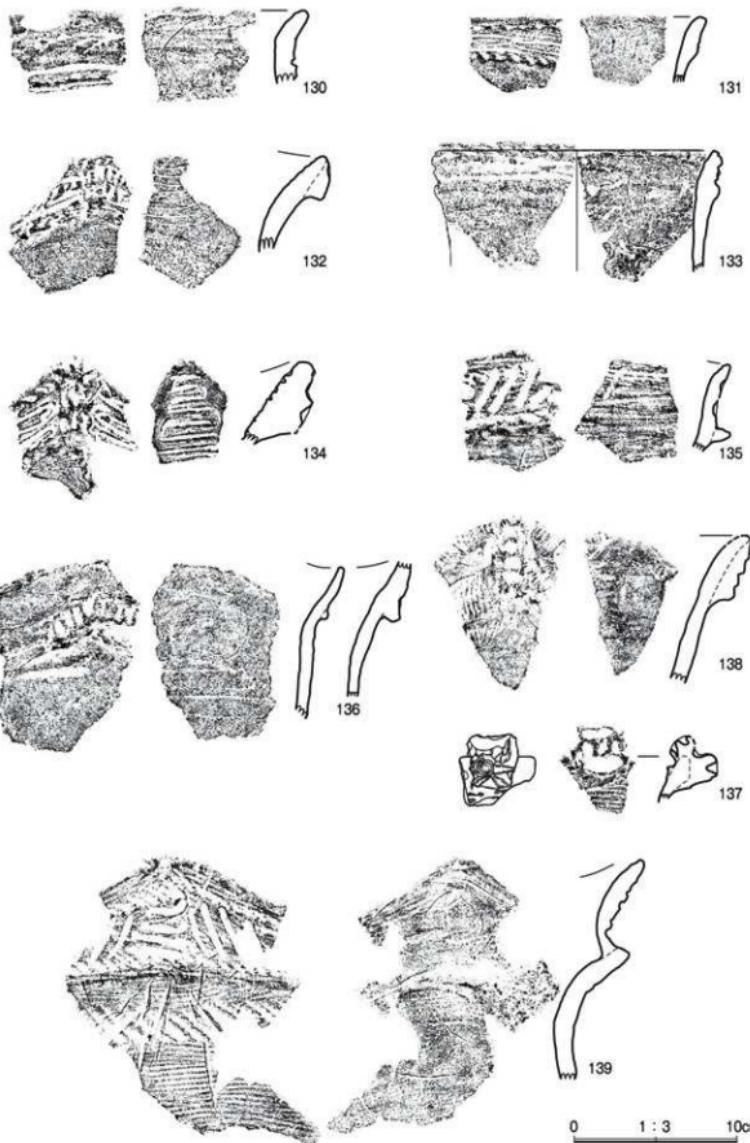


第48図 包含層出土遺物土器実測図⑦（縄文後期、S=1/3）

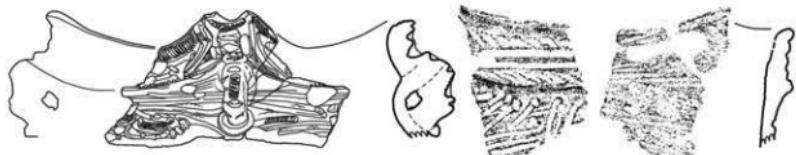


0 1 : 3 10cm

第49図 包含層出土遺物土器実測図④ (縄文後期、S=1/3)



第50図 包含層出土遺物土器実測図⑨（縄文後期、S=1/3）



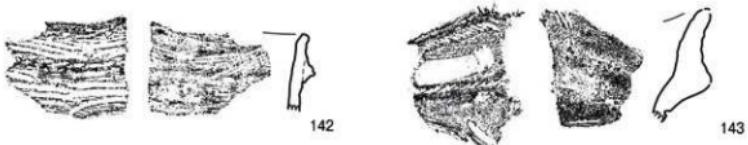
140



141



142



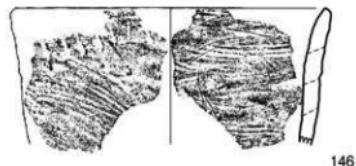
143



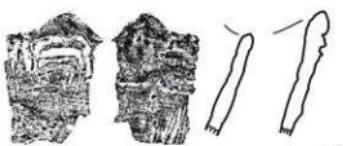
144



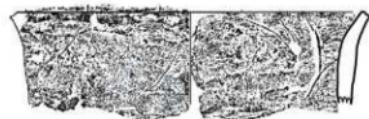
145



146



147



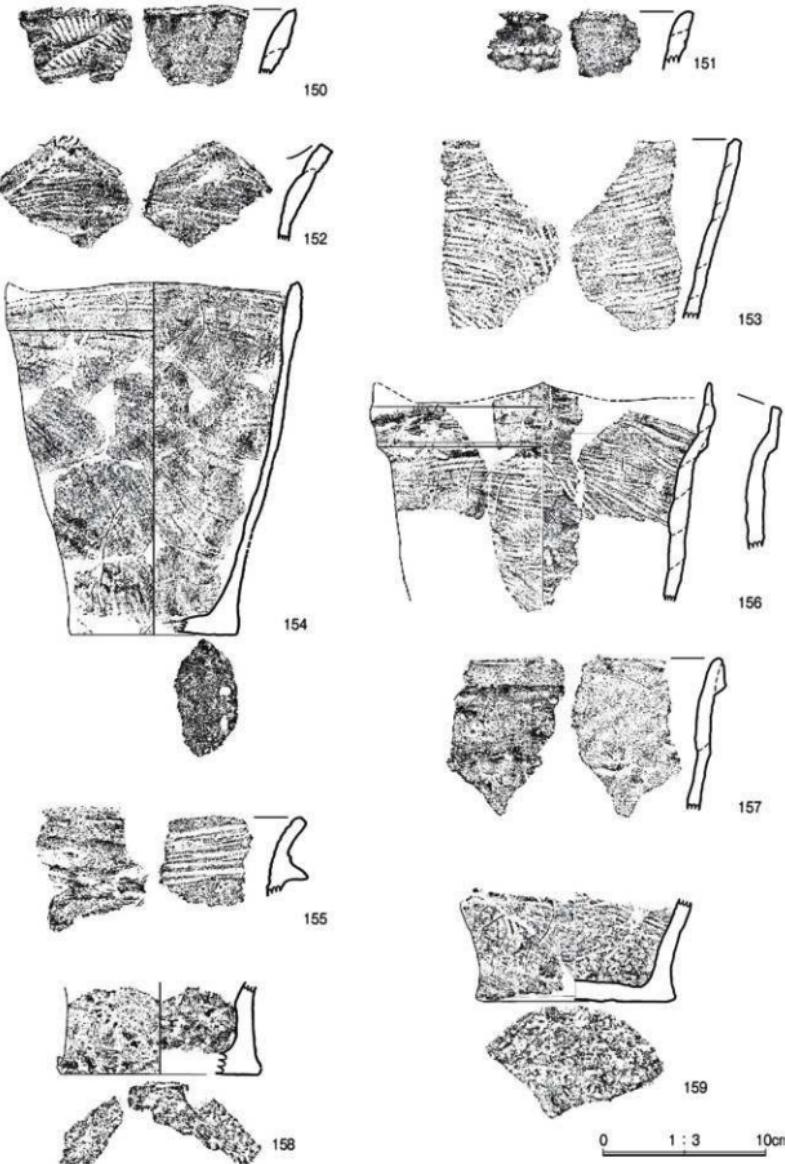
148



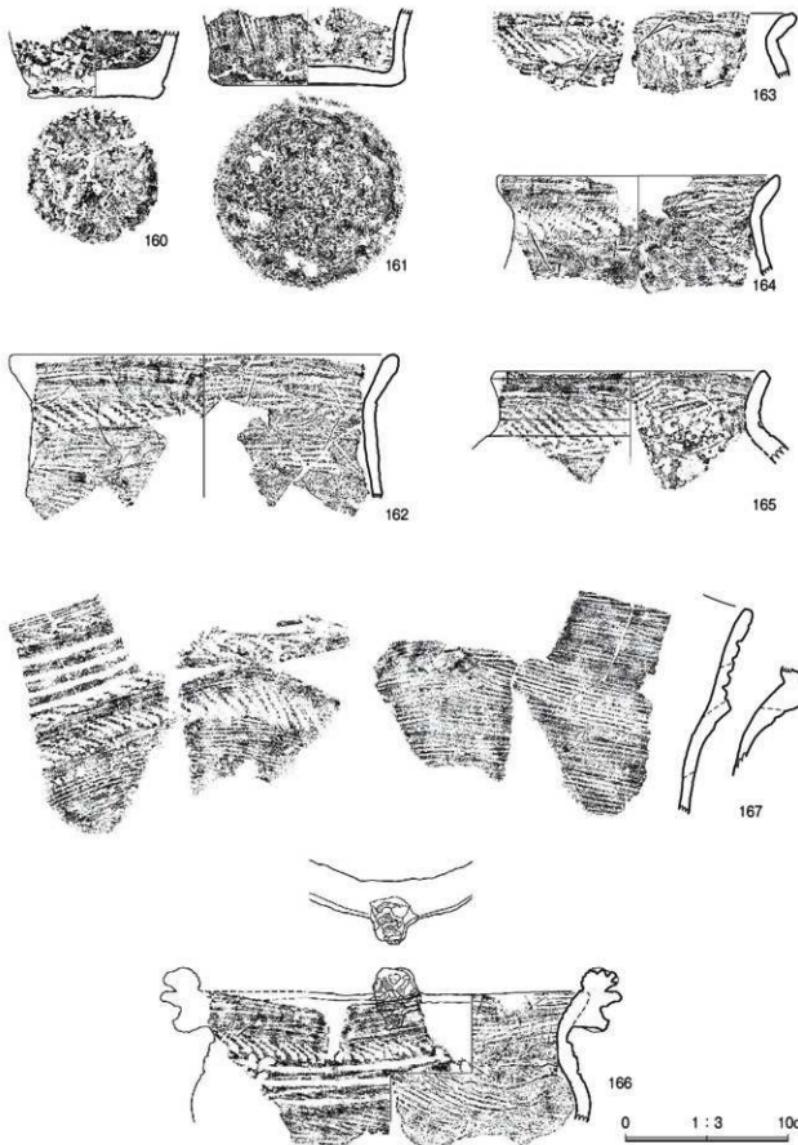
149

0 1 : 3 10cm

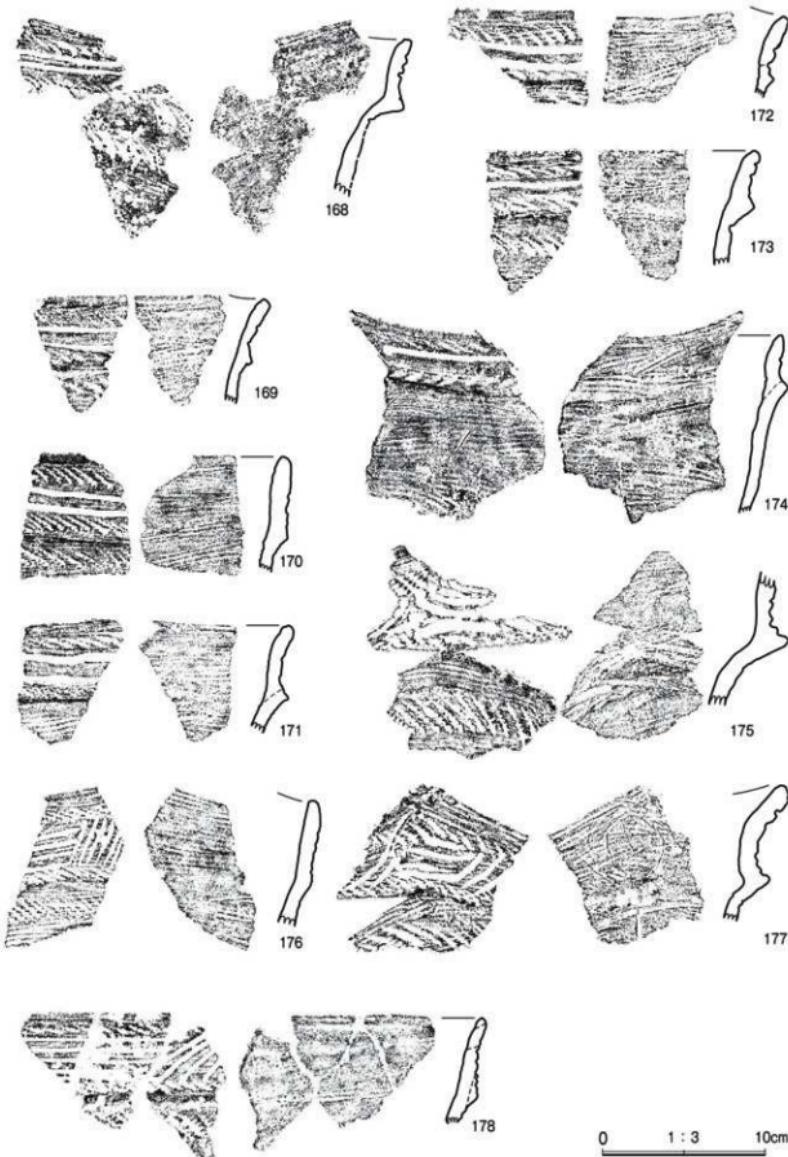
第51図 包含層出土遺物土器実測図⑩（縄文後期、S=1/3）



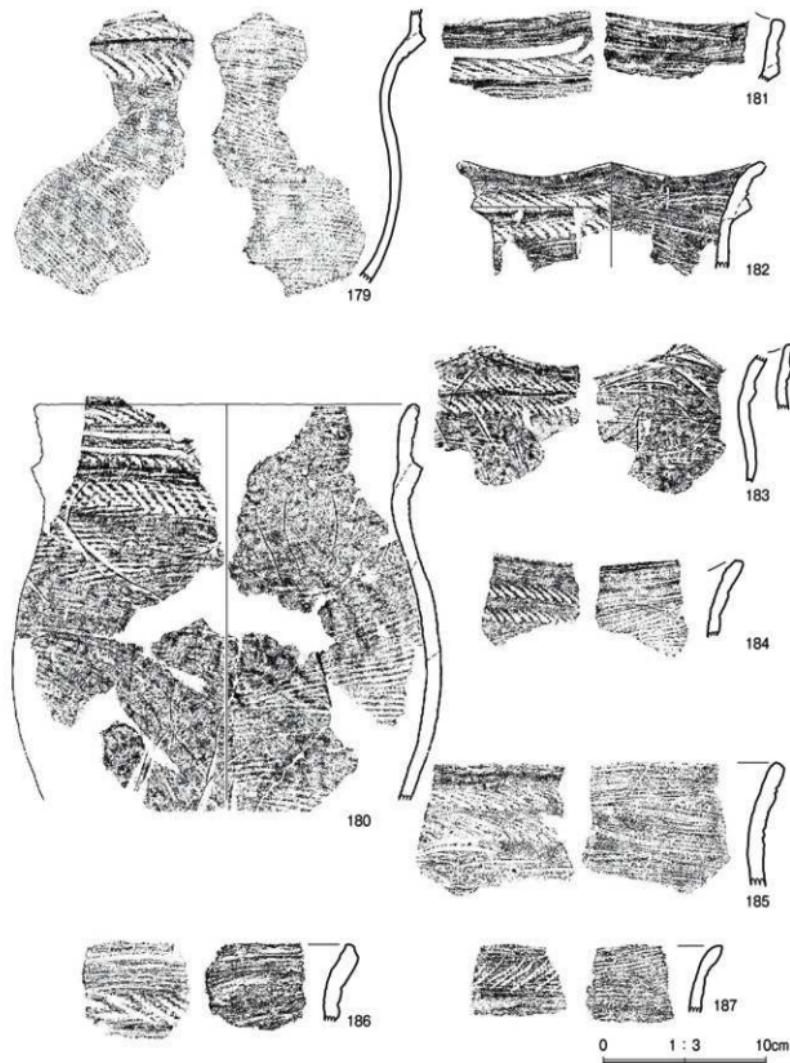
第52図 包含層出土遺物土器実測図①（縄文後期、S=1/3）



第53図 包含層出土遺物土器実測図② (縄文後期、S=1/3)



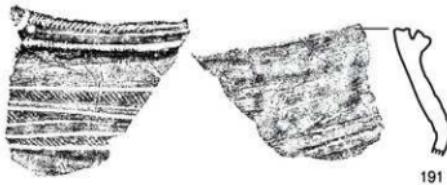
第54図 包含層出土遺物土器実測図① (縄文後期、S=1/3)



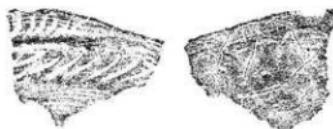
第55図 包含層出土遺物土器実測図④ (縄文後期、S=1/3)



188



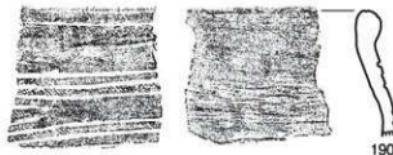
191



189



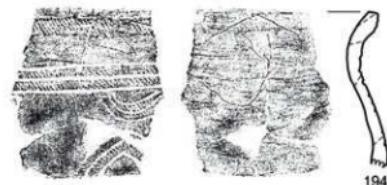
192



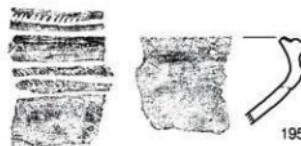
190



193



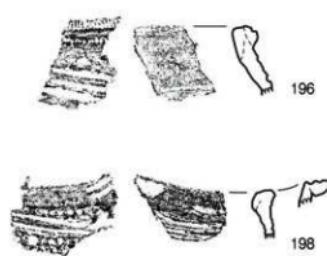
194



195



197



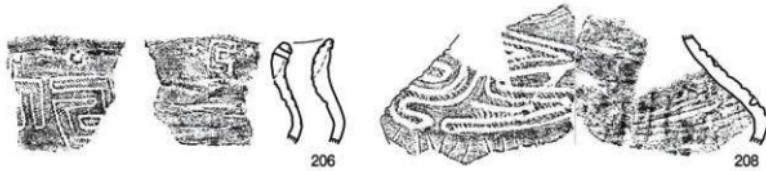
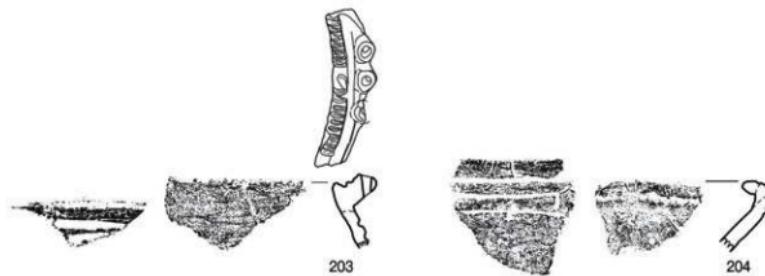
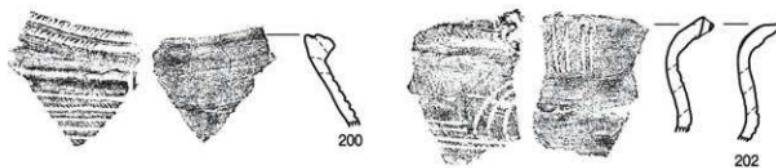
196



198

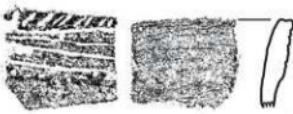
0 1 : 3 10cm

第56図 包含層出土遺物土器実測図⑯（縄文後期、S=1/3）



0 1 : 3 10cm

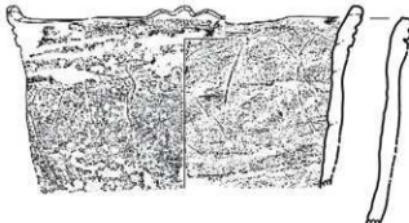
第57図 包含層出土遺物土器実測図⑤（縄文後期、S=1/3）



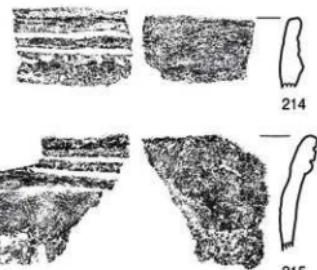
209



210



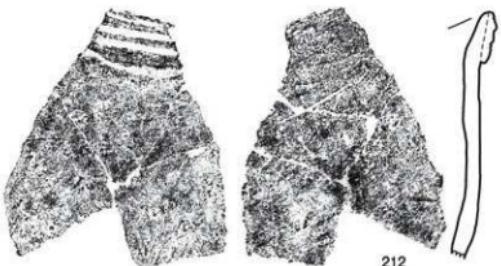
211



214

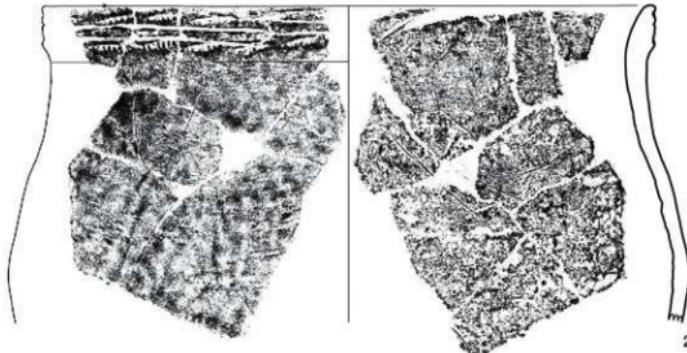


215



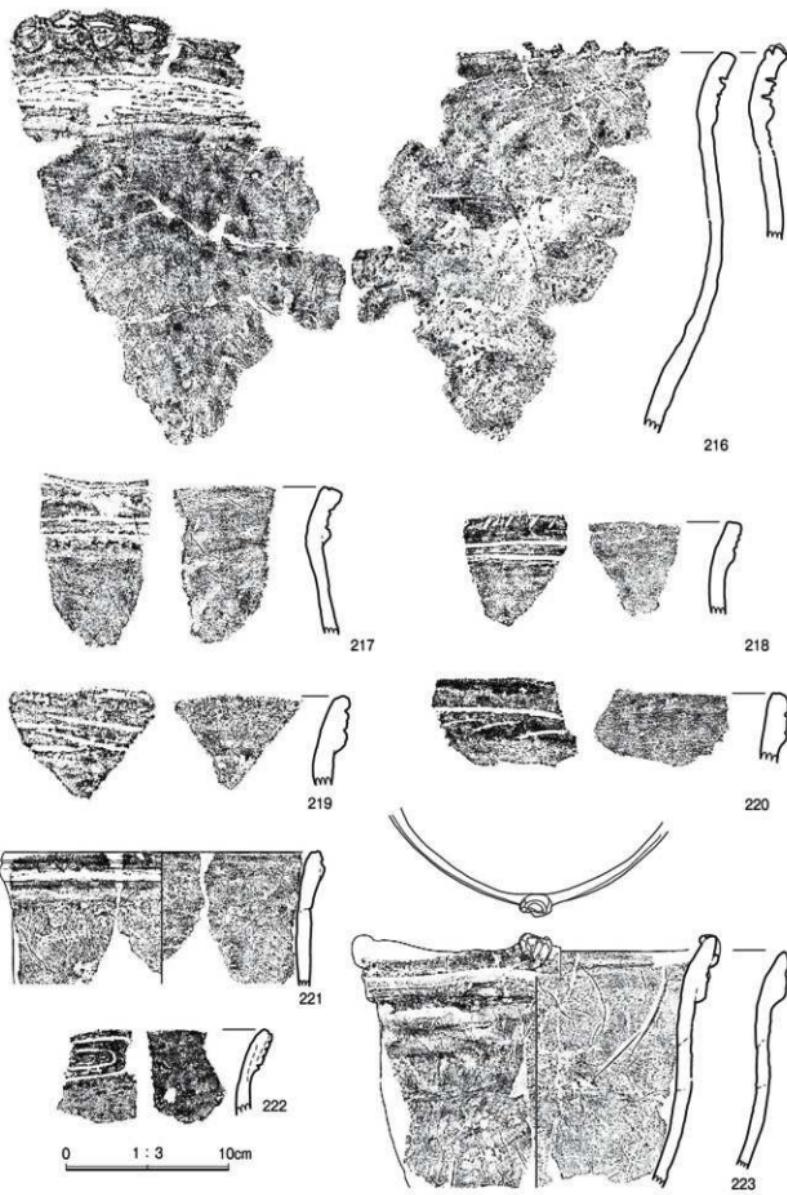
212

0 1 : 3 10cm

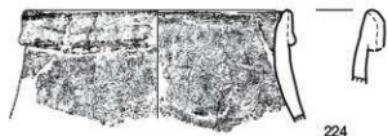


213

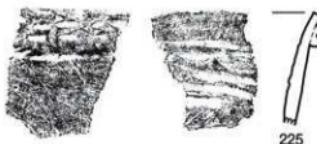
第58図 包含層出土遺物土器実測図⑯（縄文後期、S=1/3）



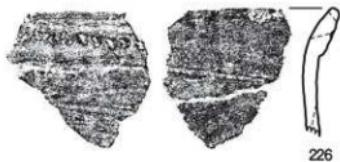
第59図 包含層出土遺物土器実測図⑩ (縄文後期、S=1/3)



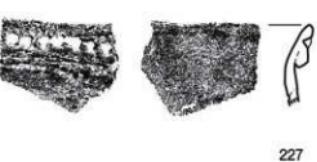
224



225



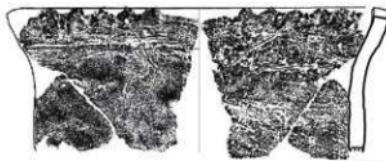
226



227



228



229



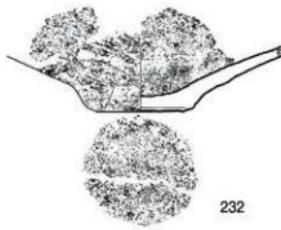
230



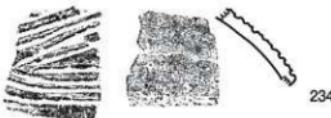
231



233



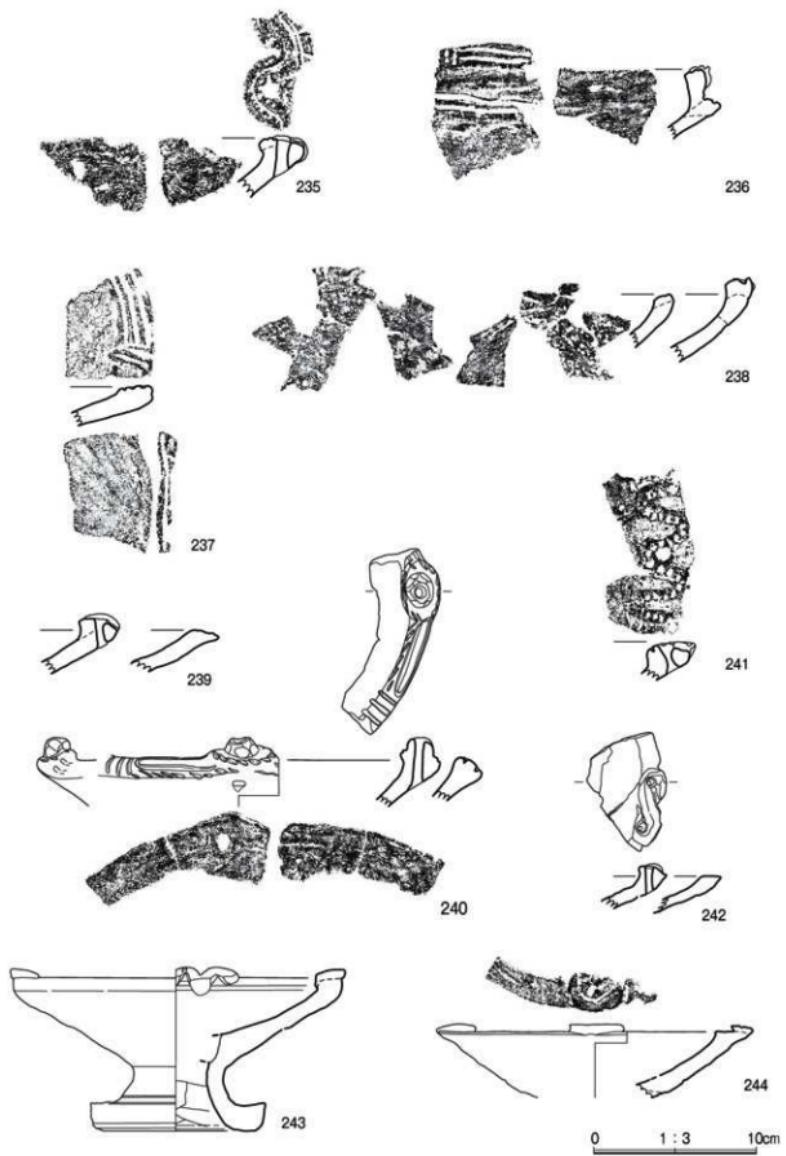
232



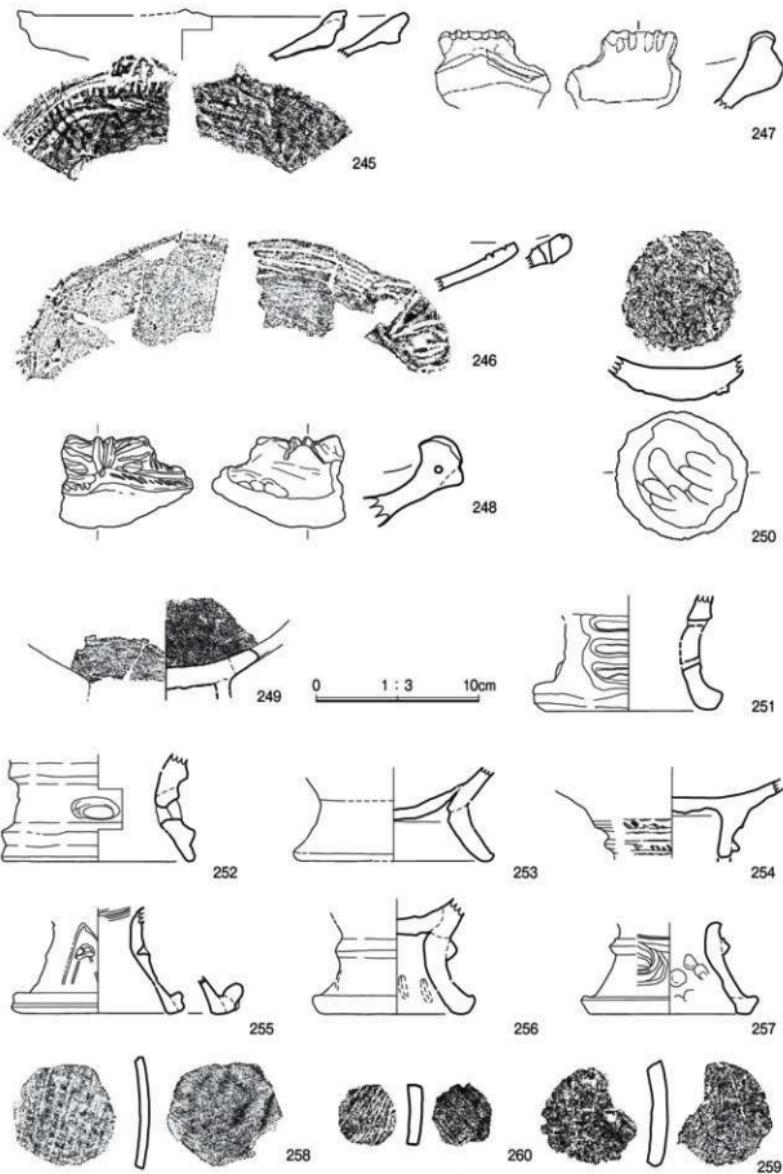
234

0 1 : 3 10cm

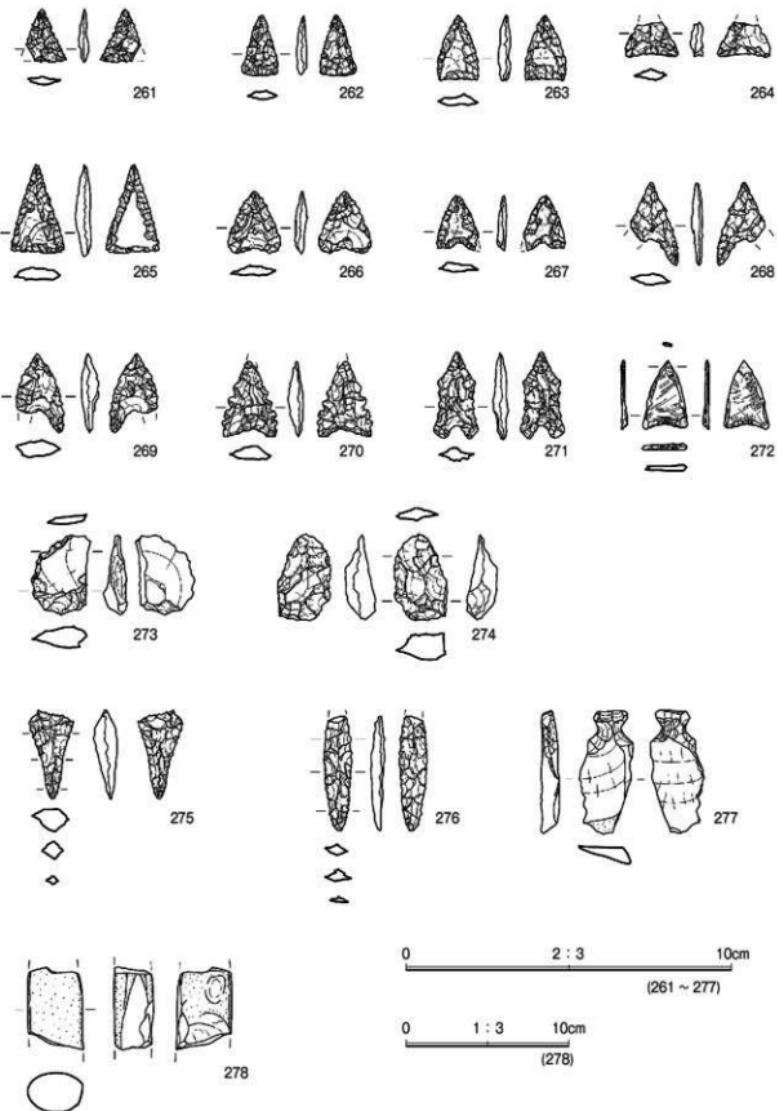
第60図 包含層出土遺物土器実測図<sup>10</sup>（縄文後期、S=1/3）



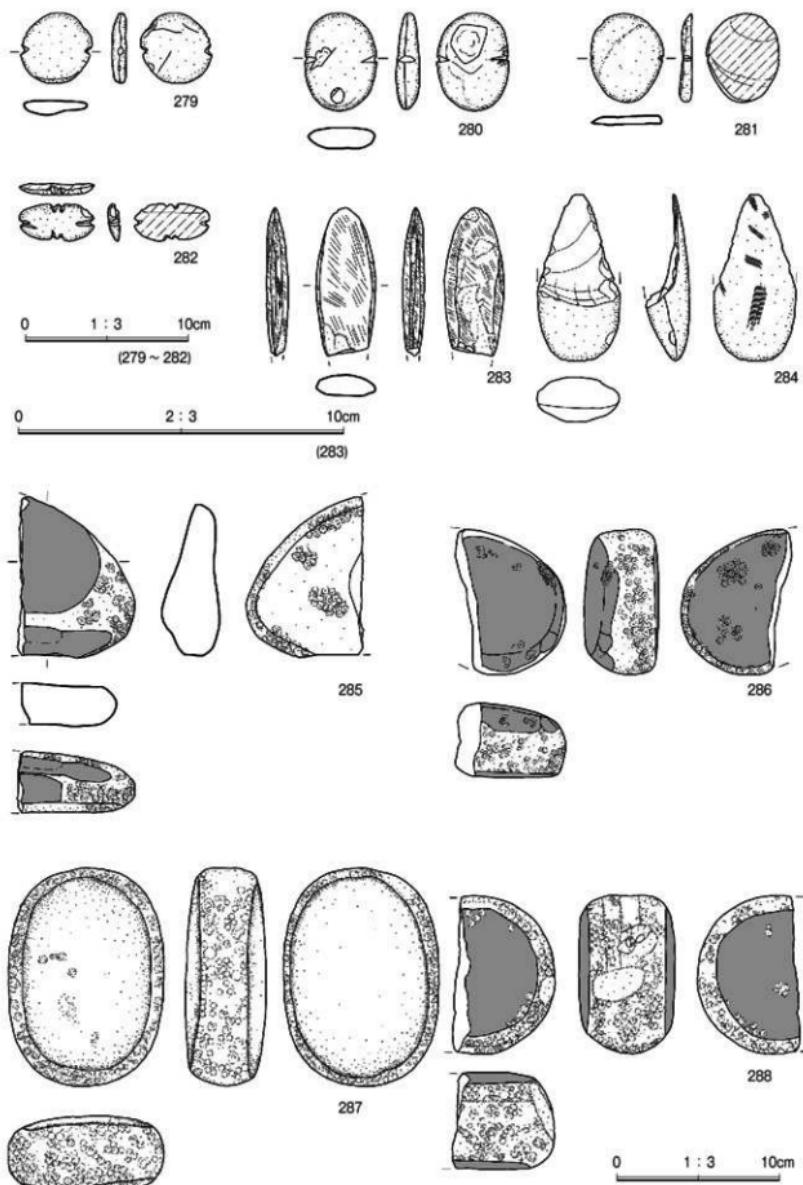
第61図 包含層出土遺物土器実測図② (縄文後期、S=1/3)



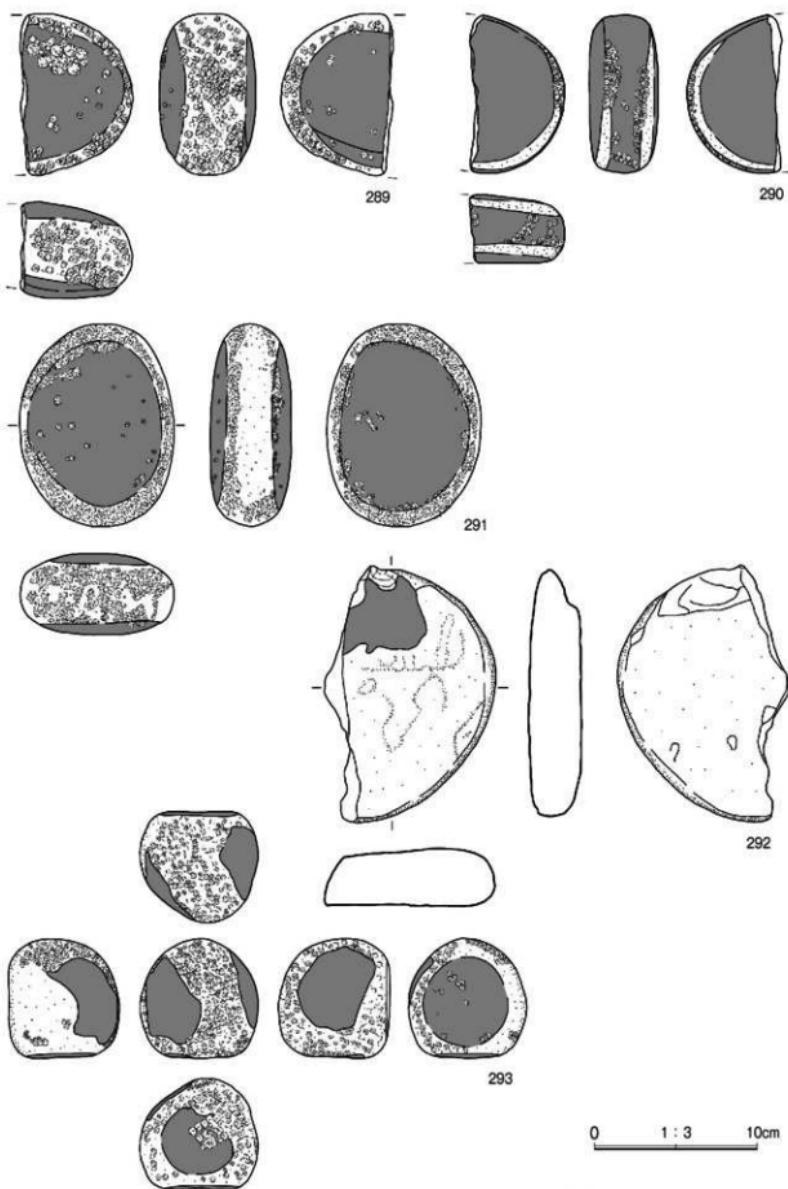
第62図 包含層出土遺物土器実測図② (縄文後期、S=1/3)



第63図 包含層出土遺物石器実測図① (縄文後期、S=1/3)



第64図 包含層出土遺物石器実測図②（縄文後期、 $S=1/3$ ）



第65図 包含層出土遺物石器実測図③ (縄文後期、S=1/3)

## 第4節 縄文後期後葉から晩期（VI a層）の遺構と遺物

### 1 概要

VI a層が縄文時代後期後葉から晩期の主たる包含層である。第66図は、縄文時代後期後葉から晩期に推定される遺構の分布を示している。図中の等高線はVI b層上面での地形を示している。調査西側と東側で小穴を多数確認しているがその性格は明らかにできなかった。遺物の中では三万田式土器の占める比率が高い。

### 2 遺構

5群のそれぞれの小穴の大きさは、直径15cm～30cmである。深さは30cm～60cmと幅がある。断面について全ての小穴が垂直に掘り込まれている。2群小穴の埋土からは三万田式土器の小片が出土した。堅果類の炭化物を伴う小穴はなかった。大きさ、深さを考慮すると、何かの柱の痕跡と考えるのが自然であろう。SH1とSH2については、半円を描いているようにも見受けられる。SH3は円型のように見えるが、小穴の大きさと深さに統一性がない。SH4とSH5についても大きさと深さに統一性が見られなかった。このように、本遺跡のSH1～SH5については、平地住居の可能性も考慮せねばならないが、現段階では、用途や性格は不明と言わざるを得ない。

ここまで、推論を重ねながら考察を行ってきたが、南九州における縄文時代後期後葉から晩期初頭の小穴群の資料もまだ少なく、類例も交えて考察を行う段階まで至っていない。

### 3 包含層出土遺物

後期後葉に属する三万田式土器に加え、晩期初頭の土器が少量出土している。

#### ①三万田式土器

294～304は深鉢あるいは鉢の口縁～胴部である。いずれも文様は無く、器面にはミガキ調整が施され褐色や黒色の色合いを呈するものが多い。303は波状口縁となる。304には穿孔が認められる。

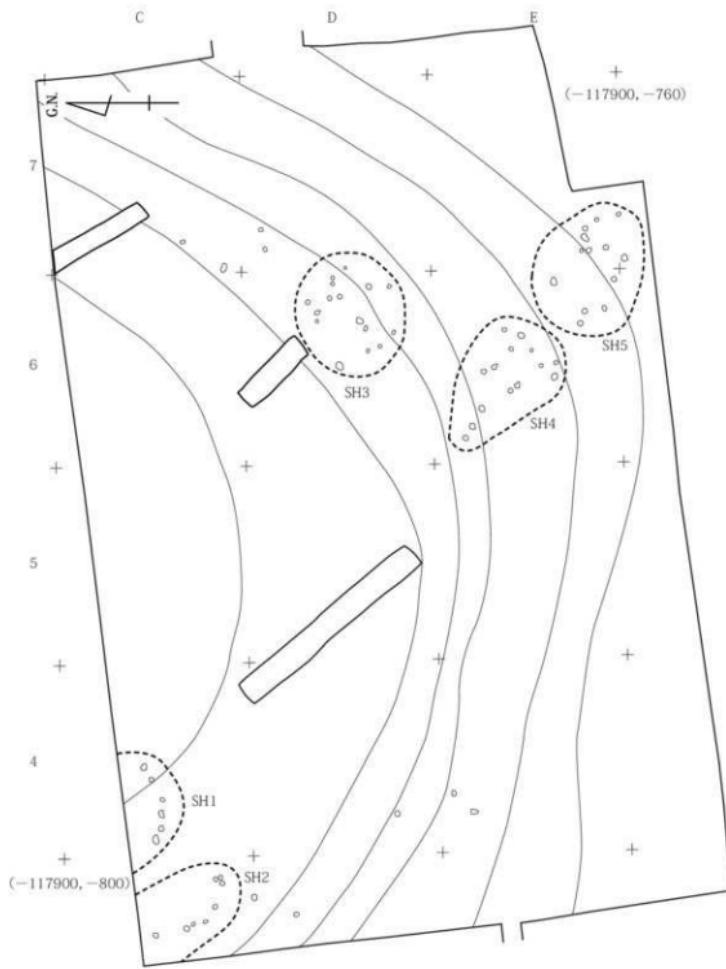
305はおそらくは注口土器の胴部であろう。外面に3条の凹線文と凹点が認められる。306、307は深鉢ないしは鉢の胴部である。やはり無文でミガキ調整がなされる。

308は台付皿形土器である。皿部に対して脚部の横断面は面積が小さく著しく不安定である。皿部の外面上位には鈍い稜線が形成される。脚部には2条の沈線文が施される。内部は空洞となり、2方向に梢円形の透孔が形成される。309も同様の形状を呈する台付皿形土器の台部である。310～313は深鉢あるいは鉢の底部周辺である。器面はミガキ調整がなされる。わずかに上げ底となる。

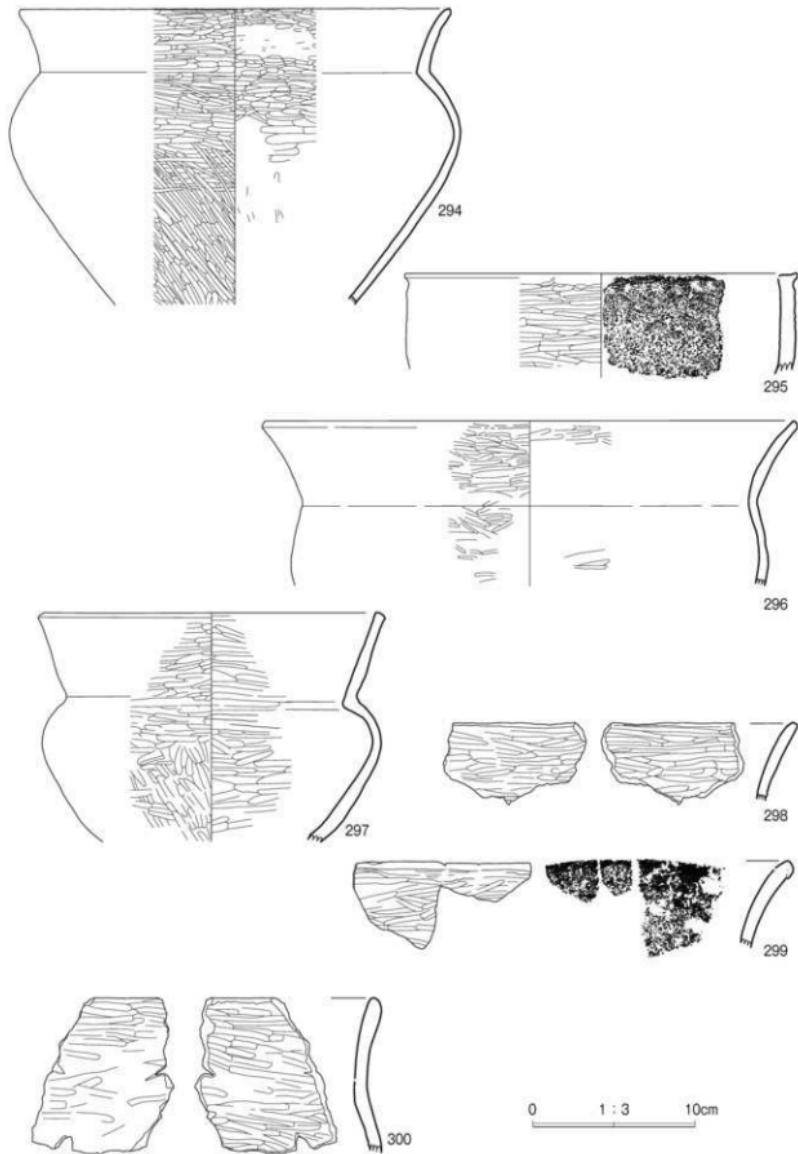
#### ②縄文晩期の遺物

314～319は縄文晩期に属すると考えられる土器片である。314は深鉢ないしは鉢の口縁部であり、外面に数条の沈線文を施す。315は浅鉢の口縁部であり、口縁部の外面に1条、内面に2条の深い沈線文が巡る。316と317も浅鉢の口縁部であろう。317は口縁端を折り返して文様帯を形成し、深い1条の沈線文を施す。

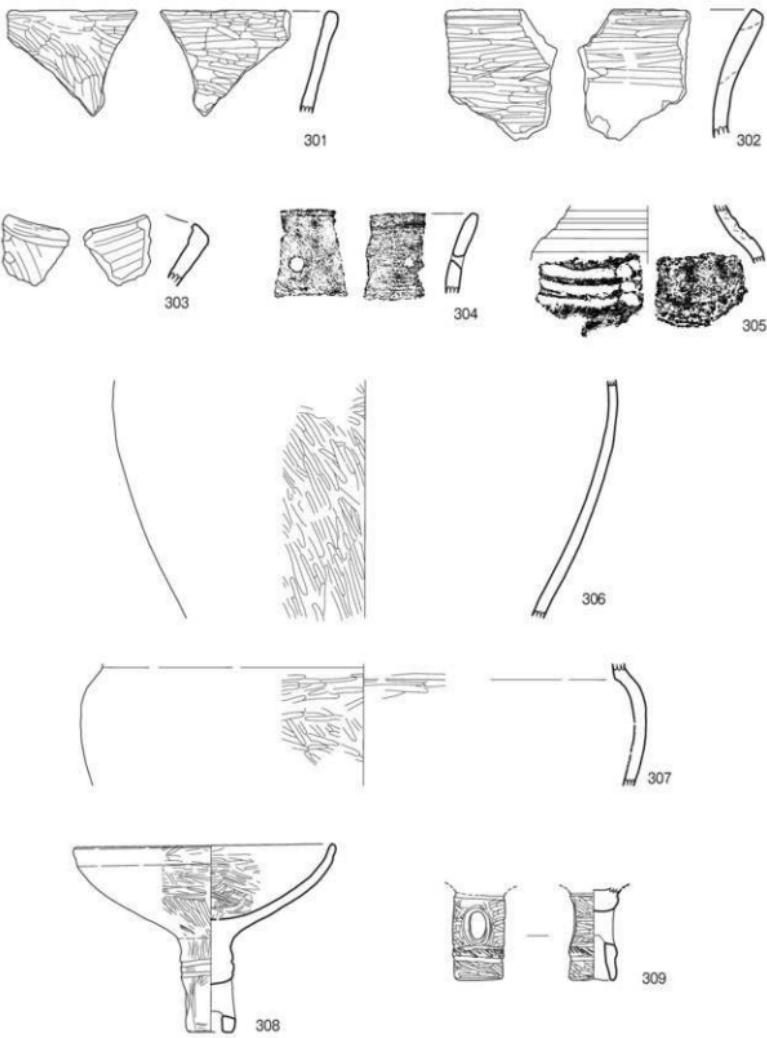
318と319は深鉢の口縁部である。319は口縁部外面に刻目突帯を施す。



第66図 遺構分布 (VI b面) S=1/250

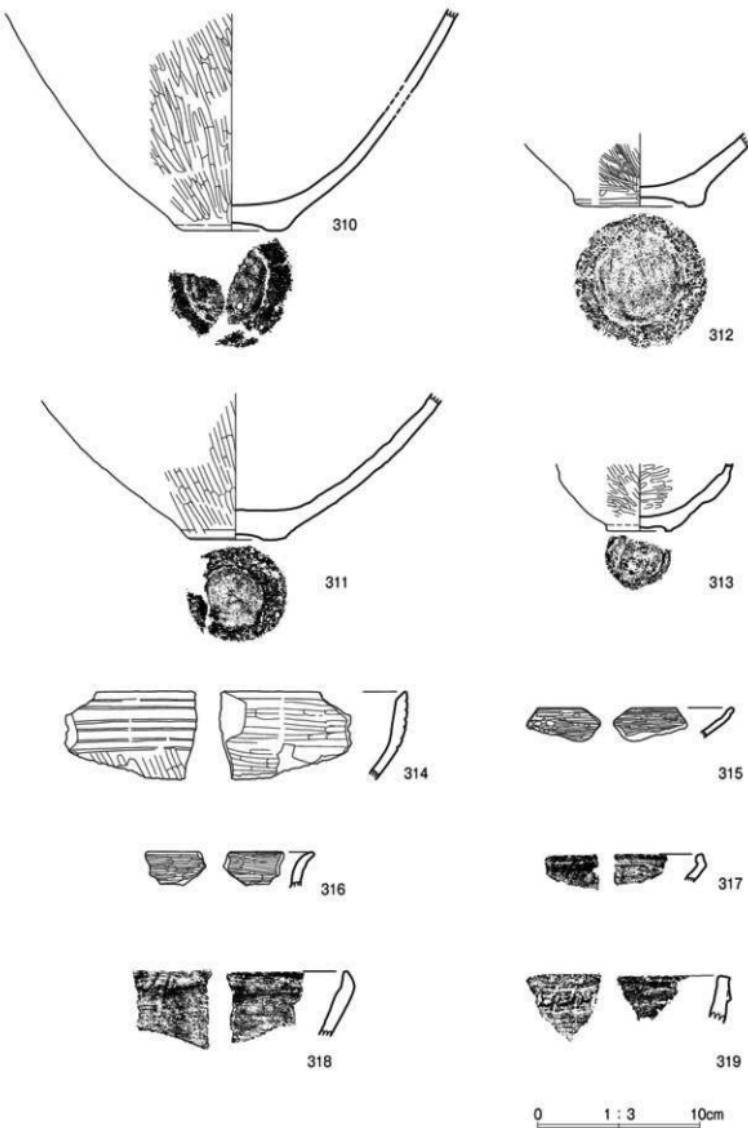


第67図 包含層出土遺物土器実測図②（縄文後期、S=1/3）



0 1 : 3 10cm

第68図 包含層出土遺物土器実測図③ (縄文後期、S=1/3)



第69図 包含層出土遺物土器実測図②（縄文後期、S=1/3）

## 第5節 弥生時代から古代（V層）の遺物

### 1 概要

弥生時代から古代の主たる包含層と考えられるのはV層であり、弥生時代、古墳時代、古代の遺物が出土した。ただし当該期の遺構は確認することはできなかった。

### 2 弥生時代の遺物

320～326は弥生土器である。出土数は多くないが、比較的まとまる破片もある。調査区の付近に関連する遺構が存在する可能性が高い。

320～324は甕である。320は胴部の最大径部位に2条の沈線文を施す。また口唇部にも1条の沈線が巡る。321は胴部に3条の三角突帯が巡り、口唇部には1条の沈線が巡る。この個体は胎土中に雲母が混入している。322は口縁端部と口縁下に刻目突帯が施される。323は口縁部に三角突帯を巡らせるもので、いわゆる逆「L」字状の口縁部となる。口縁端部には刻目が付される。324も逆「L」字状の口縁部の甕であるが他と比べて厚手である。胴部が張り、剥離により全容は不明であるが、おそらくは胴部に突帯が付される。

325と326は壺である。325は肩部付近である。2条の刻目突帯が巡る。326は胴部であり、3条の突帯が施される。

### 3 古墳時代の遺物

古墳時代以降の遺物はさらに量的に少くなり、小さな破片のみとなる。

327は古墳時代の土師器である。全容は不明であるが、直線的に外に向いていく在地（南九州）系の甕であると考えられる。突帯には纖維を巻き付けた棒状工具による大きな刻みが施される。また外面の下位にはススが付着している。

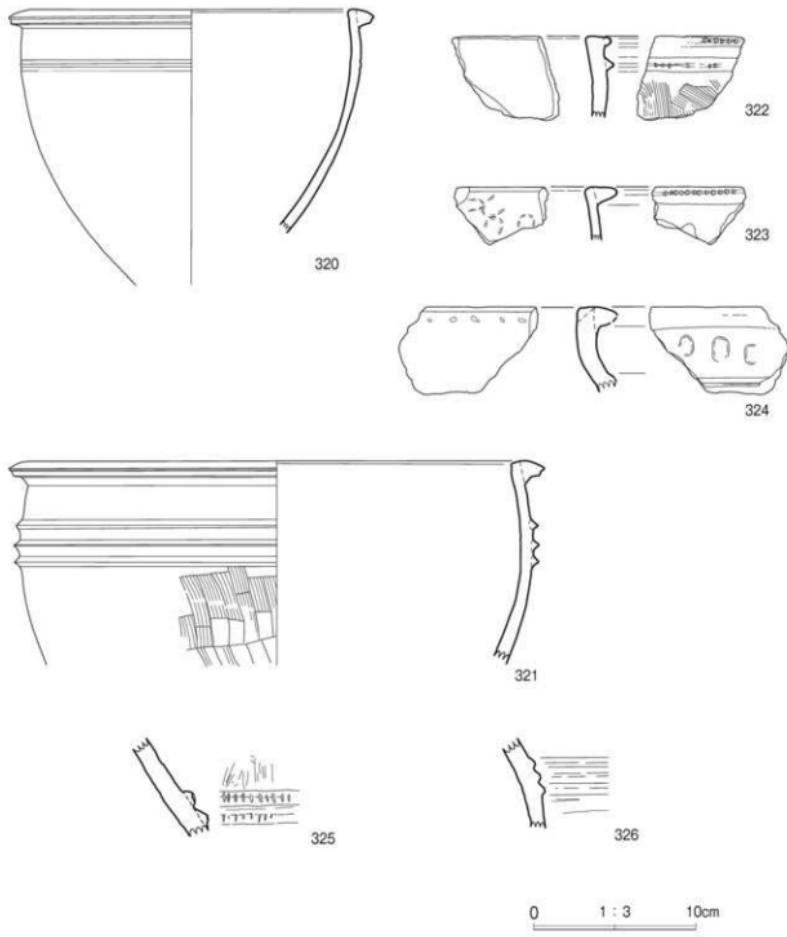
328と329は須恵器の甕である。古代に下る可能性もある。328は頸部近くの破片であり、外面には格子状の叩き痕が残る。329は胴部破片でやはり格子状の叩き痕が明瞭である。

330は高环の杯部であり、屈曲する部位の小破片である。

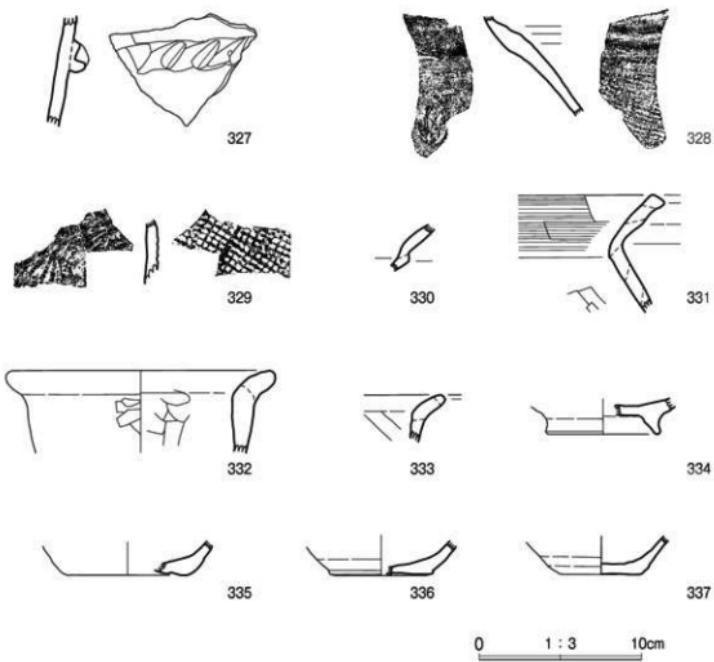
### 4 古代の遺物

331～333は古代の甕などの煮沸具である。331は「く」字形に屈曲する口縁部～頸部である。口縁部はヨコナデ調整がなされる。二次的な火熱を受けて赤色に変化している。332も口縁部から頸部の破片で、短く外反する口縁部を有する。厚手で外面の造りも粗く、当該期の甕としては質實な感じも受けますが、内面の頸部以下のケズリ調整は古代の甕の特徴を示している。333も内面の頸部以下にケズリ調整の跡が認められる。

334～337は古代の供膳用具である。334は高台付きの杯か椀である。335は杯の底部である。底面はヘラによる切り離しである。336も杯であり、底面の端部が外方に張り出す。底面はヘラによる切り離しである。337も杯の底部～胴部であり、底面はヘラ切りである。これらの4点と332を除く甕には、胎土中に赤色の粒子が混入する点が特徴として挙げられる。



第70図 包含層出土遺物土器実測図② (弥生、S=1/3)



第71図 包含層出土遺物土器実測図⑯（古墳時代、古代、S=1/3）

第2表 【遺物観察表①（包含層：前期、後期前葉の土器）】

遺物番号	測量部位	測出地点【解説】	法盤(cm)※(推定値)	調 整		色		焼成	出土の特徴	備考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
1	深鉢 口縁部	D 3 E 5 【V1b】	- - -	ナデ→刺突文	ナデ	灰黄褐色 (10YR4/2)	灰黄褐色 (10YR4/2)	良好	1mm以下との灰白色粒 微細な透明光沢	
2	深鉢 口縁部	E 5 【V1b】	- - -	ナデ→凹線文	ナデ	に赤い黄褐色 (10YR4/3)	輕 (7.5YR5-6)	良好	微細から2mm以下の灰光無色透明。光 沢黒褐色。灰白色。に赤い黄褐色粒	
3	深鉢 口縁部	E 5 【V1b】	- - -	ナデ→刺突文	ナデ	に赤い黄褐色 (7.5YR4/3)	灰黄褐色 (10YR4/2)	良好	4mm以下との黒褐色 微細な浅灰色。灰白色。透明光沢	

第3表 【遺物観察表②（遺構内：後期中葉～古代の土器）】

遺物番号	測量部位	測出地点【解説】	法盤(cm)※(推定値)	調 整		色		焼成	出土の特徴	備考	
				外 面	内 面	外 面	内 面				
4	鉢 口縁部	S A 1 【V1b】	- - -	ミガキ→沈線文。貝 殻模様文	ミガキ	灰灰褐色 (10YR4/1)	に赤い黄褐色 (10YR6/3)	良好	2mm以下との黒色透明粒 1mm以下との灰白色。に赤い黄褐色。 黑色透明粒	IV	
5	深鉢 口縁部	S A 3 【V1b】	- - -	粗いナデ→刺突文	粗いナデ	に赤い黄褐色 (7.5YR5-5)	灰黄褐色 (10YR6/2)	良好	1mm以下との透明光沢粒	I a	
6	深鉢 口縁部	S A 5 【V1b】	- - -	ナデ→刺突文	ナデ	灰灰褐色 (10YR4/2)	黒褐色 (10YR2/2)	良好	微細な透明白光沢	I a	
7	深鉢 口縁部	S A 5 【V1b】	- - -	丁寧なナデ→貝殻 模様文	粗いナデ	に赤い黄褐色 (10YR5/3)	黒褐色 (10YR3/1)	良好	1mm以下との透明光沢粒	I a	
8	小鉢 口縁部	S A 5 【V1b】	- - -	ナデ→沈線文	貝殻条痕、ナ デ	明るい褐色 (5YR5-6)	に赤い黄褐色 (7.5YR4/4)	良好	微細な光沢粒	I a	
9	深鉢 口縁部	S A 5 【V1b】	- - -	ナデ→刺突文。沈線 文	粗かいナデ	明るい褐色 (5YR6/6)	黒褐色 (5YR6/4)	良好	2mm以下との灰褐色。 灰白色粒 1mm以下との灰白色。黒色粒	I b	
10	深鉢 口縁部	S A 5 【V1b】	- - -	粗かいナデ→刺突文、 凹線文、沈線文	粗かいナデ	黒褐色 (10YR3/1) 輕 (5YR6-6)	輕 (7.5YR6/6) 輕 (5YR6/7)	不良	3mm以下との淡い黄褐色。 1mm以下との灰白色。白灰色	I b	
11	深鉢 口縁部	S A 5 【V1b】	- - -	貝殻条痕。ナデ	貝殻条痕。ナ デ	明るい褐色 (5YR6/6)	に赤い黄褐色 (7.5YR6/4)	良好	5mm以下との黒色透明 1mm以下との灰白色 微細な透明白光沢	I e	
12	深鉢 口縁部	S C 1 【V1b】	- - -	ナデ→刺突文	ナデ	褐 (7.5YR4/3)	暗褐色 (7.5YR2/3)	良好	微細な透明白光沢 1mm以下との灰白色	I a	
13	深鉢 口縁部	S C 1 【V1b】	- - -	粗いナデ→貝殻押 引文	貝殻条痕。ナ デ	褐 (7.5YR6/4) に赤い黄褐色 (10YR7/4)	に赤い黄褐色 (10YR6/3)	良好	3mm以下との灰褐色 2mm以下との灰白色。黒色粒	I a	
14	深鉢 口縁部～脚部	S C 1 【V1b】	(28.0)	- - -	貝殻条痕。ナデ→沈 線文。貝殻模様文、 刺突文	貝殻条痕。ナ デ	明るい褐色 (10YR5/6)	明るい褐色 (5YR5-6)	良好	1mm以下との光沢無色透明。灰褐色。 灰黄色。黒褐色	II
15	深鉢 口縁部	S C 1 【V1b】	- - -	貝殻条痕	粗いナデ	黒褐色 (7.5YR1/1)	褐 (7.5YR4/4)	良好	2mm以下との透明。に赤い褐色。灰 色。黒色	I e	
16	円盤形 土製品	S C 1 【V1b】	- - -	工具ナデ	工具ナデ	明るい褐色 (7.5YR5/8) 黒褐色 (10YR3/1)	黒褐色 (10YR3/2)	良好	5mm以下との灰白色 微細な黑色光沢。透明光沢粒	III	
17	深鉢 口縁部	S C 2 【V1b】	- - -	ナデ→刺突文	ナデ	黒褐色 (10YR3/2)	灰黄褐色 (10YR4/2)	良好	微細な黑色透明白光沢	I a	
18	深鉢 口縁部	S C 2 【V1b】	- - -	ナデ→凹線文	ナデ	に赤い黄褐色 (10YR6/4)	に赤い黄褐色 (10YR7/4)	良好	微細から3mm以下の褐色。に赤い灰白 色。褐色。灰色	I a	
19	深鉢 口縁部	S C 2 【V1b】	- - -	ナデ→沈線文、刺突 文	ナデ	黒褐色 (10YR3/2)	黒褐色 (10YR1/1)	良好	微細な金色光沢。に赤い黄褐色	I b	
20	深鉢 口縁部	S C 2 【V1b】	- - -	ナデ→刺突文。沈線 文	ナデ	に赤い黄褐色 (5YR4/3)	明るい褐色 (5YR5-6)	良好	3mm以下との灰白色 微細な褐色の味のある氷晶粒	I b	
21	深鉢 口縁部	S C 2 【V1b】	- - -	ナデ→刺突文。沈線 文	ナデ	黒褐色 (5YR1/7)	暗褐色 (7.5YR5/6)	良好	3mm以下との灰白色 微細な褐色の味のある氷晶粒	I b	
22	深鉢 口縁部	S C 2 【V1b】	- - -	ナデ→沈線文。刺突 文	ナデ→刺突文	暗褐色 (7.5YR5/6)	暗褐色 (7.5YR5/7)	良好	3mm以下との灰白色 微細な透明白光沢	I c	
23	深鉢 口縁部	S C 2 【V1b】	- - -	貝殻条痕	粗いナデ	に赤い黄褐色 (10YR6/4)	に赤い黄褐色 (10YR7/4)	良好	微細から3mm以下の灰褐色。に赤い黄 色。に赤い褐色。暗褐色	I d	
24	深鉢 口縁部	S C 2 【V1b】	- - -	貝殻条痕	貝殻条痕ナ デ	暗褐色 (7.5YR5/6)	に赤い黄褐色 (7.5YR5/6)	良好	微細から3mm以下の灰白色。光沢無色 透明。暗褐色	I e	
25	口縁部 ～底部	S C 2 【V1b】	(23.5)	- - -	ナデ	粗いナデ	灰黄褐色 (10YR5/2)	灰褐色 (7.5YR4/2)	良好	1mm以下との灰白色 3mm以下との透明	I e
26	深鉢 口縁部	S C 2 【V1b】	- (8.1)	-	粗いナデ	ナデ	に赤い黄褐色 (7.5YR6-4)	に赤い黄褐色 (10YR5/3)	良好	6mm以下との灰白色の粒 微細から3mm以下の灰白色。暗褐色 色	I e
27	深鉢 脚部	S C 2 【V1b】	- - -	ミガキ→沈線文	ミガキ	黒褐色 (7.5YR1/7)	褐 (10YR4/4)	良好	微細から2mm以下の灰白色	IV	
28	深鉢 口縁部	S C 3 【V1b】	(29.7)	- - -	貝殻条痕。ナデ→貝 殻模様文	ナデ	黒褐色 (7.5YR5/6)	に赤い黄褐色 (7.5YR5/6)	良好	3mm以下との黒色光沢 2mm以下との変色光沢 1mm以下との褐色の光沢。透明光沢	I a スス 付石
29	深鉢 口縁部	S C 3 【V1b】	- - -	貝殻条痕	貝殻条痕	ナデ	に赤い黄褐色 (7.5YR6/4)	に赤い黄褐色 (10YR5/4)	良好	4mm以下との赤い黄褐色 2mm以下との灰白色包	I a
30	深鉢 口縁部	S C 3 【V1b】	- - -	貝殻条痕→貝殻 模様文	ナデ	貝殻条痕 (5YR5/6)	明るい褐色 (5YR5/6)	良好	3mm以下との灰白色 2mm以下との透明白光沢 1mm以下との黒褐色	I c	

遺物番号	部種 部類	機場地点 【標高】	法規(m) * (推定地)	調 整		色 調		底土の特徴	備考			
				外 面	内 面	外 面	内 面					
34	深鉢 口縁部	S C 3 【Wb】	-	-	-	貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐色 (10YR4-3)	黒褐色 (10YR3/1)	良好	4 mm以下の灰白色粒	I e
35	深鉢 口縁部	S C 3 【Wb】	(190)	-	-	貝殻条痕、ナデ	貝殻条痕、ナデ	にぶい黄褐色 (10YR4-3)	黒褐色 (10YR3/1)	良好	3 mm以下の乳白色粒	I e
36	台付磁器 台部	S C 3 【Wb】	-	(110)	-	ナデ	ナデ+粗い工 具跡	にぶい黄褐色 (10YR4-2)	にぶい褐 (7.5YR5-4)	良好	微細から 2 mm以下の灰白色。黒色光 沢粒	質
37	鉢 口縁部	S C 3 【Wb】	-	-	-	ミガキ+沈線文	ナデ+構方向 のケズリ	暗灰褐色 (2.5YR5-6)	暗褐色 (2.5YR5-2)	良好	2 mm以下の角閃石 微細から 2 mm以下の赤褐色。光沢明 色透明。灰色、淡黄色粒	N
38	円盤形 土製品	S C 3 【Wb】	-	-	-	ナデ+沈線文	ナデ	灰褐色 (7.5YR5-6)	にぶい黄褐色 (7.5YR5-6)	良好	4 mm以下のにぶい黄褐色粒	質
39	円盤形 土製品	S C 3 【Wb】	-	-	-	貝殻条痕、ナデ	貝殻条痕	暗灰褐色 (7.5YR5-6)	にぶい褐 (7.5YR5-6)	良好	2 mm以下の糊状色、明褐色粒	質 又々 付着
40	深鉢 口縁部	S C 4 【Wb】	-	-	-	ナデ+樹突文、沈線 文	ナデ	にぶい黄褐色 (7.5YR5-4)	にぶい黄褐色 (10YR4-3)	良好	3 mm以下の灰白色粒	I b
41	深鉢 口縁部	S C 4 【Wb】	-	-	-	ナデ+門柱文、刺突 文	ナデ+ナデ	明褐色 (7.5YR5-6)	褐 (7.5YR6-8)	良好	4 mm以下のにぶい黄褐色 微細から 7 mm以下の灰白色粒 微細な黑色光沢粒	I b
42	深鉢 口縁部	S C 4 【Wb】	-	-	-	貝殻条痕+凹点文、 凹面文、刺突文	貝殻条痕	褐 (7.5YR4-3)	赤褐色 (5YR4-6)	良好	微細な黑色光沢、透明光沢粒	I b
43	深鉢 口縁部	S C 4 【Wb】	-	-	-	貝殻条痕+凹点文、 凹面文、刺突文	ナデ	にぶい黄褐色 (10YR4-3)	にぶい黄褐色 (10YR5-2)	良好	2 mm以下の灰白色 微細な黑色光沢、黑色光沢粒	I b
44	深鉢 口縁部	S C 4 【Wb】	-	-	-	貝殻条痕+刺突文、 凹点文、凹面文	貝殻条痕+刺突文	にぶい黄褐色 (10YR6-4)	にぶい黄褐色 (10YH6-3)	良好	5 mm以下の乳白色粒 2 mm以下の空洞、黒褐色粒	I b
45	深鉢 口縁部 +腹部	S C 4 【Wb】	-	-	-	刺+ナデ+樹突文	刺+ナデ	暗褐色 (2.5YR5-6)	暗褐色 (2.5YR5-7)	良好	微細から 3 mm以下の灰白色。透明光沢粒	I b
46	深鉢 口縁部	S C 4 【Wb】	-	-	-	貝殻条痕+樹突文	貝殻条痕	にぶい黄褐色 (10YR6-3)	にぶい黄褐色 (10YR6-4)	良好	3 mm以下の灰白色粒 微細な透明光沢、黑色光沢粒	I d
47	深鉢 口縁部	S C 4 【Wb】	-	-	-	貝殻条痕+沈線文	貝殻条痕	にぶい褐 (7.5YR7-4) 暗灰褐色 (2.5YR4-2)	にぶい褐 (7.5YR6-4)	良好	微細な光沢色透明明 微細から 4 mm以下の灰褐色、赤褐色、灰 褐色、灰白色 2 mm以下の空洞、黒褐色粒	I e
48	深鉢 口縁部	S C 5 【Wb】	-	-	-	貝殻条痕、ナデ+貝 殻条痕文	ナデ	褐 (5YR6-6)	褐 (7.5YR6-6)	良好	2 mm以下の灰白色、明赤色、褐色。 透明光沢粒 1 mm以下の黑色光沢粒	I a
49	深鉢 口縁部	S C 5 【Wb】	-	-	-	ナデ+樹突文	ナデ	にぶい褐 (7.5YR6-4)	明褐色 (2.5YR7-6)	良好	微細な透明光沢、黒褐色	I a 又々 付着
50	深鉢 底部	S C 5 底部	(10.4)	-	-	斜方向の貝殻条痕 底部はナデ	斜方向の貝殻条痕	暗灰褐色 (5YR4-2)	明赤褐色 (5YR5-6)	良好	2 mm以下の浅黃褐色、黑色光沢、透 明光沢粒を含む	I d 又々 付着
51	深鉢 脚部	S C 5 【Wb】	-	-	-	瘤・斜方向のミガキ 引文	瘤ナデ	にぶい褐 (7.5YR6-4)	褐 (7.5YR6-6)	良好	3 mm以下の糊状色、にぶい褐色、灰 褐色 1 mm以下の黑色光沢粒	I d
52	深鉢 口縁部	S C 5 【Wb】	-	-	-	ミガキ+沈線文、磨 擦磨文	ミガキ	にぶい赤褐色 (2.5YR4-3)	にぶい赤褐色 (2.5YR4-4)	良好	3 mm以下の赤褐色、明赤褐色 2 mm以下の乳白色粒	N
53	円盤形 土製品	S C 5 【Wb】	-	-	-	貝殻条痕、ナデ	貝殻条痕、ナ デ	にぶい黄褐色 (10YR5-3)	にぶい黄褐色 (10YR5-2)	良好	2 mm以下の灰白色、灰褐色色 1 mm以下の赤褐色粒	質
54	深鉢 口縁部	S C 6 【Wb】	(24.5)	-	-	貝殻条痕→貝殻 引文	貝殻条痕→貝殻 引文	にぶい黄褐色 (10YR4-3)	にぶい黄褐色 (10YR5-4)	良好	7 mm以下の赤褐色 2 mm以下の灰白色粒 微細な黑色光沢粒	I a
55	深鉢 口縁部	S C 6 【Wb】	-	-	-	貝殻条痕→貝殻 引文	貝殻条痕→貝殻 引文	黒褐色 (10YR3-2)	にぶい赤褐色 (2.5YR4-4)	良好	4 mm以下の灰白色 3 mm以下の赤褐色粒	I a
56	深鉢 口縁部	S C 6 【Wb】	(24.5)	-	-	貝殻条痕→貝殻 引文	貝殻条痕→貝殻 引文	にぶい黄褐色 (10YR4-3)	にぶい黄褐色 (10YR5-4)	良好	4 mm以下の灰白色 3 mm以下の赤褐色粒	I a
57	深鉢 口縁部	S C 6 【Wb】	-	-	-	貝殻条痕→貝殻 引文	貝殻条痕→貝殻 引文	黒褐色 (10YR3-2)	にぶい赤褐色 (2.5YR4-4)	良好	3 mm以下の赤褐色 3 mm以下の灰白色粒	I a
58	深鉢 口縁部	S C 6 【Wb】	-	-	-	ナデ+樹突文、沈線 文、凹点文	ナデ	暗灰褐色 (10YR4-1)	黒褐色 (10YR3-1)	良好	1 mm以下の乳白色粒 微細な透明光沢	I b 又々 付着
59	深鉢 口縁部	S C 7 【Wb】	(29.3)	-	-	瘤・斜方向のミガキ 引文	瘤方向のナデ	にぶい褐 (7.5YR5-4)	にぶい黄褐色 (10YR5-4)	良好	微細から 3 mm以下の灰白色、黒褐色、浅 黃褐色。にぶい赤褐色粒	I a
60	深鉢 口縁部 +腹部	S C 7 【Wb】	-	-	-	瘤・斜方向のミガキ 引文	瘤方向のナデ	にぶい褐 (7.5YR5-4)	にぶい黄褐色 (10YR5-4)	良好	4 mm以下の灰褐色 1 mm以下の赤褐色光沢粒	I a
61	深鉢 口縁部	S C 7 【Wb】	-	-	-	瘤・斜方向のミガキ 引文	瘤方向のナデ	にぶい褐 (7.5YR5-4)	にぶい黄褐色 (10YR5-4)	良好	4 mm以下の灰白色 1 mm以下の赤褐色光沢粒	I a
62	深鉢 口縁部	S C 7 【Wb】	-	-	-	瘤方向の柔軟瘤→刺 突文	柔軟瘤後ナデ	にぶい褐 (7.5YR5-4)	褐 (SYR6-6)	良好	4 mm以下の灰褐色 1 mm以下の赤褐色光沢粒	I a
63	深鉢 口縁部	S C 7 【Wb】	-	-	-	ナデ+樹突文、凹 面文、貝殻条痕文	ナデ+ナデ	黑褐色 (10YR2-2)	褐 (7.5YR6-8)	良好	3 mm以下の乳白色粒	I b
64	鉢	S C 7 【Wb】	(21.6)	-	-	貝殻条痕+沈線文、 貝殻条痕文	貝殻条痕	褐 (7.5YR4-3)	黒褐色 (10YR3-1)	良好	微細な透明光沢、黑色光沢粒	I c
65	小鉢	S C 7 【Wb】	-	-	-	ナデ+樹突文	ナデ	明褐色 (10YR7-6)	黑 (10YR17-1)	良好	微細なやや黄色味の透明光沢粒	I c
66	台付磁器 台	S C 7 【Wb】	-	-	-	ナデ+樹突文、沈線 文	ナデ	明褐色 (10YR6-6)	黑 (10YR2-1)	良好	2 mm以下の乳白色粒 微細な黄褐色味の透明光沢	VII
67	円盤形 土製品	S C 7 【Wb】	-	-	-	ナデ	ナデ	明褐色 (2.5YR5-6) 暗灰褐色 (5YR4-1)	黑褐色 (SYR3/1)	良好	3 mm以下の明赤褐色 2 mm以下の灰白色粒	質
68	深鉢 口縁部 +腹部	S C 7 【Wb】	-	-	-	斜方向の貝殻条痕 +貝殻条痕文	斜方向の貝殻 条痕	にぶい褐 (7.5YR5-4)	黒褐色 (10YR3/2)	良好	2 mm以下の灰白色、褐灰色粒 1 mm以下の赤褐色	I e
69	深鉢 口縁部	S C 8 【Wb】	-	-	-	貝殻条痕→刺突 文引文	貝殻条痕、ナ デ	にぶい褐 (7.5YR7-4)	にぶい黄褐色 (10YR7-4)	良好	4 mm以下の灰褐色 2 mm以下の赤褐色、透明光沢粒	I a
70	深鉢 口縁部	S C 8 【Wb】	-	-	-	ナデ+樹突文、刺突 文引文	ナデ	褐 (7.5YR6-6)	にぶい褐 (7.5YR5-3)	良好	2 mm以下の浅黃褐色 1 mm以下の灰白色粒	I b 白付着
71	台付磁器 皿	S C 11 【Wb】	(8.6)	-	-	ナデ+樹突文	貝殻条痕、ナ デ	にぶい褐 (7.5YR7-3)	明褐色 (2.5YR5-6)	良好	2 mm以下の透明光沢、灰色粒 微細な赤褐色	質 白付着

第4表 遺物観察表③(包含層:後期中葉~古代の土器)

遺物番号	形態部位	出土場所	法規(㎝)※(推定的)	調査				堆成	出土の特徴	備考			
				外面		内面							
				口径	底径	器高							
72	深鉢 口縁部	C 7 【Vb】	-	-	-	貝殻条痕、ナデ→貝殻縫縫文	貝殻条痕	明治期 (SYR5-6)	明赤褐 (SYR5-6)	良好	2 mm以下の灰白色粒		
73	深鉢 口縁部	D 3 【Vb】	(26.2)	-	-	工具による粗いナデ→貝殻縫縫文	貝殻条痕	明褐 (7.5YR5-6)	明褐 (7.5YR5-6)	良好	4 mm以下とのにない白色粒 黒褐色から2 mm以下の灰白色粒		
74	深鉢 口縁部	E 4 【Vb】	-	-	-	貝殻条痕、ナデ→貝殻縫縫文	貝殻条痕、ナデ	明治期 (SYR6-4)	に赤い粒 (SYR6-4)	良好	2 mm以下の黑色光沢粒		
75	深鉢 口縁部	E 6 【Vb】	-	-	-	横方向のナデ→貝殻縫縫文	貝殻条痕、黒斑	褐 (10YR3/3)	褐 (7.5YR4/3)	良好	黒褐色から1 mmの光沢黒色透明、光沢黒色、褐色、褐色、ぶる、黄褐色、褐灰色		
76	深鉢 口縁部	E 3 【Vb】	-	-	-	ナデ→貝殻縫縫文	横方向のナデ	明褐 (7.5YR5-6)	黑褐 (10YR3/2)	良好	3 mm以下との灰白色 黒褐色		
77	深鉢 口縁部	D 3 【Vb】	(33.0)	-	-	貝殻条痕、ナデ→貝殻縫縫文	オリ→黒	に赤い粒 (SYR2-4)	に赤い粒 (7.5YR5-4)	良好	3 mm以下の灰白色 黒褐色		
78	深鉢 口縁部	F 3 【Vb】	(29.0)	-	-	ナデ→貝殻縫縫文	ナデ	明褐 (10YR3/4)	灰褐 (10YR4/2)	良好	4 mm以下の灰白色 黒褐色		
79	深鉢 口縁部	D 3 【Vb】	-	-	-	ナデ→貝殻縫縫文	横方向のナデ	黑褐 (10YR3/1)	褐 (SYR6-8)	良好	1 mmから2 mmの黄色味のある黒色 粒		
80	深鉢 口縁部	D 3 【Vb】	-	-	-	粗いナデ→貝殻縫縫文	貝殻条痕、ナデ	黑褐 (10YR3/2)	黑 (10YR2/1)	良好	1 mm以下の黄色味のある黒物粒		
81	深鉢 口縁部	E 4 【Vb】	-	-	-	ナデ→貝殻縫縫押引文	粗いナデ	黑 (10YR2/1)	赤褐 (SYR4-6)	良好	5 mm以下の灰白色 4 mm以下の白色		
82	深鉢 口縁部	D 4 【Vb】	-	-	-	ナデ→貝殻縫縫文	ナデ	灰褐 (7.5YR4/2)	に赤い粒 (10YR6/4)	良好	1 mmから2 mmの透明光沢粒		
83	深鉢 口縁部	D 6 【Vb】	(17.6)	-	-	ナデ→刺突文	ナデ	に赤い粒 (7.5YR6/4)	灰褐 (7.5YR5-2)	良好	2 mm以下の浅褐色、黑色光沢、透 明光沢粒		
84	深鉢 口縁部	F 3 【Vb】	-	-	-	ナデ→工具による 刺突文	粗いナデ	に赤い粒 (7.5YR5-4)	明褐 (7.5YR5-6)	良好	4 mm以下の金色に光る紫緑		
85	深鉢 口縁部	E 4 【Vb】	-	-	-	貝殻条痕、ナデ→刺 突文	貝殻条痕	明褐 (10YR3-3)	明褐 (7.5YR3-3)	良好	2 mm以下の浅褐色、灰色粒 黒褐色の金色光沢粒		
86	深鉢 口縁部	F 5 【Vb】	-	-	-	横方向のナデ→刺 突文	ナデ	に赤い粒 (7.5YR3/5)	明褐 (2.5YR3/2)	良好	黒褐色から2 mmの光沢黒色透明、光沢 黒褐色、褐色、明黄褐色		
87	深鉢 口縁部	D 4 【Vb】	-	-	-	ナデ→刺突文	ナデ	褐 (7.5YR5-6)	に赤い粒 (7.5YR5-6)	良好	1から2 mmの黄色味のある黒物粒 1 mm以下との透明白光沢粒		
88	深鉢 口縁部	D 3 【Vb】	-	-	-	ナデ→刺突文	粗いナデ→刺 突文	明褐 (SYR5-6) 黒褐 (10YR3/2)	黑 (SYR2/1)	良好	黒褐色から1 mm以下の灰白色、透明光 沢粒		
89	深鉢 口縁部	D 6 【Vb】	-	-	-	粗いナデ→工具によ る刺突文	粗いナデ	に赤い粒 (SYR6/3)	暗赤褐 (SYR3-2)	良好	4 mm以下の灰白色 3 mm以下の青褐色 2 mm以下との透明白光沢粒		
90	深鉢 口縁部	D 4 【Vb】	-	-	-	ナデ→刺突文	ナデ→凹凸 突、刺突文	淡黄 (2.5YR4/8)	黑 (2.5YR1/1)	良好	2 mm以下の黑色、灰白色の光沢粒 黒褐色の透明白光沢		
91	深鉢 口縁部	C 4 【Vb】	-	-	-	工具ナデ→刺突文	工具ナデ	褐 (7.5YR6-6)	に赤い粒 (10YR6/4)	良好	2 mm以下の白色		
92	深鉢 口縁部	D 4 【Vb】	-	-	-	貝殻条痕→刺突文	貝殻条痕→刺 突文	明褐 (7.5YR6/4)	明褐 (7.5YR4/1)	良好	5 mm以下の灰白色 2 mm以下とのに赤い粒黒褐色。雲母		
93	深鉢 口縁部	D 3 【Vb】	(17.0)	-	-	ナデ→沈縞文	工具によるナ デ	黑褐 (10YR2/1)	黑褐 (10YR2/1)	良好	2 mm以下の灰白色 黒褐色		
94	深鉢 口縁部	C 4 【Vb】	-	-	-	ナデ→沈縞文	ナデ→沈縞文	黑褐 (2.5YR3/1)	に赤い粒 (2.5YR4/3)	良好	1 mm以下の透明白光沢粒		
95	深鉢 口縁部	D 4 【Vb】	-	-	-	ナデ→沈縞文	ナデ	明褐 (7.5YR5-6)	黑褐 (2.5YR3/1)	良好	黒褐色から2 mmの角褐色、光沢無色透明 灰褐色、明黄褐色		
96	深鉢 口縁部	F 4 【Vb】	-	-	-	横、斜方向の工具ナ デ→沈縞文	ナデ	黑褐 (2.5YR3/2)	に赤い粒 (2.5YR5-6)	良好	黒褐色から2 mmの光沢黒褐色、光沢無 色透明、に赤い黄褐色		
97	深鉢 口縁部	D 3 【Vb】	-	-	-	ナデ→沈縞文	ナデ	褐 (SYR6/6)	黑 (N2/)	良好	3 mm以下の灰白色 2 mm以下との透明白光沢粒 黒褐色		
98	深鉢 口縁部	D 3 【Vb】	-	-	-	ナデ→沈縞文	ナデ	黑褐 (7.5YR3/1)	黑褐 (7.5YR3/1)	良好	3 mm以下のに赤い黄褐色 1 mm以下との黒色光沢粒		
99	深鉢 口縁部	D 3 【Vb】	-	-	-	ナデ→沈縞文	ナデ	黑褐 (2.5YR3/2)	明褐 (7.5YR5-6)	良好	1 mm以下との灰白色 黒褐色の透明白光沢粒		
100	深鉢 口縁部	F 4 【Vb】	-	-	-	ナデ→沈縞文	ナデ	黑褐 (7.5YR2/2)	に赤い粒 (7.5YR4/4)	良好	5 mm以下のあか褐色 4 mm以下との灰白色 黒褐色の透明白光沢		
101	深鉢 口縁部	D 3 【Vb】	-	-	-	ナデ→沈縞文	ナデ	明治期 (SYR5-6)	明褐 (7.5YR5-6)	良好	2 mm以下の灰白色 黒褐色の透明白光沢		
102	深鉢 口縁部	C 4 【Vb】	-	-	-	ナデ→沈縞文	横方向のナデ	灰褐 (10YR4/2)	物 (7.5YR6-6)	良好	黒褐色から4 mmの暗灰色、光沢黒褐色、 褐色、明黄褐色		
103	深鉢 口縁部	D 3 【Vb】	-	-	-	ナデ→沈縞文	ナデ	明治期 (SYR5-8)	暗赤褐 (2.5YR4/2)	良好	3 mm以下の灰白色 黒褐色から2 mm以下の透明白光沢粒		
104	深鉢 口縁部	D 3 【Vb】	-	-	-	工具ナデ、貝殻条 痕→刺突文	貝殻条痕	暗赤褐 (2.5YR4/2)	灰褐 (10YR4/2)	良好	光沢無色透明、光沢黒褐色、褐色		
105	深鉢 口縁部 ～側部	D 3 【Vb】	(25.8)	-	-	貝殻条痕、ナデ→刺 突文	貝殻条痕、ナ デ	に赤い粒 (7.5YR6/4)	褐 (SYR6/6)	良好	2～4 mm位の黒褐色粒		

遺物番号	器種 部位	検出地点 【層位】	法種【基準】	調査		色	調査	焼成	胎土の特徴	備考	
				外	面		外	面			
106	深鉢 口縁部	C 4 【M b】	-	-	-	ナデ→刺突文、沈綴文	ナデ	にぶい黄褐色 (5YR4/4)	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	良好 機織から3mmの光沢無色透明	I b
107	深鉢 口縁部	E 3 【M b】	-	-	-	ナデ→刺突文、沈綴文	横方向のナデ	黄褐色 (10YR5/6)	にぶい黄褐色 (10YR4/1)	良好 機織から3mmの光沢無色透明。光沢黒褐色、灰白色、浅褐色	I b
108	深鉢 口縁部	D 3 【M b】	-	-	-	横方向のナデ→刺突文、沈綴文	横方向のナデ	明褐色 (7.5YR5/6)	にぶい明褐色 (7.5YR5/3)	良好 機織な透明光沢	I b
109	深鉢 口縁部	D 4 【M b】	-	-	-	ナデ→刺突文、沈綴文	ナデ	黒 (7.5YR3/1)	明褐色 (7.5YR4/1)	良好 機織な黒色光沢	I b
110	深鉢 口縁部	E 4 【M b】	(24.8)	-	-	ナデ→工具による刺突文、沈綴文	ナデ	褐 (7.5YR4/4)	褐 (7.5YR4/5)	良好 3mm以下	I b
111	深鉢 口縁部	D 4 【M b】	-	-	-	ナデ→刺突文、沈綴文	ナデ	相 (7.5YR6/6)	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	良好 機織から3mmの開口、物光、光沢無色透明褐灰色、浅褐色	I b
112	深鉢 口縁部	E 4 【M b】	-	-	-	ナデ→刺突文、凹綴文	ナデ	黒褐色 (2.5YR3/1)	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	良好 機織から2mm以下の光沢無色透明	I b
113	深鉢 口縁部	D 3 【M b】	-	-	-	貝皿条痕→刺突文、凹綴文、凹点文	ナデ	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	にぶい赤褐色 (10YR5/4)	良好 7mm以下にぶい赤褐色 4mm以下にぶい暗赤褐色 1mm以下にぶい黒褐色・透明光沢	I b
114	深鉢 口縁部	E 3 【M b】	-	-	-	ナデ→刺突文、凹点文	ナデ	黒褐色 (7.5YR3/1)	にぶい赤褐色 (7.5YR4/4)	良好 機織な透明光沢	I b
115	深鉢 口縁部	D 5 【M a】	-	-	-	貝皿条痕、ナデ→工具による刺突文、凹綴文	貝皿条痕→刺突文、凹綴文	褐褐色 (7.5YR3/4)	黒 (7.5YR2/1)	良好 3mm以下にぶい乳白色 2mm以下の無色透明物質	I b
116	深鉢 口縁部	E 5 【M b】	(26.1)	-	-	貝皿条痕→工具による刺突文、凹綴文	貝皿条痕	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	黒褐色 (10YR1/3)	良好 1mm以下の透明光沢	I b スヌ 付着
117	深鉢 口縁部	E 6 【M b】	-	-	-	貝皿条痕→刺突文、沈綴文、凹綴文	貝皿条痕	褐 (7.5YR4/3)	褐 (7.5YR4/2)	良好 2mm以下の灰白色 機織な透明光沢、黑色光沢	I b
118	深鉢 口縁部	D 5 【M b】	-	-	-	ナデ→沈綴文	ナデ	相 (5YR6-6)	明褐色 (SYR5/6)	良好 1mm以下の黄色味のある無色粒	I b
119	深鉢 口縁部	D 6 【M b】	-	-	-	ナデ→沈綴文、刺突文	ナデ→沈綴文	相 (7.5YR6/6)	相 (SYR6/6)	良好 3mm以下の乳白色 機織な無色透明物質、黒色光沢無	I b
120	深鉢 口縁部	E 3 【M b】	-	-	-	ナデ→沈綴文、刺突文	ナデ	にぶい赤褐色 (10YR4/3)	相 (10YR6/6)	良好 機織から3mmの光沢黒褐色。光沢無色透明。にぶい黄褐色、褐色、灰白色	I b
121	深鉢 口縁部	F 4 【M b】	(16.0)	-	-	粒いナデ→沈綴文、貝皿条痕文、刺突文	ナデ	相 (7.5YR6/6)	黒褐色 (10YR3/2)	良好 1~2mmの透明光沢	I b
122	深鉢 口縁部	D 3 【M b】	(20.6)	-	-	ナデ→沈綴文、刺突文	ナデ	黒 (10YR2/1)	黒褐色 (10YR3/1)	良好 1mm以下の透明光沢。乳白色	I b
123	深鉢 口縁部	E 5 【M b】	-	-	-	ナデ→沈綴文、刺突文	ナデ	明褐色 (10YR7/6)	浅褐色 (10YR8/4)	良好 3mm以下の乳白色 無色透明光沢	I b
124	深鉢 口縁部	F 4 【M b】	-	-	-	ナデ→沈綴文、刺突文	ナデ	黒褐色 (10YR3/2)	明褐色 (SYR5/6)	良好 3mm以下の乳白色 1mm以下の黒褐色	I b
125	深鉢 口縁部	E 4 【M b】	-	-	-	ナデ→沈綴文、刺突文	ナデ→沈綴文	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい明褐色 (7.5YR5/5)	良好 機織な透明光沢	I b
126	深鉢 口縁部	C 4 【M b】	-	-	-	ナデ→沈綴文、刺突文	ナデ	褐褐色 (7.5YR3/4)	明褐色 (10YR6/6)	良好 3mm以下の乳白色	I b
127	深鉢 口縁部	E 3 【M b】	-	-	-	ナデ→沈綴文、刺突文	ナデ	相 (5YR7/6)	褐褐色 (SYR4/1)	良好 4mm以下にぶい乳白色 機織なやや暗味に光る光沢	I b
128	深鉢 口縁部	D 3 【M b】	-	-	-	横方向ナデ→沈綴文、刺突文	横方向ナデ	褐 (7.5YR4/3)	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	良好 機織から3mmの大穴灰白色、明褐色、光沢黒褐色。光沢無色透明。褐白色	I b
129	深鉢 口縁部	E 4 【M b】	-	-	-	ナデ→沈綴文、刺突文	ナデ	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	黒褐色 (10YR3/1)	良好 2mm以下の透明光沢、灰白色、黒色光沢	I b スヌ 付着
130	深鉢 口縁部	F 5 【M b】	-	-	-	ナデ→沈綴文、貝皿条痕文による横方向のナデ	褐褐色 (7.5YR4/2)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	にぶい黄褐色 (10YR4/2)	良好 4mm以下にぶい黄褐色 3mm以下にぶい灰白色 1mm以下にぶい透明光沢	I b
131	深鉢 口縁部	D 4 【M b】	-	-	-	ナデ→沈綴文、刺突文	ナデ→刺突文	黒褐色 (7.5YR3/1)	明褐色 (7.5YR5/6)	良好 1mm以下にぶい乳白色	I b
132	深鉢 口縁部	D 3 【M b】	-	-	-	ナデ→沈綴文、刺突文	ナデ→沈綴文	萌オリーブ褐色 (2.5YR3/3)	萌黄褐色 (2.5YR4/2)	良好 2mm以下の灰白色 機織な透明光沢	I b
133	深鉢 口縁部	D 4 【M b】	(17.6)	-	-	ナデ→沈綴文、刺突文	ナデ	黒 (5YR17/1) 灰褐色 (7.5YR5/2)	明褐色 (5YR1/1) 灰褐色 (7.5YR5/2)	良好 4mm以下にぶい灰白色 機織な透明光沢	I b
134	深鉢 口縁部	F 4 【M b】	-	-	-	ナデ→沈綴文、刺突文	ナデ→沈綴文	にぶい相 (7.5YR5/4)	相 (7.5YR4/4)	良好 機織な金色光沢	I b
135	深鉢 口縁部	D 4 【M b】	-	-	-	ナデ→沈綴文、刺突文 貝皿条痕文	ナデ	相 (7.5YR6/6) 灰褐色 (10YR4/2)	相 (5YR6/8)	良好 機織から2mmの光沢無色透明。光沢黒褐色、灰白色、刺突文、にぶい乳白色	I b
136	深鉢 口縁部	C 3 【M b】	-	-	-	ナデ→四綴文、刺突文	ナデ	相 (7.5YR7/6)	明褐色 (SYR5/6)	良好 機織から黒褐色、光沢無色透明。浅黄色、灰白色	I b
137	深鉢 口縁部	D 4 【M b】	-	-	-	ナデ→刺突文、沈綴文、凹綴文	ナデ→刺突文	褐褐色 (7.5YR4/6)	明褐色 (SYR5/6)	良好 機織から黒褐色、光沢無色透明	I b

遺物番号	測量部位	検出地点 【層位】	法線(cm)●(標準値)	調		色		焼成	胎土の特徴	備考	
				外面	内面	外面	内面				
138	深鉢 口縁部	F 3 【V1b】	- - -	ナデ→刺突文、凹点文	ナデ→連続刺突文(10YR4/2)	灰黒褐 (10YR5-2)	にぶい黄褐色 (10YR4/2)	良好	1mm以下のにぶい赤褐色 纏綿な透明光沢	I b	
139	深鉢 口縁部	D 6 【V1b】	- - -	貝殻条痕。ナデ→貝殻条痕。ナデ	貝殻条痕。ナデ	暗褐 (7.5YR3-4)	赤褐 (5YR4/6)	良好	6mm以下の乳白色 微細無色透明光沢	I c	
140	深鉢 口縁部	E 3 【V1b】	(22.0)	- -	ナデ→刺突文、沈線文、貝殻条痕、ナデ	貝殻条痕、ナデ	にぶい相 (7.5YR5-4)	にぶい橙 (7.5YR4/4)	良好	1mm以下のにぶい褐色、透明光沢	I c
141	深鉢 口縁部	E 4 【V1b】	- - -	ナデ→刺突文、凹線文、沈線文、凹点文	貝殻条痕	暗褐 (7.5YR3-3)	にぶい黄褐色 (5YR4/3)	良好	4mm以下のにぶい黄褐色 2mm以下の金色の青苔、灰白粒	I c	
142	深鉢 口縁部	C 3 【V1b】	- - -	貝殻条痕→貝殻条痕、沈線文	貝殻条痕	黒 (5YR1/4)	明赤褐 (5YR5-8)	良好	3mm以上の黒色 2mm以上の無色透明光沢	I c	
143	深鉢 口縁部	F 4 【V1b】	- - -	ナデ→刺突文、凹線文、沈線文	ナデ→刺突文	にぶい相 (7.5YR5-3)	灰黒 (7.5YR4/1)	良好	2mm以下の灰色、にぶい褐色光沢 スス付着	I d	
144	深鉢 口縁部	D 7 【V1b】	- - -	横方向のナデ→貝殻条痕	ナデ	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	明赤褐 (5YR5-6)	良好	纏綿から2mmの灰色、褐色、赤褐色 褐色、褐色粒	I d	
145	深鉢 口縁部	D 3 【V1b】	- - -	ナデ→沈線文	ナデ	黒褐 (7.5YR4/2)	にぶい橙 (7.5YR4/4)	良好	5mm以下の灰色の粒	I d	
146	深鉢 口縁部	D 4 【V1b】	(19.2)	- -	貝殻条痕。ナデ→刺突文	貝殻条痕、ナデ	灰赤褐 (5YR5-1)	明赤褐 (5YR5-6)	良好	3mm以下のにぶい褐色粒	I d
147	深鉢 口縁部	E 4 【V1b】	- - -	ナデ→沈線文	貝殻条痕、ナデ	にぶい黄褐色 (7.5YR5-4)	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	良好	3mm以下の灰褐色 纏綿な透明光沢	I d スス付着	
148	深鉢 口縁部	F 5 【V1b】	(21.0)	- -	ナデ→凹線文	ナデ	褐 (7.5YR4/3)	灰黒褐 (10YR4/2)	良好	3mm以下の黒褐色、褐色、灰白色粒	I d
149	深鉢 口縁部	F 4 【V1b】	(16.0)	- -	ナデ→刺突文	工具による横方向のナデ	褐 (SYR6/6)	灰黒 (7.5YR4/1)	良好	2mm以下の黒褐色光沢 1mm以下の透明光沢、透明光沢	I d
150	深鉢 口縁部	E 4 【V1b】	- - -	ナデ→刺突文	ナデ	黒褐 (7.5YR3-1)	灰黒 (7.5YR4/2)	良好	3mm以下の乳白色、赤褐色光	I d	
151	深鉢 口縁部	E 4 【V1b】	- - -	ナデ→刺突文	ナデ	黒褐 (7.5YR3-1)	にぶい黄褐色 (7.5YR4/3)	良好	2mm以下の透明光沢	I d	
152	深鉢 口縁部	C 3 【V1b】	- - -	横方向の貝殻条痕	貝殻条痕	横方向の貝殻条痕	にぶい相 (10YR5-2)	良好	4mm以下の黒褐色光沢 1mm以下の白色粒	I d	
153	口縁部～胴部	E 3 【V1b】	- - -	横方向の貝殻条痕	貝殻条痕	横方向の貝殻条痕	灰黒褐 (10YR4/1)	良好	3mm以下の褐色、赤褐色 2mm以下のにぶい褐色 1mm以下の透明光沢	I d	
154	深鉢 口縁部～底部	D 6 【V1b】	(15.4) (8.0) 21.5	- - -	貝殻条痕。ナデ→沈線文(口縁部)	ナデ	にぶい褐 (7.5YR6-3)	灰黒褐 (10YR5-2)	良好	5mm以下の灰白色 纏綿な透明光沢	I e
155	深鉢 口縁部	E 4 【V1b】	- - -	ナデ	貝殻条痕	にぶい黄褐色 (10YR6-2)	浅褐 (10YR8/3)	良好	3mm以下の褐色、黒褐色光 2mm以下の灰白色 1mm以下の褐色光	I e	
156	深鉢 口縁部～胴部	D 3 【V1b】	(20.2)	- -	貝殻条痕	貝殻条痕	暗褐 (10YR3-3)	褐 (7.5YR4-3)	良好	纏綿な黒色光沢、金色光沢、灰白色 絶縁	I e
157	深鉢 口縁部	C 3 【V1b】	- - -	ナデ	ナデ	黒褐 (10YR3/1)	黒褐 (7.5YR1/1)	良好	8mm以下の褐色光 4mm以下の白色光	I e	
158	深鉢 底部	E 4 【V1b】	(12.0)	- -	ナデ	ナデ	にぶい赤褐 (SYR4/4)	赤褐 (SYR4/6)	良好	3mm以下の透明、灰白色、乳白色光 2mm以下の黑色、灰白色光	I e
159	深鉢 底部	D 8 【V1b】	(12.2)	- -	ナデ	貝殻条痕	浅褐粒 (7.5YR6-6)	褐 (10YR8/6)	良好	3mm以下の褐色光	I e
160	深鉢 底部	E 4 【V1b】	(8.0)	- -	ナデ	ナデ	明赤褐 (SYR5/6)	明赤褐 (5YR5-8)	良好	4mm以下の赤褐色 纏綿から8mm以下の灰白色光	I e
161	深鉢 底部	D 3 【V1b】	(12.0)	- -	貝殻条痕	風化が著しい 剥離が認めない	褐 (2.5YR5-6)	褐 (2.5YR8-6)	良好	2mm以下の灰白色、透明光	I e
162	深鉢 口縁部	D 3 【V1b】	(24.0)	- -	貝殻条痕→貝殻条痕	貝殻条痕	黒褐 (7.5YR3-1)	明赤褐 (7.5YR5-6)	良好	纏綿から2mmの灰白色光 纏綿な光沢	II
163	深鉢 口縁部	C 3 【V1b】	- - -	貝殻条痕。ナデ→貝殻条痕文、沈線文	ナデ、貝殻条痕文	にぶい赤褐 (SYR5/4)	にぶい赤褐 (7.5YR4/4)	良好	2mm以下の灰白色粒 纏綿な光沢	II	
164	深鉢 口縁部	D 3 【V1b】	(17.2)	- -	ナデ→貝殻条痕文	貝殻条痕、ナデ	日赤褐 (7.5YR8-6)	にぶい黄褐色 (10YR4/5)	良好	纏綿から2mmの光沢無色透明、光沢 更に褐色、褐灰色、にぶい褐色 灰白色	II
165	深鉢 口縁部	D 3 【V1b】	(16.0)	- -	貝殻条痕→貝殻条痕文、沈線文、刺突文	貝殻条痕、ナデ	にぶい黄褐色 (10YR6-4)	にぶい黄褐色 (10YR6-4)	良好	纏綿から2mm大の光沢無色透明、光沢 更に褐色、褐黄色、灰白色、褐灰色 粒	II
166	深鉢 口縁部	C 4 【V1b】	(24.6)	- -	貝殻条痕→貝殻条痕文、沈線文、刺突文	貝殻条痕	黒褐 (7.5YR3/1)	赤褐 (SYR4/6)	良好	3mm以下の明赤褐色 2mm以下の透明、灰白色光	II
167	深鉢 口縁部	D 3 【V1b】	- - -	貝殻条痕→貝殻条痕文、沈線文	貝殻条痕	明赤褐 (SYR5/6)	にぶい赤褐 (5YR4/4)	良好	1mm以下の透明光沢	III a	
168	深鉢 口縁部	C 4 【V1b】	- - -	ナデ→沈線文、貝殻条痕文	ナデ、貝殻条痕	黒褐 (2.5YR3/1)	黄灰 (2.5YR4/1)	良好	纏綿から4mmの高い黄褐色、灰白色 にぶい黄褐色、明赤褐色、光沢 無色透明、光沢無色光	III a	
169	深鉢 口縁部	D 3 【V1b】	- - -	貝殻条痕→貝殻条痕文、沈線文	貝殻条痕	褐 (7.5YR4/6)	褐 (7.5YR4/6)	良好	黒色光沢、透明光沢	III a	
170	深鉢 口縁部	E 4 【V1b】	- - -	貝殻条痕→貝殻条痕文、沈線文	貝殻条痕	灰褐 (7.5YR5-6)	褐 (7.5YR5-6)	良好	1mm以下の灰白色 纏綿な透明光沢	III a	

造物番号	器種	部位	検出地点	法種(※) (※推定的)	調査		色	調査	焼成	胎土の特徴	備考	
					口径	底径	高さ	外 面	内 面			
171	深鉢	口縁部	F 4 【M b】	-	-	-	貝殻余痕・貝殻腹 縫文、沈縫文	貝殻余痕	黒褐色 (5YR3/1)	赤褐色 (5YR1/6)	良好	2mm以下の乳白色、無色透明胎土粒
172	深鉢	口縁部	D 3 【Vb b】	-	-	-	貝殻余痕、ナデー・貝 殻腹縫文、沈縫文	横方向の貝殻 余痕	灰褐色 (7.5YR4/2) 相 (7.5YR6/6)	明るい 明るい 黒褐色 (5YR5/6)	良好 良好	6mm以下の明赤褐色粒、 1~5mm以下の黑色光沢・透明光沢 粒
173	深鉢	口縁部	C 3 【Vb b】	-	-	-	ナデー・貝殻腹縫文、 縫文	ナデー、貝殻余 痕	黒褐色 (10YR3/2)	明るい 黒褐色 (7.5YR5/6)	良好	黒褐色な黑色光沢。浅黄色光沢
174	深鉢	口縁部	D 4 【M b】	-	-	-	貝殻余痕・貝殻腹 縫文、沈縫文	貝殻余痕	暗褐色 (10YR○/○)	明るい (7.5YR5/6)	良好	3mm以下の褐色、灰白色的粒 黒褐色な光沢粒
175	深鉢	口縁部	D 3 【Vb b】	-	-	-	ナデー・貝殻腹縫文、 縫文	貝殻余痕	相 (5YR6-8)	明るい (2.5YR5-8)	良好	5mm以下の褐色粒 3mm以下の乳白色粒 黒褐色な無色透明の光沢粒
176	深鉢	口縁部	D 4 【Vb b】	-	-	-	貝殻余痕・貝殻腹 縫文、沈縫文	貝殻余痕	灰褐色 (10YR4/2)	にふい・黄褐色 (10YR5/4)	良好	黒褐色から光沢黒褐色、光沢無色透明、 にふい・黄褐色、灰白色、褐色光沢
177	深鉢	口縁部	F 4 【Vb b】	-	-	-	貝殻余痕・貝殻腹 縫文、沈縫文	貝殻余痕	明るい (7.5YR3/3)	灰 (7.5YR4/4)	良好	黒褐色から2mmの光沢のある無色透明、 灰白色、黒褐色
178	深鉢	口縁部	D 3 【Vb b】	-	-	-	ナデー・貝殻腹縫文、 縫文	貝殻余痕	相 (2.5YR6/6)	相 (2.5YR6/8)	良好	3mmの灰白色、黄色味のある無色粒
179	口縫部	E 3 【Vb b】	-	-	-	貝殻余痕、ナデー・貝 殻腹縫文、沈縫文	貝殻余痕	灰褐色 (7.5YR4/2)	にふい・赤褐色 (5YR4/4)	良好	2mm以下の灰白色、透明光沢	
180	口縫部	E 3 【Vb b】	(24.1)	-	-	-	貝殻余痕、ナデー・貝 殻腹縫文、凹縫文	貝殻余痕、ナ デー	灰褐色 (7.5YR1/4)	にふい・赤褐色 (5YR1/4)	良好	2mm~3mmの透明光沢粒
181	口縫部	E 4 【Vb b】	-	-	-	貝殻余痕・貝殻腹 縫文、沈縫文	貝殻余痕、ナ デー	にふい・黄褐色 (10YR5/3)	明るい (5YR5/6)	良好	2mm以下の黒色光沢、透明粒	
182	深鉢	口縫部	E 4 【Vb b】	(19.3)	-	-	貝殻余痕、ナデー・貝 殻腹縫文	貝殻余痕	明るい (5YR5/6)	にふい・相 (7.5YR5/3)	良好	2mm以下の灰白色 1mm以下の光沢黒褐色
183	深鉢	口縫部	F 4 【Vb b】	-	-	-	貝殻余痕・貝殻腹 縫文	貝殻余痕	にふい・黒褐色 (7.5YR5/4)	黒褐色 (2.5YR3/1)	良好	黒褐色から1mm大の光沢黒褐色、光沢 無色透明、明褐色、にふい・褐色
184	深鉢	口縫部	E 4 【Vb b】	-	-	-	ナデー・貝殻腹縫文	貝殻余痕	黒褐色 (10YR3/2)	にふい・黄褐色 (10YR3/3)	良好	1mm以下のにふい・黄褐色
185	深鉢	口縫部	C 4 【Vb b】	-	-	-	貝殻余痕・貝殻腹 縫刺突文	貝殻余痕	黒褐色 (10YR3/2)	にふい・黒褐色 (10YR4/3)	良好	2mm以下の黒褐色
186	深鉢	口縫部	E 4 【Vb b】	-	-	-	貝殻余痕・貝殻腹 縫文	貝殻余痕	にふい・赤褐色 (5YR4/2)	明るい (5YR4/4)	良好	3mm以下の明赤褐色 2mm以下の灰白色 黒褐色から2mm以下の透明光沢
187	深鉢	口縫部	E 3 【Vb b】	-	-	-	貝殻余痕・貝殻腹 縫文	貝殻余痕	にふい・黄褐色 (10YR5/3)	明るい (7.5YR5/6)	良好	黒褐色な透明光沢、黒色光沢
188	深鉢	口縫部	C 4 【Vb b】	-	-	-	ナデー・貝殻腹縫文、 刺突文	ナデー、貝殻余 痕	灰褐色 (7.5YR4/1)	明るい (7.5YR5/6)	良好	1mm以下のナデー光沢黒褐色
189	深鉢	口縫部	F 6 【Vb b】	-	-	-	ナデー・貝殻腹縫文、 刺突文	ナデー、貝殻余 痕	明るい (2.5YR5/6)	明るい (2.5YR3/1)	良好	2mm以下の乳白色、無色透明胎土粒
190	深鉢	口縫部	E 3 【Vb b】	-	-	-	貝殻後縫施し・一部 部崩消・沈縫文	ミガキ	にふい・黒褐色 (7.5YR5/6)	黒褐色 (7.5YR5/6)	良好	3mm以下の灰白色、黒褐色、光沢粒 1mm以下の灰白色、黑色粒
191	深鉢	口縫部	D 4 【Vb b】	-	-	-	貝殻後縫施し・一部 部崩消・沈縫文	横方向のミガ キ	にふい・黒褐色 (10YR6/4)	灰褐色 (10YK5/2)	良好	2mm以下の黒色光沢、灰白色、褐色 光沢
192	深鉢	口縫部	F 5 【Vb b】	-	-	-	ミガキ・沈縫文	ミガキ	黒褐色 (2.5YR2/1)	灰褐色 (2.5YR6/2)	良好	1mm以下の黒色光沢
193	深鉢	口縫部	B 4 【Vb b】	-	-	-	貝殻後縫施し・一部 部崩消・沈縫文	ナデー、ミガキ	灰褐色 (10YR6/2)	にふい・黄褐色 (10YR6/2)	良好	1mm以下の明赤褐色、灰白色、透明 光沢
194	深鉢	口縫部	D 4 【M b】	-	-	-	貝殻後縫施し・一部 部崩消・沈縫文	横方向のミガ キ	明るい (2.5YR3/1)	黒褐色 (7.5YR3/4)	良好	1~2mmの乳白色粒
195	深鉢	口縫部	C 4 【Vb b】	-	-	-	貝殻後縫施し・一部 部崩消・沈縫文、刺 突文	ミガキ	にふい・黒褐色 (7.5YR6/4)	黒褐色 (10YK3/1)	良好	2mm以下の光沢黒褐色、明褐色 1mm以下の光白色
196	深鉢	口縫部	E 4 【Vb b】	-	-	-	貝殻後縫施し・一部 部崩消・沈縫文、刺 突文	横方向のミガ キ	にふい・黒褐色 (10YR7/2)	にふい・黑褐色 (10YH7/2)	良好	2mm以下の黒色光沢、黑色、灰白色 光沢
197	深鉢	口縫部	E 5 【Vb b】	-	-	-	貝殻後縫施し・一部 部崩消・沈縫文	斜・横方向の ミガキ	にふい・黄褐色 (10YR6/6)	にふい・黄褐色 (10YR6/6)	良好	1mm以下の黒色光沢、明赤褐色、灰 白色
198	深鉢	口縫部	E 3 【Vb b】	-	-	-	貝殻後縫施し・一部 部崩消・沈縫文、刺 突文	貝殻余痕	にふい・黒褐色 (10YR6/4)	明るい (10YR4/1)	良好	2mm以下の透明光沢粒 1mm以下のにふい・褐色
199	深鉢	口縫部	D 5 【Vb b】	-	-	-	貝殻後縫施し・一部 部崩消・沈縫文、刺 突文	横方向の工具 ナデー	灰褐色 (10YR6/2)	にふい・黄褐色 (10YH6/3)	良好	1mm以下の灰白色
200	深鉢	口縫部	D 6 【M b】	-	-	-	貝殻後縫施し・一部 部崩消・沈縫文、刺 突文	横方向ナデー 部ミガキ	にふい・黒褐色 (10YR7/3)	にふい・黒褐色 (10YR7/2)	良好	黒褐色な灰白色粒
201	深鉢	口縫部	E 4 【Vb b】	(36.5)	-	-	貝殻後縫施し・一部 部崩消・沈縫文	横方向のミガ キ	にふい・黒褐色 (7.5YR6/4)	にふい・黒褐色 (7.5YR5/4)	良好	2mm以下の赤色、灰白色、褐色光沢
202	深鉢	口縫部	E 5 【Vb b】	-	-	-	貝殻後縫施し・一部 部崩消・沈縫文、刺 突文	横方向のミガ キ・横開文	灰褐色 (5YR4/1)	黒褐色 (7.5YR3/1)	良好	1mm以下の明赤褐色
203	深鉢	口縫部	E 3 【Vb b】	-	-	-	貝殻後縫施し・一部 部崩消・沈縫文、刺 突文、孔裂文	工具による横 方向のナデー	灰褐色 (10YR5/2)	にふい・黄褐色 (10YR6/3)	良好	1mm以下の灰白色光沢
204	浅鉢	口縫部	D 5 【Vb b】	-	-	-	貝殻後縫施し・一部 部崩消・沈縫文	ミガキ	にふい・黒褐色 (10YR6/4)	灰褐色 (10YK5/2)	良好	3mm以下の黒色光沢、褐色、透明光 沢
205	深鉢	包含層 一括	-	-	-	-	貝殻後縫施し・一部 部崩消・孔裂文、沈 縫文	横方向のナデー ・開文、沈縫文	灰褐色 (7.5YR4/2)	黒褐色 (7.5YR3/1)	良好	3mm以下の褐色の石 1mm以下の黒色光沢粒

遺物番号	器種 部位	出土地点 【解説】	法線(cm) ●(※標準)	調 整 色				焼成	胎土の特徴	備考
				外 面	内 面	外 面	内 面			
206	深鉢 口縁部	E 3 【V1b】	- - -	縞文後洗施し一部削消→孔列文、沈綱文	横方向のナデ。工具ナデ	に赤い赤茶(5YR6/4)	輕(5YR6/6)	良好	2mm以下の中白色光沢粒 1mm以下の中白色粒	IV
207	深鉢 口縁部	E 4 【V1b】	- - -	縞文後洗施し一部削消→沈綱文	横方向の工具 ナデ。目皿新規	灰灰(7.5YR5/6)	褐灰(7.5YR5/6)	良好	2mm以下の中白色光沢 1mm以下の中白色光沢	IV
208	深鉢 口縁部	F 3 【V1b】	- - -	縞文後洗施し一部削消→沈綱文	ミガキ	黒褐(10YR3/2)	黒褐(10YR3/1)	良好	3mm以下の中白色光沢 2mm以下の中白色光沢	IV
209	深鉢 口縁部	C 3 【V1b】	- - -	沈綱文、ナデ→沈綱文	ナデ	褐(7.5YR5/6)	に赤い褐色(7.5YR5/6)	良好	2mm以下の中白色光沢 微細な透明白沢	Va
210	深鉢 口縁部	E 3 【V1b】	- - -	ナデ→沈綱文	ナデ	灰褐(7.5YR4/2)	に赤い褐色(7.5YR4/4)	良好	2mm以下の中白色光沢 微細な透明白沢	Va
211	深鉢 口縁部 ～側部	C 3 【V1b】 (219)	- - -	横方向ナデ→沈綱文	ナデ	褐(5YR6/6) 灰褐(5YR5/2)	明赤褐(5YR17/1) (10YR4/2)	良好	3mm以下の中白色光沢 2mm以下の中白色光沢、淡黃褐色。 透明光沢	Va
212	深鉢 側部	E 3 【V1b】	- - -	ナデ→沈綱文	ナデ	黑(5YR17/1)	明赤褐(5YR5/6)	良好	4mm以下の中白色光沢 微細な無色透明光沢、黑色純光沢 物	Va
213	深鉢 口縁部 ～側部	D 3 【V1b】 (390)	- - -	ナデ、工具ナデ→沈綱文、刺突文	ナデ	黑褐(2.5YR3/1)	褐(7.5YR6/6)	良好	微細から4mm以下の光沢透明、淡黃 色、黑色光沢、褐色、褐灰色、灰白色 光沢	Va
214	深鉢 口縁部	E 4 【V1b】	- - -	ナデ→沈綱文	ナデ	褐(2.5YR6/6)	灰褐(7.5YR4/2)	良好	3mm以下の中白色光沢	Va
215	深鉢 口縁部	E 3 【V1b】	- - -	横方向ナデ→沈綱文	ナデ	黒褐(2.5Y3/1) 褐(2.5Y6/6)	褐(2.5Y4/1) (2.5Y6/6)	良好	微細から2mm以下の中白色光沢 光沢無色透明、灰白色、淡黃褐色	Va
216	深鉢 口縁部 ～底部	E 3 【V1b】	- - -	ナデ→沈綱文	ナデ	に赤い褐(7.5YR5/4)	褐(7.5YR4/4)	良好	5mm以下の中白色光沢 3mm以下の中白色光沢、透明光 2mm以下の中白色	Va
217	深鉢 口縁部	F 4 【V1b】	- - -	ナデ→沈綱文	ナデ	に赤い褐(7.5YR5/4)	黒褐(7.5YR3/1)	良好	2mm以下の中黄色のある無色物 1mm以下の中白色無色	Va
218	深鉢 口縁部	D 3 【V1b】	- - -	ナデ→沈綱文	ナデ	黒褐(2.5YR3/2)	に赤い褐(7.5YR4/4)	良好	2mm以下の中黄色 微細な無色光沢	Va
219	深鉢 口縁部	D 4 【V1b】	- - -	ナデ→沈綱文	ナデ	黑(7.5YR17/1) (10YR5/1)	黒褐(10YR5/1)	良好	2mm以下の中白色光沢 微細な透明白沢	Va
220	深鉢 口縁部	D 3 【V1b】	- - -	横方向のナデ→沈綱文	横方向のナデ	褐(7.5YR6/6) (10YR5/3)	に赤い褐(7.5YR4/2)	良好	2mm以下の中白色光沢、光沢黒褐色、 に赤い黃褐色、灰白色	Va
221	深鉢 口縁部	D 4 【V1b】 (193)	- - -	横縱方向ナデ→沈綱文	横縱方向ナデ	灰褐(10YR4/2)	明赤褐(2.5YR5/6)	良好	3mm以下の中黄色 2mm以下の中白色光沢、透明光沢 1mm以下の中白色光沢	Va
222	深鉢 口縁部	D 3 【V1b】	- - -	横方向のナデ→沈綱文、刺突文	横方向のナデ	灰褐(7.5YR4/1)	褐(7.5YR6/6)	良好	2mm以下の中白色光沢 1mm以下の中白色光沢、透明光沢	Va スヌ 着付
223	深鉢 口縁部 ～側部	E 3 【V1b】 (221)	- - -	横方向ナデ、ナデ後斜方向の工具ナデ ～凹側部	ナデ後斜方向 の工具ナデ	褐(5YR6/6) 黑褐(2.5YR3/1)	に赤い赤褐(5YR4/4)	良好	微細から3mm以下の光沢透明、光沢 3mm以下の中褐色 1mm以下の中褐色、灰白色、透明光 沢	Va
224	深鉢 口縁部	E 3 【V1b】 (160)	- - -	ナデ	ナデ	褐(5YR4/3)	灰褐(10YR4/3)	良好	微細から3mm以下の光沢透明、光沢 に赤い赤褐色、灰白色、褐 灰褐色	Vb
225	深鉢 口縁部	E 3 【V1b】	- - -	ナデ、工具ナデ→側突文	ナデ、工具ナ デ	褐(7.5YR6/6) 黑褐(2.5YR3/1)	に赤い黄褐(10YR4/3)	良好	微細から5mm以下の光沢透明、光沢 3mm以下の中褐色 1mm以下の中褐色、灰褐色、透明光 沢	Vb
226	深鉢 口縁部	包含層 ～一括	- - -	横方向ナデ、横方向 の工具ナデ→側突文	横方向のナ デ、一部工具 ナデ	褐(7.5YR17/1) 黑褐(2.5YR3/1)	赤褐(5YR4/8)	良好	微細から2mm以下の中白色光沢 微細な透明白沢	Vb
227	深鉢 口縁部	E 3 【V1b】	- - -	横ナデ→側突文	横横方向ナデ	灰褐(7.5YR4/2)	明赤褐(5YR5/6)	良好	3mm以下の中黄色光沢 1mm以下の中透明光	Vb
228	深鉢 口縁部	D 3 【V1b】	- - -	貝殻条痕、ナデ	貝殻条痕	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	良好	微細から2.3mm以下の中白色光沢 微細な淡黄色光沢	Vb
229	深鉢 口縁部	E 3 【V1b】 (215)	- - -	ナデ	ナデ	に赤い赤茶(5YR4/4)	明赤褐(5YR5/6)	良好	2mm以下の中白色光沢 微細な透明白沢	Vb
230	深鉢 口縁部	E 3 【V1b】	- - -	ナデ	ナデ	赤褐(5YR4/3)	明赤褐(2.5YR17/1) (5YR4/8)	良好	2mm以下の中白色光沢 微細な無色透明光沢、黑色光沢	Vb
231	深鉢 口縁部	E 3 【V1b】	- - -	ナデ→貝殻条痕、 刺突文	ナデ→貝殻条 痕、刺突文	灰褐(10YR4/3)	褐(7.5YR4/6)	良好	2mm以下の中白色光沢 微細な透明白沢、黑色光沢	Vb
232	深鉢 底部	C 3 【V1b】 (54)	-	ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	に赤い黄褐(10YR5/4)	に赤い黄褐(10YR5/3)	良好	6mm以下の中白色光沢 2mm以下の中白色光沢、透明光沢	Vb
233	深鉢 口縁部	E 3 【V1b】	- - -	縞文後洗施し一部削消→沈綱文	ミガキ	に赤い黄褐(10YR7/3)	に赤い黄褐(10YR6/3)	良好	3mm以下の中褐色、灰白色、透明光沢 白	Vb
234	深鉢 口縁部	E 4 【V1b】	- - -	縞文後洗施し一部削消→沈綱文	貝殻条痕、 刺突文	灰褐(10YR5/2)	灰褐(2.5YR6/2)	良好	3mm～4mm以下の中白色光沢 2mm以下の中白色光沢、明暗灰色 1mm以下の中白色光沢、淡黃褐色	Vb
235	台形 底部	E 3 【V1b】	- - -	横方向のナデ→沈綱文、刺突文	横方向のナ デ	に赤い褐(7.5YR5/4)	に赤い赤褐(7.5YR5/3)	良好	1～2mmの乳白色光沢	Vb 付着
236	台形 底部	D 4 【V1b】	- - -	粘りナデ、ミガキ→沈綱文	粘りナデ、ミ ガキ	に赤い黄褐(10YR6/4)	に赤い黄褐(10YR6/4)	良好	1mm以下の中白色光沢 2～3mmの乳白色光沢、赤褐色	Vb 赤付着

番号	器種 部位	検出地点 【解説】	法種【 解説】*	調 整		色 調		焼成	胎土の特徴	備考	
				外 面	内 面	外 面	内 面				
237	台付彌形 皿	C 3 【M b】	- - -	ナデ→沈攢文	ナデ→沈攢文	にぶい・暗 褐色(10YR7-3)	にぶい・暗 褐色(7.5YR6-4)	良好	2mm以下の浅黄色、灰白色粒 微細な透明光沢粒	Ⅷ	
238	台付彌形 皿	F 4 【M b】	- - -	ナデ→沈攢文	ナデ	にぶい・暗 褐色(10YR7-4)	にぶい・暗 褐色(7.5YR6-4)	良好	微細な明赤色粒	Ⅷ 白付着	
239	台付彌形 皿	E 4 【M b】	- - -	ナデ→沈攢文、乳 沢文、树皮文	ナデ	にぶい・暗 褐色(7.5YR6-4)	にぶい・暗 褐色(7.5YR6-4)	良好	2mm以下の灰白色粒 微細な透明光沢粒	Ⅷ	
240	台付彌形 皿	D 3 【M b】	(25.0)	- - 橫方向のナデ→沈 攢文、乳沢文、树皮 文	横方向のナデ	にぶい・黄 褐色(10YR4-3)	にぶい・黄 褐色(10YR5-6)	良好	1mm以下の浅黄色。黑色光沢、透 明光沢粒	Ⅷ	
241	台付彌形 皿	E 4 【M b】	- - -	ナデ→刻文変	ナデ	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-4)	にぶい・暗 褐色(7.5YR6-4)	良好	微細から2mmの灰黑色透明光沢。 灰白色、にぶい褐色。闊灰色粒	Ⅷ	
242	台付彌形 皿	F 4 【M b】	(12.4)	- - 文	ナデ→孔列文、四隅 文	にぶい・暗 褐色(10YR7-4)	にぶい・暗 褐色(5YR6-4)	良好	2mm以下の明赤色粒	Ⅷ	
243	台付彌形 皿と台	E 4 【M b】	(20.6)	9.5	10.1	ナデ→刻文変	ナデ、工具に よるナデ	明褐色 (5YR5-6)	良好	3mm以下の灰白色 微細な透明光沢粒	Ⅷ 白付着
244	台付彌形 皿	D 3 【M b】	(18.9)	- -	工具による軽いナ デ→沈攢文	工具ナデ後指 ナデ	にぶい・黄 褐色(5YR5-6)	明褐色 (5YR5-6)	良好	3mm以下にぶい・暗色。透明光沢 1mm以下の黑色光沢粒	Ⅷ 白付着
245	台付彌形 皿	F 4 【M b】	(20.0)	- -	工具ナデ→工具刺 文→刻文変	工具ナデ	後削 擦(10YR8-4)	擦 (7.5YR7-6)	良好	4mm以下の暗赤色 微細な灰白色粒	Ⅷ
246	台付彌形 皿	F 4 【M b】	- - -	ナデ→沈攢文、乳 沢文	ナデ→横・斜 方向のミガキ	明褐色 (7.5YR5-6)	明褐色 (7.5YR5-6)	良好	微細から2mmの黑色光沢、灰白色。 浅黄色。黑色透明光沢粒	Ⅷ	
247	台付彌形 皿	E 5 【M b】	- - -	ナデ→沈攢文	ナデ	にぶい・暗 褐色(7.5YR6-6)	にぶい・暗 褐色(7.5YR6-6)	良好	1mm以下の黑色光沢、透明光沢粒	Ⅷ	
248	台付彌形 皿	F 4 【M b】	(25.0)	- -	ナデ→刻文変、沈攢 文	ナデ	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-3)	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-4)	良好	1~2mmの透明光沢粒	Ⅷ
249	台付彌形 皿と台	F 4 【M b】	- - -	- - -	ナデ	丁寧なナデ	灰褐色 (5YR4-2)	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-4)	良好	1mm以下の透明光沢粒	Ⅷ 白付着
250	台付彌形 皿と台	E 7 【M b】	- - -	- - -	工具ナデ	ナデ	にぶい・暗 褐色(7.5YR6-4)	にぶい・暗 褐色(7.5YR6-4)	良好	5mm以下の灰白色 微細な透明光沢、灰白色光沢粒	Ⅷ
251	台付彌形 皿	D 3 【M b】	- - (9.6)	- - -	ナデ	ナデ	明赤褐色 (5YR5-6)	明褐色 (5YR5-6)	良好	微細な透明光沢、灰白色粒	Ⅷ
252	台付彌形 皿	C 4 【M b】	- - (12.0)	- - -	横方向のナデ→貝 殻面彌縫文、孔列文	ナデ	相 (7.5YR7-6)	相 (7.5YR7-6)	良好	2mm以下の暗褐色、後黄褐色。透明 工具、黑色光沢粒	Ⅷ
253	台付彌形 皿と台	D 3 【M b】	- - (11.9)	- - -	横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい・暗 褐色(10YR6-4)	相 (7.5YR6-6)	良好	微細から2mmの深黒褐色、灰白色。 淡黄色。光沢無色透明粒	Ⅷ
254	台付彌形 皿と台	D 3 【M b】	- - -	- - -	ナデ	ナデ	相 (7.5YR6-6)	相 (7.5YR6-6)	良好	微細から2mmの大穴灰黑色透明、浅 黄褐色。光沢無色透明、灰白色、褐 色粒	Ⅷ
255	台付彌形 皿	C 4 【M b】	- - (10.7)	- - -	ナデ→刻文変	ナデ	相 (7.5YR7-6)	にぶい・暗 褐色(7.5YR7-6)	良好	1mm以下の赤褐色光沢	Ⅷ 白付着
256	台付彌形 皿	E 6 【M b】	- - (10.1)	- - -	横方向のナデ	脂押さえ	相 (5YR7-6)	にぶい・暗 褐色(7.5YR7-4)	良好	3mm以下の黑色光沢粒 2mm以下の浅黄色。透明光沢粒	Ⅷ
257	台付彌形 皿	C 4 【M b】	- - (9.7)	- - -	ナデ	ナデ	明赤褐色 (5YR5-6)	赤褐色 (5YR4-6)	良好	1~2mmの透明光沢粒	Ⅷ 白付着
258	円彌形 土製品	E 4 【M b】	- - -	- - -	ミガキ	ミガキ	灰黃褐色 (10YR4-2)	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-2)	良好	微細な黑色光沢。透明光沢粒	Ⅷ
259	円彌形 土製品	E 3 【V a】	- - -	- - -	ナデ	ナデ	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-3)	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-4)	良好	3mm以下の細灰色 2mm以下の淡黃褐色光沢 1mm以下の灰白色。透明光沢粒	Ⅷ 白スヌ 付着
260	円彌形 土製品	D 4 【V b】	- - -	- - -	工具ナデ	工具ナデ	黑褐色 (10YR2-2)	明褐色 (10YR3-3)	良好	微細な灰白色。透明光沢粒	Ⅷ
261	圓錐 土製品	F 4 【V b】	(26.4)	- - -	横方向のミガキ	横方向のミガキ	明赤褐色 (5YR5-6)	にぶい・赤 褐色(5YR4-6)	良好	1mm以下の乳白色粒	三万 田式
262	圓錐 土製品	D 4 【V b】	(24.1)	- - -	横方向のミガキ	ナデ	黑褐色 (2.5YR3-2)	オリーブ黒 (SYR2-2)	良好	4mm以下の赤褐色 2mm以下の灰白色 微細な透明光沢粒	三万 田式
263	圓錐 土製品	F 4 【V b】	(30.0)	- - -	横・斜方向のミガキ	横方向のミガ キ	にぶい・暗 褐色(10YR4-3)	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-4)	良好	微細から2mmの灰白色。黒灰色、黑 色光沢。光沢無色。にぶい褐色光沢	三万 田式
264	圓錐 土製品	F 4 【V b】	(20.2)	- - -	ミガキ	ミガキ	灰黃褐色 (10YR4-2)	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-4)	良好	微細な透明光沢粒 2mm以下の灰白色、にぶい褐色光沢	三万 田式
265	圓錐 土製品	E 4 【V b】	- - -	- - -	横方向のミガキ	ミガキ	相 (7.5YR4-3)	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-4)	良好	2mm以下の灰白色、黒灰色、黃 色光沢。にぶい褐色光沢	三万 田式
266	圓錐 土製品	E 5 【V b】	- - -	- - -	横方向のミガキ	横方向のミ ガキ	黑褐色 (7.5YR3-1)	赤褐色 (7.5YR3-1)	良好	2mm以下の白色。灰白色 1mm以下の半透明粒	三万 田式
267	圓錐 土製品	F 4 【V b】	- - -	- - -	横方向のミガキ	横方向のミ ガキ	灰黃褐色 (10YR4-2)	にぶい・暗 褐色(10YR4-2)	良好	4mm以下の灰白色 2mm以下の灰白色 微細な透明光沢粒	三万 田式
268	圓錐 土製品	E 4 【V b】	- - -	- - -	横方向のミガキ	横方向のミ ガキ	相 (7.5YR4-3)	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-4)	良好	2mm以下の灰白色、黃色光沢	三万 田式
269	圓錐 土製品	E 5 【V b】	- - -	- - -	横方向のミガキ	横方向のミ ガキ	黑褐色 (7.5YR3-1)	赤褐色 (SYR4-6)	良好	2mm以下の白色。灰白色光沢	三万 田式
270	圓錐 土製品	D 4 【V b】	- - -	- - -	横方向のミガキ	横方向のミ ガキ	灰黃褐色 (10YR4-2)	黑褐色 (10YR4-2)	良好	3mm以下の灰白色 1mm以下の半透明粒	三万 田式
271	圓錐 土製品	F 4 【V b】	- - -	- - -	横方向のミガキ	横方向のミ ガキ	相 (7.5YR4-3)	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-4)	良好	2mm以下の灰白色、にぶい褐色光沢	三万 田式
272	圓錐 土製品	E 4 【V b】	- - -	- - -	横方向のミガキ	横方向のミ ガキ	灰黃褐色 (10YR4-2)	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-2)	良好	2mm以下の灰白色、黄褐色光沢	三万 田式
273	圓錐 土製品	E 3 【V a】	- - -	- - -	ナデ	ナデ	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-3)	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-4)	良好	3mm以下の細灰色 2mm以下の淡黃褐色光沢 1mm以下の灰白色。透明光沢粒	Ⅷ 白スヌ 付着
274	圓錐 土製品	D 4 【V b】	- - -	- - -	工具ナデ	工具ナデ	黑褐色 (10YR2-2)	明褐色 (10YR3-3)	良好	微細な灰白色。透明光沢粒	Ⅷ
275	圓錐 土製品	F 4 【V b】	(26.4)	- - -	横方向のミガキ	ナデ	黑褐色 (2.5YR3-2)	オリーブ黒 (SYR2-2)	良好	4mm以下の赤褐色 2mm以下の灰白色 微細な透明光沢粒	三万 田式
276	圓錐 土製品	F 4 【V b】	(30.0)	- - -	横・斜方向のミガキ	横方向のミ ガキ	にぶい・暗 褐色(10YR4-3)	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-4)	良好	微細から2mmの灰白色。黒灰色、黑 色光沢。光沢無色。にぶい褐色光沢	三万 田式
277	圓錐 土製品	F 4 【V b】	(20.2)	- - -	ミガキ	ミガキ	灰黃褐色 (10YR4-2)	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-4)	良好	微細な透明光沢粒 2mm以下の灰白色、にぶい褐色光沢	三万 田式
278	圓錐 土製品	E 4 【V b】	- - -	- - -	横方向のミガキ	横方向のミ ガキ	相 (7.5YR4-3)	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-4)	良好	2mm以下の灰白色、黃色光沢	三万 田式
279	圓錐 土製品	E 5 【V b】	- - -	- - -	横方向のミガキ	横方向のミ ガキ	黑褐色 (7.5YR3-1)	赤褐色 (SYR4-6)	良好	2mm以下の白色。灰白色光沢	三万 田式
280	圓錐 土製品	D 4 【V b】	- - -	- - -	横方向のミガキ	横方向のミ ガキ	灰黃褐色 (10YR4-2)	黑褐色 (10YR4-2)	良好	3mm以下の灰白色 1mm以下の半透明粒	三万 田式
281	圓錐 土製品	F 4 【V b】	- - -	- - -	横方向のミガキ	横方向のミ ガキ	相 (7.5YR4-3)	にぶい・暗 褐色(7.5YR5-4)	良好	3mm以下の灰白色 微細な金黄色光沢粒	三万 田式
282	圓錐 土製品	E 4 【V b】	- - -	- - -	横方向のミガキ	横方向のミ ガキ	灰黃褐色 (2.5YR4-3)	にぶい・赤 褐色(2.5YR4-3)	良好	2mm以下の浅黄色。灰白色光沢 1mm以下の透明光沢粒	三万 田式
283	圓錐 土製品	E 4 【V b】	- - -	- - -	斜方向のミガキ	ミガキ	灰黃褐色 (10YR4-2)	にぶい・暗 褐色(10YR5-3)	良好	2mm以下の浅黄色 微細な黑色光沢粒	三万 田式

遺物番号	種類 部位	発出地点 【別名】	法線(cm)●(標準値)	調 整		色 調		構成	出土の特徴	備考	
				外 面	内 面	外 面	内 面				
304	深井 口縁部	F 4 【M1b】	-	-	-	横・斜方向のミガキ	横・斜方向のミガキ	黒闇 (10YR3/1)	黒闇 (10YR3/1)	良好 好	微細から1mm以下の粗粒。黒白色、灰白色、光沢無色透明。にぶい赤褐色。黒色光沢粒
305	注土部 側面	E 3 【M1a】	-	-	-	ナデ	ナデ	相 (7.5YR7/6)	黒闇 (10YR3/1)	良好 好	2mm以下での透明光沢粒 1mm以下での灰白色粒
306	深井 側面	F 4 【M1a】	-	-	-	縦・斜方向のミガキ	ナデ	黒闇 (7.5YR4/3)	にぶい黒闇 (10YR5/3)	良好 好	微細から3.5mmの黒闇色。灰黑色、淡黄色、光沢無色透明粒。雲母
307	深井 側面	E 4 【M1b】	-	-	-	横斜方向のミガキ の工具ナデ	ナデ	明黄闇 (7.5YR5/4)	明黄闇 (5YR5/6)	良好 好	微細から5.5mmの灰白色。黒闇色。明黄闇色。光沢黒闇色。光沢無色透明。にぶい赤褐色粒
308	台付直形 皿と台	E 3 【M1a】	(15.9)	2.8	11.5	横・斜方向のミガキ のミガキ	横・斜方向のミガキ のミガキ	灰闇闇 (10YR4/2)	灰黄闇 (10YR4/2)	良好 好	微細から2.5mmの黒闇色。灰白色。相 色、光沢黒闇色。にぶい黄緑色。光 沢無色透明粒
309	付合直形 皿と台	E 5 【M1b】	-	2.9	-	ナデ	ナデ	灰黄闇 (10YR4/2)	にぶい相 (7.5YR3/4)	良好 好	2mm以下での灰黄褐色。灰白色。相 色、光沢黒闇色。にぶい黄緑色。光 沢無色透明粒
310	深井 側面～ 底面	E 5 【M1b】	(5.8)	-	-	縦方向のミガキ	ナデ	にぶい相 (SYR4/4)	にぶい黒闇 (7.5YR5/4)	良好 好	6mm以下での灰黄褐色粒 2mm以下での灰白色。相色、灰白色粒
311	深井 側面～ 底面	E 4 【M1a】	-	5.8	-	ミガキ	ナデ	にぶい相 (7.5YR5/4)	黒闇 (7.5YR4/3)	良好 好	2mm以下での透明光沢粒 4mm以下での灰白色粒
312	深井 底面	D 3 【M1b】	-	3.9	-	横方向のミガキ底 部はナデ	ナデ	明黄闇 (5YR5/6)	灰闇 (10YR4/2)	良好 好	4mm以下での黒闇色。黒色光沢粒
313	深井 底面	D 5 【M1b】	-	4.0	-	横・斜方向のミガキ 底 横方向のナデ	横方向のミガキ 底 横方向のナデ	明黄闇 (7.5YR5/6)	にぶい黒闇 (7.5YR5/6)	良好 好	2mm以下での透明光沢。黒色光沢粒
314	深井 口縁部	E 4 【M1a】	-	-	-	ミガキ～沈殿文	ミガキ	にぶい相 (7.5YR5/3)	暗闇 (7.5YR4/4)	良好 好	2mm以下での透明光沢粒 微細な透明白沢
315	深井 口縁部	D 4 【M1a】	-	-	-	横方向のミガキ→ 沈殿文	横方向のミガキ →沈殿文	横方向のミガキ (7.5YR4/2)	相 (10YR2/1)	良好 好	2mm以下での淡黄褐色粒
316	深井 口縁部	F 3 【V】	-	-	-	横方向のミガキ	横方向のミガキ	にぶい相 (5YR5/3)	にぶい相 (5YR5/4)	良好 好	2mm以下での赤褐色。赤褐色、透明白 沢粒
317	深井 口縁部	F 3 【V】	-	-	-	ナデ	ナデ	灰闇闇 (10YR5/2)	灰闇闇 (10YR6/2)	良好 好	微細な黑色光沢粒 1mm以下での淡黄色粒
318	深井 口縁部	E 5 【M1a】	-	-	-	ミガキ	ミガキ	灰闇闇 (10YR5/2)	にぶい相 (7.5YR5/4)	良好 好	微細な透明白沢。黑色光沢粒
319	深井 口縁部	F 3 【M1a】	-	-	-	工具による横方向 のナデ	横方向のナデ	相 (2.5YR6.6)	相 (7.5YR6/6)	良好 好	5mm以下でのにぶい赤褐色粒 2mm以下での灰白色。透明白沢粒 1mm以下での赤褐色光沢粒
320	深井 口縁部	D 6 【V】	(19.9)	-	-	ナデ～沈殿文	ナデ	にぶい黄 (2.5Y6/3)	浅黄 (7.5Y7/3)	良好 好	微細から3mmの光沢黒闇色。黒色、 灰白色。にぶい赤褐色。褐色、光沢 無色透明。にぶい赤褐色
321	深井 口縁部～ 側面	3 P 1 【M1a】	-	-	-	ナデ～沈殿文	横方向のナデ	黒闇 (10YR3/2)	にぶい相 (7.5YR5/4)	良好 好	2mm以下での灰白色。後淡黄色。雪母
322	深井 口縁部	F 4 【M1a】	-	-	-	横方向ナデ→削目 突帯文	ナデ	灰闇闇 (10YR4/2)	にぶい黒闇 (10YR6/3)	良好 好	微細から3mmの黒闇色。灰白色。暗赤褐色。光沢無色透明粒
323	深井 口縁部	E 8 【V】	-	-	-	横方向ナデ→削目 突帯文	ナデ	にぶい黄 (10YR6/4)	相 (7.5YR6/6)	良好 好	微細から2.5mmの光沢黒闇色。にぶい 赤褐色。暗赤褐色。云母
324	深井 口縁部	E 3 【M1a】	-	-	-	ナデ	ナデ	明黄闇 (2.5YR4/2)	にぶい黒闇 (10YR5/4)	良好 好	微細から3mmの光沢黒闇色。光沢無 色透明。褐色。灰白色粒
325	深井 口縁部	D 4 【M1a】	-	-	-	ナデ	横方向のミガキ	灰黄 (2.5YR4/1)	浅黄闇 (2.5YR7/4)	良好 好	1mm以下での乳白色粒。透明白沢
326	深井 口縁部	E 5 【V】	-	-	-	ナデ	ナデ	ナデ	にぶい黒闇 (10YR6/4)	良好 好	2mm以下での黒色光沢粒。透明白沢
327	深井 口縁部	D 6 【M1a】	-	-	-	縦方向の工具ナデ	ナデ	にぶい相 (5YR5/4)	にぶい相 (7.5YR6/4)	良好 好	2mm以下での淡黃褐色。灰白色粒
328	深井 口縁部	E 7 【M1a】	-	-	-	横方向の指ナデ	横ナデ	黄闇 (2.5YR4/1)	灰	良好 好	4mm以下での乳白色粒 1mm以下での透明白沢粒
329	深井 口縁部	F 6 【V】	-	-	-	格子状タタキ→格 子状文様	タタキ	灰白 (5YR8/1)	灰白 (5YR8/2)	良好 好	1mm以下での乳白色粒
330	高杯 杯部	E 3 【V】	-	-	-	ナデ	ナデ	相 (7.5YR6/4)	相 (7.5YR6/6)	良好 好	1mm以下での灰白色粒
331	深井 口縁部～ 側面	匂合縫 一括	-	-	-	回転ナデ	回転横ナデ	相 (7.5YR7/4)	明黄闇 (10YR7/6)	良好 好	1~2mm以下の淡黄褐色。乳白色粒 1mm以下での淡黃褐色粒
332	深井 口縁部	F 5 【V】	(15.8)	-	-	工具ナデ	横方向ナデ→ 上方向ナデ	灰闇闇 (10YR2/1)	灰闇闇 (10YR4/2)	良好 好	灰白色。浅黄褐色
333	深井 口縁部～ 側面	F 6 【M1a】	-	-	-	横ナデ	横ナデ→削 いナデ	明黄闇 (7.5YR5/6)	灰黄闇 (10YR6/2)	良好 好	1mm以下での透明白沢。褐灰色、黑色 光沢粒
334	杯 底面	F 6 【V】	(7.1)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	相 (7.5YR7/6)	相 (7.5YR7/6)	良好 好	2mm以下での灰白色粒 1mm以下での赤褐色、透明白沢
335	杯 底面	E 8 【M1a】	(7.6)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	相 (7.5YR7/6)	相 (7.5YR7/6)	良好 好	3mm以下での乳白色粒
336	杯 底面	E 6 【V】	(6.2)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	にぶい相 (10YR6/4)	にぶい相 (10YR7/4)	良好 好	微細な灰白色粒
337	杯 底面～ 側面	排水	(5.2)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	浅黄闇 (7.5YR6/6)	浅黄闇 (7.5YR6/6)	良好 好	1mm以下での明赤褐色。灰白色粒

第5表 【遺物観察表④(石器)】

遺物番号	器種	石材	出土地点		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g重)	備考
			遺構・Gr	層位					
28	石鎚	チャート	S C 2	Vl b	2.45	1.21	0.29	0.8	
29	敲石・磨石	砂岩	S C 2	Vl b	9.30	6.00	4.20	339.0	周縁全面に敲打痕有り 折損後も使用
30	スクレイバー	安山岩	S C 2	Vl b	7.62	11.20	1.96	168.8	
54	磨製石斧	ホルンフェルス	S C 5	Vl b	14.00	6.50	4.10	585.8	
55	磨製石斧	ホルンフェルス	S C 5	Vl b	11.03	6.20	3.15	285.1	
59	磨製石斧	ホルンフェルス	S C 6	Vl b	19.33	6.61	4.85	889.1	砂岩源
60	磨製石斧	ホルンフェルス	S C 6	Vl b	13.35	5.60	2.70	301.7	
261	石鎚	黒曜石(桑の木津留産)	D 3	Vl b	1.60	1.17	0.27	0.3	基部の片方が欠損
262	石鎚	黒曜石(桑の木津留産)	D 3	Vl b	1.84	1.09	0.32	0.6	
263	石鎚	チャート	F 3	Vl b	1.97	1.26	0.34	0.9	
264	石鎚	チャート	C 4	Vl b	1.03	1.60	0.39	0.6	
265	石鎚	流紋岩	D 4	Vl b	2.70	1.61	0.43	1.6	
266	石鎚	チャート	C 4	Vl b	1.91	1.60	0.30	1.0	
267	石鎚	黒曜石	E 3	Vl b	1.63	1.22	0.26	0.6	
268	石鎚	チャート	F 3	V	2.50	1.44	0.32	0.8	基部の片方が欠損
269	石鎚	チャート	E 3	Vl b	2.39	1.44	0.51	1.4	基部の片方が欠損
270	石鎚	チャート	E 4	Vl b	2.30	1.68	0.42	1.1	
271	石鎚	チャート(白色)	D 3	Vl b	2.64	1.35	0.44	1.2	
272	磨製石鎚	チャート	E 7	Vl b	2.07	1.37	0.19	0.6	
273	石鎚未完成	チャート	D 6	Vl b	2.41	1.72	0.66	2.7	石鎚の未製品
274	石鎚未完成	チャート	F 3	V	2.64	1.63	0.88	3.8	石鎚の未製品
275	ドリル	チャート	F 4	V	2.69	1.36	0.72	1.7	
276	ドリル	珪質頁岩	F 4	V	3.50	0.84	0.40	1.1	
277	石匙	黒曜石	包含層一括		3.78	1.63	0.55	2.8	
278	石棒	砂岩	D 3	Vl b	5.23	3.55	2.50	77.3	
279	石錘	頁岩	E 4	Vl b	4.50	4.50	0.80	23.2	短軸方向に網掛け用の切込有り
280	石錘	頁岩	E 4	Vl b	6.10	4.40	1.30	52.5	短軸方向に網掛け用の切込有り
281	石錘	頁岩	包含層一括		5.45	4.49	0.80	21.6	短軸方向に網掛け用の切込有り
282	石錘	赤色頁岩	D 4	Vl b	2.31	4.58	0.70	8.8	
283	磨製石鎚	頁岩	F 3	Vl b	4.58	1.83	0.65	8.2	
284	磨製石斧	ホルンフェルス	E 3	Vl b	10.30	5.10	2.70	109.0	
285	砥石	砂岩	D 4	Vl b	9.90	7.30	3.70	308.4	
286	磨石	安山岩	E 4	Vl b	8.98	6.80	4.59	356.7	風化有り
287	敲石・磨石	砂岩	D 4	Vl b	13.40	9.55	5.00	1105.6	周縁全面に敲打痕有り 中央部に敲打痕有り
288	磨石	安山岩	E 5	Vl b	9.75	5.95	6.00	611.8	風化有り
289	敲石・磨石	安山岩	D 5	Vl b	10.09	6.98	6.00	564.4	風化有り 周縁全面に敲打痕有り 折損後は殆ど使用せず
290	敲石・磨石	砂岩	D 4	Vl b	9.83	5.92	4.25	378.0	周縁全面に敲打痕有り
291	敲石・磨石	砂岩	D 4	Vl b	12.62	9.57	5.02	961.4	周縁全面に敲打痕有り
292	台石	安山岩	D 5	Vl b	15.98	10.68	3.58	691.5	
293	敲石	安山岩	E 5	Vl b	7.45	7.35	6.90	584.6	周縁全面に敲打痕有り

# 第IV章 自然科学分析

## 第1節 放射性炭素年代測定（株式会社 古環境研究所）

### 1 はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

### 2 試料と方法

次表に、試料の採取箇所、種類、前処理・調整法および測定法を示す。AMSとは、加速器質量分析法の事である。

第6表 試料の採取箇所、種類、前処理・調整法および測定法

試料No	採取箇所	種類	前処理・調整法	測定法
No20	S C 1、貯藏穴北側下層部	炭化材	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No21(4)	S C 2、貯藏穴南側下層部	炭化種実(コナラ属)	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No22	S C 4、貯藏穴南側上層部	炭化材	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No23(10)	S C 6、貯藏穴南側下層部	炭化種実(ササゲ属)	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No24(12)	S C 7、貯藏穴南側下層部	炭化種実(コナラ属)	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

### 3 測定結果

加速器質量分析法(AMS)によって得られた $^{14}\text{C}$ 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代および曆年代(較正年代)を算出した。第7表にこれらの結果を示す。

#### (1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正する。

#### (2) 放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在(AD1950年基点)から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いた。統計誤差( $\pm$ )は $1\sigma$ (68.2%確率)である。 $^{14}\text{C}$ 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、曆年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない曆年較正用年代値も併記した。

#### (3) 曆年代(Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動および $^{14}\text{C}$ の半減期の違いを較正することで、放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。曆年代較正には、年

代既知の樹木年輪の詳細な<sup>14</sup>C測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と<sup>14</sup>C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 09、較正プログラムはOxCal 3.1である。暦年代（較正年代）は、<sup>14</sup>C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1σ（68.2%確率）と2σ（95.4%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。（）内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

#### 4 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、No.20の炭化材では $3565 \pm 20$ 年BP（2σの暦年代でBC2010～1990, 1980～1870, 1850～1820, 1800～1780年）、No.21の炭化種実（コナラ属）では $3585 \pm 20$ 年BP（BC2020～1990, 1980～1880年）、No.22の炭化材では $3660 \pm 20$ 年BP（BC2140～1950年）、No.23の炭化種実（ササゲ属）では $3595 \pm 20$ 年BP（BC2030～1890, 1950～1860年）、No.24の炭化種実（コナラ属）では $3540 \pm 20$ 年BP（BC1850～1770年）の年代値が得られた。

第7表 放射性炭素年代測定

試料 No	測定番号 PED-	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用 年代 (年)	<sup>14</sup> C年代 (年BP)	暦年代（較正年代）: cal -	
					1σ (68.2%確率)	2σ (95.4%確率)
20	19828	-25.12 ± 0.14	3564 ± 22	3565 ± 20	BC1940-1885 (68.2%)	BC2010-1990 ( 1.4%) BC1980-1870 (89.2%) BC1850-1820 ( 3.3%) BC1800-1780 ( 1.4%)
21	19829	-24.02 ± 0.15	3587 ± 22	3585 ± 20	BC1965-1895 (68.2%)	BC2020-1990 (10.6%) BC1980-1880 (84.8%)
22	19830	-24.70 ± 0.14	3662 ± 22	3660 ± 20	BC2130-2090 (28.0%) BC2050-2010 (25.8%) BC2000-1970 (14.4%)	BC2140-1950 (95.4%)
23	19831	-26.18 ± 0.18	3595 ± 22	3595 ± 20	BC2010-2000 ( 6.3%) BC1980-1915 (61.9%)	BC2030-1890 (95.4%)
24	19832	-22.89 ± 0.14	3538 ± 22	3540 ± 20	BC1930-1870 (44.4%) BC1850-1820 (14.4%) BC1800-1780 ( 9.4%)	BC1950-1860 (55.8%) BC1850-1770 (39.6%)

#### 引用文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy. The OxCal Program. Radiocarbon, 37(2), p.425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, p.355-363.
- Paula J Reimer et al. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代, p.3-20.

## 第2節 樹種同定（古環境研究所）

### 1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

### 2 試料

試料は、土坑（SC 1、SC 2、SC 3、SC 4、SC 5、SC 6、SC 7）から採取された炭化材 7 点である。試料の詳細を表 2 に示す。

### 3 方法

以下の手順で樹種同定を行った。①試料を洗浄して付着した異物を除去、②試料を割折して木材の基本的三断面（横断面：木口、放射断面：柾目、接線断面：板目）の切片を作成、③落射顕微鏡で観察し（40 ~ 1000 倍）、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

### 4 所見

貯蔵穴（SC 1、SC 2、SC 3、SC 4、SC 5、SC 6、SC 7）から採取された炭化材 5 点について樹種同定を行った。その結果、コナラ属アカガシ亜属 2、ヤブツバキ 2、カヤ 1、散孔材 2 が同定された。

コナラ属アカガシ亜属は、一般にカシと総称されるが、イチイガシ、アラカシなど多くの種があり、温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木である。ヤブツバキは海岸から河川の沿岸に多く分布する常緑高木で、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の構成要素である。カヤは、主に温帯下部の暖温帯に分布する常緑針葉樹であり、谷沿いなどやや湿潤なところに生育する。いずれの樹種も当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

第8表 樹種同定結果

分析番号	遺構番号	出土位置	結果（学名／和名）	備考
13	S C 1	貯蔵穴南側上層部	diffuse-porous wood	散孔材
14	S C 2	貯蔵穴北側下層部	Torreya nucifera Sieb. et Zucc.	カヤ
15	S C 3	貯蔵穴北側下層部	Camellia japonica Linn.	ヤブツバキ
16	S C 4	貯蔵穴北側下層部	Camellia japonica Linn.	ヤブツバキ
17	S C 5	貯蔵穴北側下層部	diffuse-porous wood	散孔材
18	S C 6	貯蔵穴南側下層部	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属
19	S C 7	貯蔵穴北側下層部	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属

### 引用文献

島地謙・佐伯浩・原田浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造。文永堂出版、290p.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣、296p.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別1号。植生史研究会、242p.

### 第3節 種実分析（古環境研究所）

#### 1 はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内などに残存している場合がある。堆積物や遺構埋土などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や植物利用の実態を明らかにすることができる。

#### 2 試料

分析試料は、土坑（SC 1、SC 2、SC 3、SC 4、SC 5、SC 6、SC 7）から採取された選別済みの炭化種実類である。試料の詳細を分析結果表に示す。なお、ほとんどの試料が破片であり、炭化材片も認められた。

#### 3 分析方法

種実類について肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

#### 4 結果

##### （1）分類群

種実同定の結果、樹木5、草本2の計7分類群が同定された。第9表に同定結果を示し、主要な分類群を写真に示す。

##### （2）種実分析結果

SC1の分析番号1と分析番号2は、いずれも炭化材片であり、種実は認められなかった。SC2の分析番号3ではコナラ属3、トチノキ（？）2、ササゲ属1、ヒシ（？）1、分析番号4ではコナラ属7が同定された。SC3の分析番号5では不明2、分析番号6ではコナラ属1、不明1が同定された。SC4の分析番号7は、いずれも炭化材片であり、種実は認められなかった。SC5の分析番号8ではコナラ属1、サンショウ属1、不明2が同定された。SC6の分析番号9ではコナラ属1、カラスザンショウ1、ミズキ1、分析番号10ではコナラ属1、ササゲ属2、分析番号11ではコナラ属4が同定された。SC7の分析番号12ではコナラ属9が同定された。

第9表 炭化種実同定結果

分析番号	遺構番号	出土位置	分類群		部位	個数	備考
			学名	和名			
1	SC1	貯蔵穴北側下層部					炭化材片2
2		貯蔵穴南側下層部					炭化材片2
3	SC2	貯蔵穴北側下層部	<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉（破片）	3	炭化材片1
			<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ？	種子（破片）	2	
			<i>Vigna</i>	ササゲ属	子葉	1	
			<i>Trapa japonica</i>	ヒシ？	果実（破片）	1	
4		貯蔵穴南側下層部	<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉（半形）	2	炭化材片1
					(破片)	5	

分析番号	遺構番号	出土位置	分類群		部位	個数	備考
			学名	和名			
5	SC3	貯蔵穴北側下層部	Unknown	不明	(破片)	2	
6		貯蔵穴南側下層部	<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉(破片)	1	炭化材片1
			Unknown	不明	(破片)	1	
7	SC4	貯蔵穴北側下層部					炭化材片1
8	SC5	貯蔵穴北側下層部	<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉(破片)	1	
			<i>Zanthoxylum ailanthoides</i>	サンショウ属	種子(破片)	1	
			Unknown	不明	(破片)	2	
9		貯蔵穴北側下層部	<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉(破片)	1	炭化材片1
			<i>Zanthoxylum ailanthoides</i>	カラスザンショウ	種子(破片)	1	
			<i>Swida controversa</i>	ミズキ	核(破片)	1	
10	SC6	貯蔵穴南側下層部	<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉(破片)	1	炭化材片1
			<i>Vigna</i>	ササゲ属	子葉 (半形)	1	
11		貯蔵穴南側下層部	<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉(破片)	4	
12	SC7	貯蔵穴南側下層部	<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉(破片)	9	炭化材片1

## 5 考察

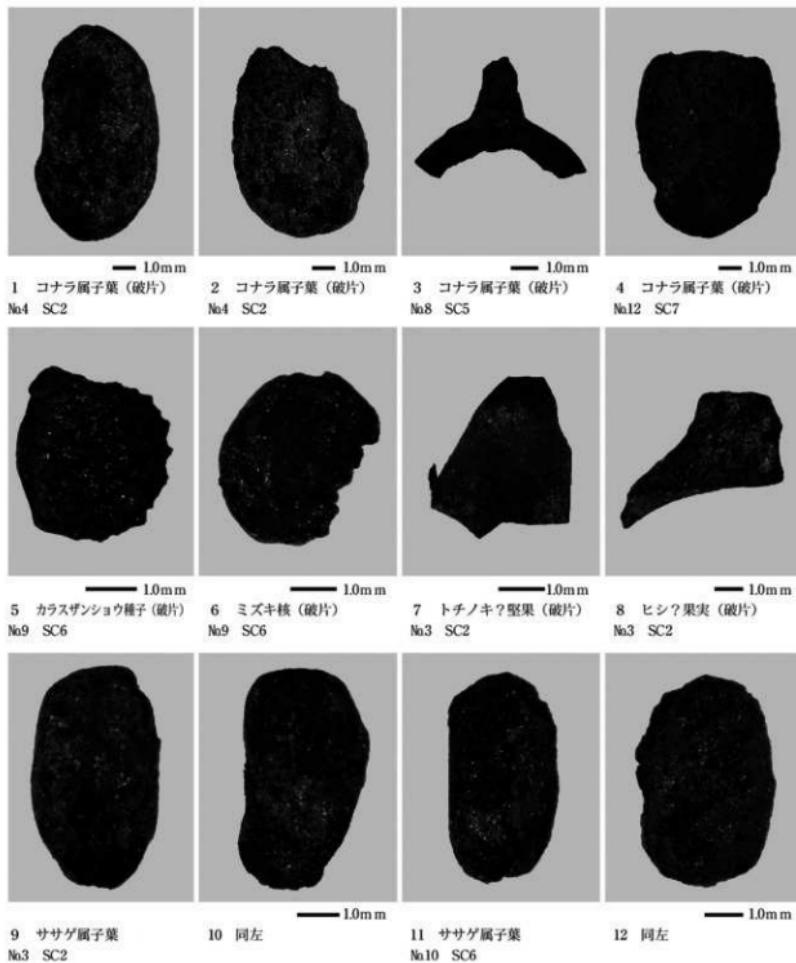
土坑(SC 1、SC 2、SC 3、SC 4、SC 5、SC 6、SC 7)から採取された選別済みの炭化種類について種実同定を行った。その結果、コナラ属27、ササゲ属3、トチノキ(?)2、ヒシ(?)1、カラスザンショウ1、サンショウ属1、ミズキ1が同定された。

このうち、コナラ属、トチノキ(?)、ヒシ(?)は食用になる有用植物である。ササゲ属は、野生か栽培かは不明であるが、食用にもなる有用植物である。カラスザンショウ、サンショウ属は人為干渉地周辺に生育する樹木で、ミズキもその傾向がある。

## 引用文献

- 笠原安夫(1985)日本雑草図説、養賢堂、494p.
- 笠原安夫(1988)作物および田畠雑草種類、弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣出版、p.131-139.
- 吉崎昌一(1992)古代雑穀の検出、月刊考古学ジャーナルNo 355、ニューサイエンス社、p.2-14.
- 南木睦彦(1993)葉・果実・種子、日本第四紀学会編 第四紀試料分析法、東京大学出版会、p.276-283.
- 渡辺誠(1975)縄文時代の植物食、雄山閣、187p.

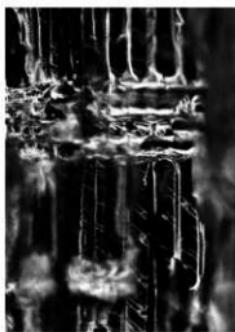
第72図 炭化種実



第73図 炭化材



横断面 ━━━━ : 0.2mm  
1. 分析番号14 カヤ



放射断面 ━━━━ : 0.1mm



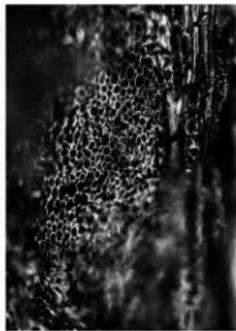
接線断面 ━━━━ : 0.1mm



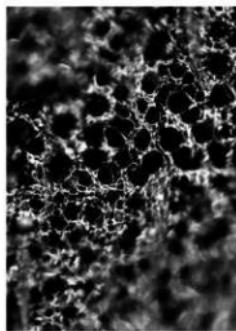
横断面 ━━━━ : 0.4mm  
2. 分析番号19 コナラ属アカガシ亜属



放射断面 ━━━━ : 0.2mm



接線断面 ━━━━ : 0.2mm



横断面 ━━━━ : 0.2mm  
3. 分析番号16 ヤブツバキ



放射断面 ━━━━ : 0.1mm



接線断面 ━━━━ : 0.2mm

## 第4節 種実遺体の同定（パリノサーヴェイ株式会社）

はじめに

本報告では、貯蔵穴から出土した種実遺体を対象として、植物利用を検討するための種実同定を実施する。

### 1 試料

試料は、SC1の貯蔵穴Vlb層(分析番号12)、各グリッドのVlb層(分析番号3～8)より出土した種実遺体8試料37個である(表1)。種実遺体は乾燥した状態で、表面に泥が付着している。

### 2 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。種実遺体の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等を参考に実施し、結果を一覧表に示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフンで結んで表示する。分析後は、種実遺体を容器に入れて保管する。

### 3 結果

結果を表1に示す。木本3分類群(広葉樹で常緑高木のイチイガシ、常緑または落葉高木のコナラ属、コナラ属-常緑高木のシイ属)23個、草本のアズキ類13個、計36個の種実が同定された。種実以外では、分析番号4から炭化材が1個確認された。

種実遺体は全て炭化しており、保存状態は不良である。全試料から、常緑高木のイチイガシを含むコナラ属の子葉が確認された。また、C3 グリッドのVlb層(分析番号4)から、栽培種の可能性を含むアズキ類の種子が13個確認された。各分類群の写真を図版第74図に示し、形態的特徴等を以下に記す。

### 4 考察

縄文時代とされるSC 1の貯蔵穴Vlb層と、各グリッドのVlb層より出土した炭化種実には、イチイガシを含むコナラ属の子葉が確認された。また、C3 グリッドのVlb層からは、アズキ類の種子が確認された。

イチイガシは、湿潤、肥沃で深い土壌をもつ内陸平坦地と後傾斜に極相林として発達する種で、現在は、紀伊半島、四国、九州の山麓地に広く分布する。また、イチイガシの堅果はコナラ属の中でも渋みが少なく、アク抜きせずに生食可能で収量も多いため、遺跡出土例も多い(渡辺,1975;岡本,1979など)。これらの炭化子葉は、当時の広原第1遺跡周辺域の照葉樹林から採取され、遺構内に持ち込まれた植物質食料であることと、何らかの理由により火を受け炭化したことが推定される。

アズキ類は、近年の土器圧痕調査や種実遺体の研究で、縄文時代における栽培の可能性が検討されている(中山,2010;西本ほか,2012など)。西本ほか(2012)は、京都府上里遺跡より出土した縄文時代晩期の炭化種子の大きさ等を検討し、栽培されたものであることを指摘している。今回の広原第1遺跡出土種子の大きさを比較してみると、現生標本で野生のヤツツルアズキよりも大きく、栽培アズキよりも小さく、上里遺跡出土種子の大きさに近いことが指摘される(図1)。広原第1遺跡出土種子が上里遺跡よりも若干大きく、ばらつきが小さい傾向もみられる。したがって、広原第1遺跡より出土したアズキ類種子は、上里遺跡と同様に当栽培されていた可能性が指摘され、今後の資料蓄積が期待される。

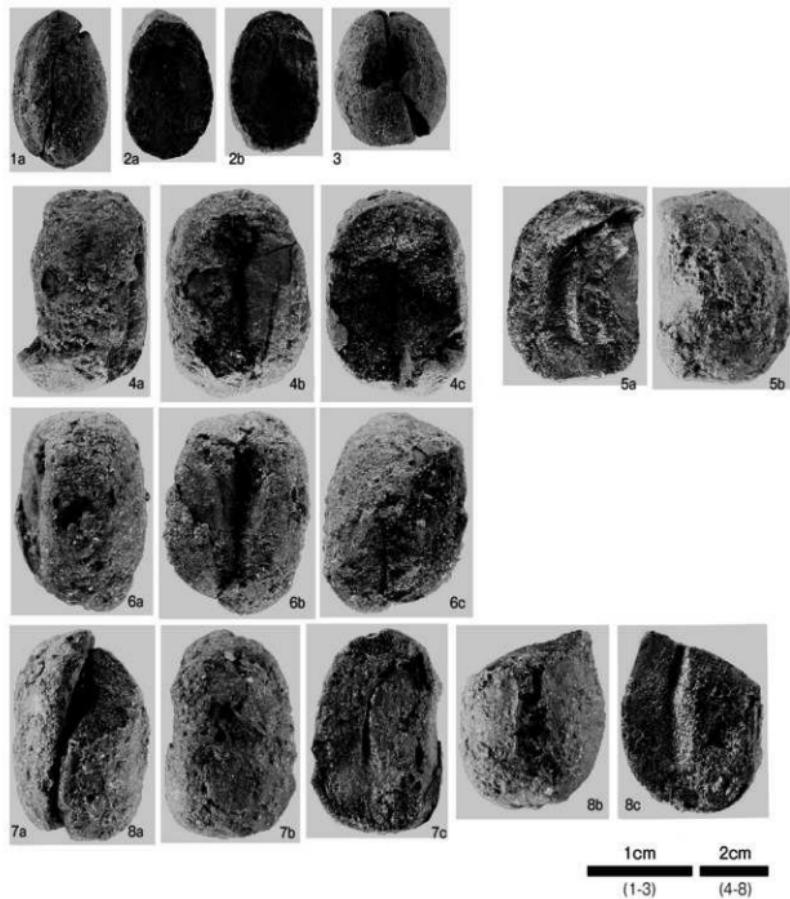
第10表 種実同定結果

分析番号	グリッド	遺構	層位	分類群	部位	状態	個数	備考
1	S C 1	Vlb層上部	コナラ属・シイ属?	子葉?	炭化	破片	4	計1/2個分
2	S C 1	Vlb層下部	イチイガシ	子葉	炭化	破片	1	子葉合わせ目に沿って割れた1/2個未満,頂部尖る,残存長9.5mm,残存幅6.0mm,残存厚3.5mm
3	C3	Vlb層	コナラ属・シイ属	子葉	炭化	破片	3	接合し1/2個体,残存長10.0mm,残存幅8.8mm,残存厚4.7mm
4	C3	Vlb層	イチイガシ	子葉	炭化	破片	1	子葉合わせ目に沿って割れた1/2個未満,残存長9.5mm,幅8.2mm,残存厚4.5mm
			コナラ属	子葉	炭化	破片	1	1/4個未満,残存径7.3mm
			コナラ属・シイ属	子葉	炭化	破片	1	1/4個未満,残存径5.4mm
			アズキ類	種子	炭化	完形	1	勝欠孔,長さ5.6mm,残存幅3.8mm,厚さ4.2mm
			アズキ類	種子	炭化	完形	1	勝欠孔,長さ5.8mm,残存幅3.3mm,厚さ4.3mm
			アズキ類	種子	炭化	破片	1	初生葉残存,長さ5.6mm,幅4.0mm,半分厚2.4mm
			アズキ類	種子	炭化	破片	2	接合し1個体,長さ6.1mm,幅4.2mm,厚さ4.2mm,勝の一部残存
			アズキ類	種子	炭化	破片	8	初生葉欠損
			炭化材	—	炭化	破片	1	径4.5mm
5	C4イ	Vlb層	イチイガシ	子葉	炭化	破片	2	接合し1個体,長さ14.9mm,径8.8mm
			イチイガシ	子葉	炭化	破片	2	接合し1個体,長さ12.6mm,径9.5mm
			コナラ属	子葉	炭化	破片	1	1/2個未満,長さ15.0mm,残存幅10.2mm,半分の厚さ5.7mm
			コナラ属・シイ属	子葉	炭化	破片	2	計1/2個未満
6	D3	Vlb層	イチイガシ	子葉	炭化	破片	1	子葉合わせ目に沿って割れた1/2個未満,残存長9.9mm,残存幅7.9mm,残存厚3.7mm
			コナラ属?	子葉?	炭化	破片	1	1/4個未満,残存径9.0mm
7	D4	Vlb層	コナラ属	子葉	炭化	破片	2	接合し1/2個体,長さ16.1mm,幅10.6mm,残存厚5.2mm
8	E3	Vlb層	イチイガシ	子葉	炭化	破片	1	子葉合わせ目に沿って割れた1/2個未満,残存長11.2mm,残存幅8.6mm,残存厚4.7mm

## 引用文献

- 石川 茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 中山 誠二, 2010, 繩文時代のアズキ亜属に関する基礎研究, 東海史学, 第44号, 83-103.
- 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志, 2000, 日本植物種子図鑑, 東北大学出版会, 642p.
- 西本 豊弘・住田 雅和・竜子 正彦・高橋 潔・近藤 奈央・吉崎 伸, 2012, 繩文時代のアズキについて—京都市上里遺跡出土のアズキ類の検討一, 動物考古学, 第29号, 45-53.
- 小畠 弘巳, 2008, マメ科種子同定法、「極東先史古代の雑穀3」, 日本学術振興会平成16~19年度科学研究費補助金(基盤B-2)(課題番号16320110)「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」研究成果報告書, 小畠弘巳編, 熊本大学埋蔵文化財調査室, 225-252.
- 岡本 素治, 1979, 遺跡から出土するイチイガシ, 大阪市立自然史博物館業績, 第230号, 31-39.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹木の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 渡辺 誠, 1975, 繩文時代の植物食, 雄山閣出版, 187p.
- 吉崎 昌一, 1992, 古代雑穀の検出, 月刊考古学ジャーナル, No. 355, 2-14.

第74図 種実遺体



- |                            |                            |
|----------------------------|----------------------------|
| 1. イチイガシ 子葉 (5 : C4イ Vlb層) | 2. イチイガシ 子葉 (5 : C4イ Vlb層) |
| 3. イチイガシ 子葉 (5 : C4イ Vlb層) | 4. アズキ類 種子 (4 : C3 Vlb層)   |
| 5. アズキ類 種子 (4 : C3 Vlb層)   | 6. アズキ類 種子 (4 : C3 Vlb層)   |
| 7. アズキ類 種子 (4 : C3 Vlb層)   | 7. アズキ類 種子 (4 : C3 Vlb層)   |

# 付論 圧痕レプリカ法による広原第1遺跡出土土器の圧痕とその意義

小畠 弘己（熊本大学文学部）

## I. 遺跡の調査と概要

遺跡名：広原（ひろわら）第1遺跡

所在地：宮崎県西諸県郡高原町大字広原字広原（高原高校敷地内）

調査期間：平成23年（2011年）5月30日～9月16日

調査主任：泊 俊一郎

時期：縄文時代前期・後期・晚期、弥生時代、古墳時代、古代

立地：丘陵地上（標高約210m）

## II. 対象資料および調査法

### 1. 調査対象

圧痕調査対象とした資料は、本遺跡から出土した縄文時代後期～古墳時代の土器であり、調査担当者によって圧痕土器として選別されていたもの以外に、報告者が観察して検出した縄文時代後期中葉～晚期段階の土器を含んでいる。調査は平成24年10月25日に実施した。

### 2. レプリカ法の作業手順

本遺跡で行った圧痕調査および調査後の作業手順は、以下のとおりである。

- ① 肉眼および実体顕微鏡により土器圧痕部を観察し、植物・昆虫・貝等の圧痕の可能性があるものを抽出する。
- ② 圧痕部を水で洗浄し、土器全体写真および実体顕微鏡による圧痕部の拡大写真を撮影する。
- ③ 離型剤（パラロイドB-70・5%アセトン溶液）を圧痕部に塗布し、シリコーンゴム：ブルーミックス（アグサジャパン株式会社製）を圧痕部に充填する。
- ④ やや硬化したブルーミックスをマウント（走査型電子顕微鏡用ピンタイプ試料台使用）に盛り、圧痕部と接合して硬化させる。
- ⑤ 硬化後、レプリカを取り外し、圧痕部の離型剤をアセトンで洗浄する。
- ⑥ 作成したレプリカを走査型電子顕微鏡（日本電子製JCM-5700型）で観察・撮影し、同定する。

### III. 調査結果

観察した土器の数は、圧痕候補資料がコンテナ1箱（90点）であり、報告者が調査したのは、報告書掲載予定を含む縄文土器765点、弥生～古代の土器37点である。うちレプリカを作成したのは9点であり、そのうち植物や昆虫の可能性があるものは4点であった。同定結果は表1のとおりである。なお、本遺跡の遺跡記号は遺跡のアルファベットをとって「HRW」とした。なお、縄文土器のうち後期中葉の土器は716点、後期後葉の土器は49点観察した。

HRW0001は縄文時代後期中葉の市来式の深鉢形土器の口縁部片の内面で検出した甲虫の圧痕である。全長：3.50mmほどの側位の甲虫の圧痕で、長い口吻と不正形な点刻で全体が覆われており、コクゾウムシ属の甲虫と思われる。脚部は欠損しているが、口吻まで残存しており、残存状況はよい。口吻長：0.74mm、胸部長：0.98mm、胸部幅：1.08mm、上翅長：1.43mm、上翅幅：1.14mmを測る。コクゾウムシ属甲虫の中でもコクゾウムシは、長い口吻とその基部から延びる膝状の触角が特徴で、前胸背の点

刻はほぼ円状、翅鞘には強く点刻された条溝があり、列間部は条溝よりも幅が狭い。体長2.5～3.5mm。コクゾウムシ属の中でも、本例形態的に類似するものは、コクゾウムシ *Sitophilus zeamais* Motschulsky であり、これまで各地の縄文時代の遺跡から発見されているものによく似ている。コクゾウムシとココクゾウムシ *Sitophilus oryzae* L.の区別は難しいが、一般に大きさおよび小楯板で区別されている。本例の小楯板の比率は幅が狭く、むしろコクゾウムシのそれに近い。ただし、体長の大きさや前胸背板の形状（前方に向かって狭まる）の特徴はコクゾウムシに近いものである。

HRW0003は市来式の深鉢形土器の底部外面（底面）で検出した長軸長：6.14mm、短軸長：5.03mm の橈円形をしたものである。半分のみ残存しているが、側面観は偏平な橈円形を半裁したような形状である。ダイズ属 *Glycine* sp.種子である可能性があるが、ヘソなどの特徴的な部位を欠いて決定的ではない。コナラ属 *Quercus* sp.種子子葉もその候補として挙げられるが、シンメトリーな橈円形という平面形や皺のない表面形状からダイズ属種子の方が可能性が高い。

HRW0005は縄文時代後期後葉の三万田式土器の鉢形土器の口縁部内面で検出したコクゾウムシ属甲虫と思われる圧痕である。HRW0001ときわめて似ており、埋没状況も同じく側位である。ただし、表面が粗く、口吻の一部と脚の全部を欠いている。長い口吻、丸くおさまる上翅端部、そこから延びる先端が尖り、まるく内傾した尾部、わずかに観察できる胸部・上翅上の点刻などの特徴からみて、コクゾウムシ属甲虫であることは間違いない。全長：3.11mm、胸部長：0.85mm、上翅長：1.76mm（推定）を測る。

HRW0009は弥生時代中期の斐形土器の胴部外面で検出したイネ穎果の圧痕である。長軸長：0.76mm、短軸長：2.74mmを測る。護穎は剥落して観察できないが、穎表面には規則正しく並ぶ顆粒状突起が認められ、ギザギザに折り取られたような小穗軸が観察できる。イネ *Oryza sativa* L.と考えられる。

#### IV. 考 察

今回の圧痕調査では、調査者による整理段階で抽出されていた土器片の中から弥生時代中期のイネ圧痕を検出することができた。また、縄文時代後期中葉と後葉の土器からそれぞれ1点ずつのコクゾウムシ属甲虫を発見したこと大きな成果であろう。

このコクゾウムシ属甲虫は2012年8月末段階で、北海道を除く全国から105例が検出されており（小畑2012a）、その後の筆者らの調査でも増加傾向にある。宮崎県内では、内野々遺跡から縄文時代後期中葉の圧痕例が報告されている（宮崎県埋蔵文化財センター 2011）。これ以外にも、未発表ではあるが、圧痕例を宮崎県内の縄文時代の集落遺跡から多数検出している。コクゾウムシ属甲虫はその種同定に関する問題はまだ残されているものの、これらの甲虫は食害した対象としてドングリやクリの実が想定され、集落の大規模化と乾燥性デンブン質植物性食料の貯蔵施設の拡充とともに害虫化した昆蟲である可能性が高まってきた（小畑2012a）。本遺跡においては、当該期のプラスコピットの貯蔵施設が検出され、炭化種実としてコナラ属種子やアズキ型種子が検出されている。近年の三内丸山遺跡における筆者らの圧痕調査においても、クリ果実以外にアズキ型種子も一定量存在すること、コクゾウムシ属甲虫が多数存在していたことなどが明らかになってきた（小畑2012b）。加害痕跡をもつ資料がないため、状況証拠ではあるが、アズキやダイズなどのマメ類も加害対象であった可能性がある。宮崎県内では、内野々遺跡や野添遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2004）など、後期中葉段階からアズキやダイズなどのマメ類の炭化種子や圧痕が多数出土しており、定住的な集落においてはこれらが栽培・貯蔵されていたこと

はほぼ間違いないものと思われる。コクゾウムシ属甲虫の存在は、堅果類のみでなく、これらマメ類などの栽培植物との関わりについても今後注視していかねばならない。

調査の機会を与えてくださった、宮崎県埋蔵文化財センターの泊 俊一郎氏および吉本正典氏に感謝の意を表したい。また、本報告で使用したSEM画像および土器写真図版については、鹿児島大学大学院真道 彩氏の協力があった。感謝申し上げる。

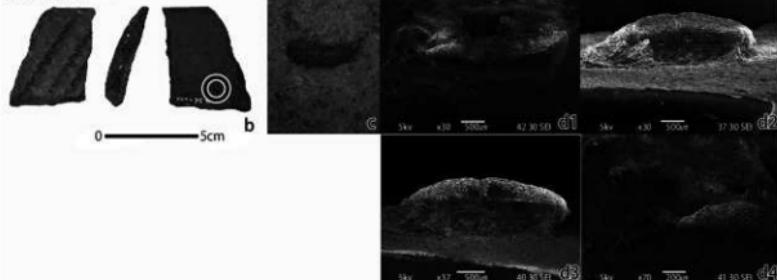
本研究には、筆者の一人小畠が研究代表者を努めている日本学術振興会平成24年度科学研究費補助金基盤A「先端技術を用いた東アジアにおける農耕伝播と受容過程の学際的研究」(研究課題番号24242032)の一部を使用した。

第11表 広原第1遺跡出土土器と圧痕の属性①

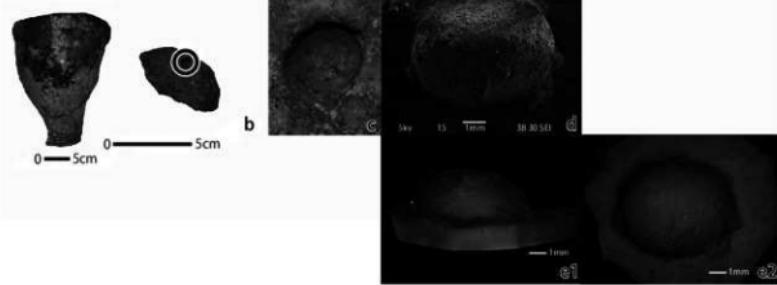
No.	整理番号	出土地点 【出土層位】	時期 (型式)	器形	部位／検出面	圧痕の種類	報告書番号
1	HRW 0001	S C 6 【VI b】	縄文後期中葉 (市来式)	深鉢	口縁部／内面	コクゾウムシ属甲虫	57と 同一個体
2	HRW 0003	D 6 【VI b】	縄文後期中葉 (市来式)	深鉢	底部／外面 (底面)	ダイズ属種子もしくは コナラ属種子子葉	154

第75図 広原第1遺跡土器圧痕・レプリカSEM画像①

1.HRW0001



2.HRW0003



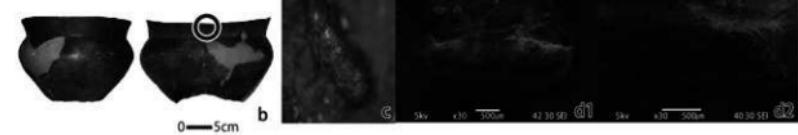
b:遺物写真, c:圧痕実体顕微鏡写真  
d:レプリカSEM画像, e:レプリカ3DMS画像

第12表 広原第1遺跡出土土器と圧痕の属性②

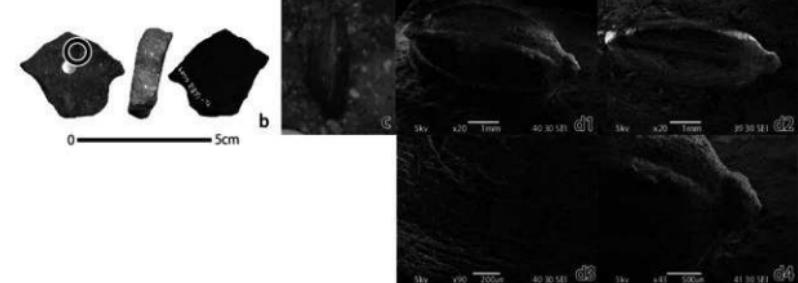
No.	整理番号	出土地点 【出土層位】	時期 （型式）	器形	部位／検出面	圧痕の種類	報告書 番号
3	HRW 0005	F 4 【VI b】	縄文後期後葉 （三万田式）	深鉢	口縁部／内面	コクゾウムシ属甲虫	294
4	HRW 0009	包含層一括	弥生中期	甕	胴部／外面	イネ穎果	未掲載

第76図 広原第1遺跡土器圧痕・レプリカSEM画像②

3.HRW0005



4.HRW0009



b:遺物写真、c:圧痕実体顕微鏡写真  
d:レプリカSEM画像、e:レプリカ3DMS画像

#### <引用・参考文献>

- 小畠弘己 2012a 「イネを食べなかった縄文時代のコクゾウムシ－稻作はいつ日本に伝播したのか？－」『東アジア植物考古学の革新』、第13回国際花粉学会議・第9回国際古植物学会議公開シンポジウム発表要旨集、13-24頁
- 小畠弘己 2012b 「土器圧痕・生体化石資料の比較検討による縄文集落における植物性食料の貯蔵形態と家屋害虫の実証的研究」『特別史跡三内丸山遺跡年報16』、40-50頁
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004 『豊満大谷遺跡・野添遺跡』、宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第83集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011 『内野々遺跡・内野々第2・第3遺跡・内野々第4遺跡』、宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第202集

# 第IV章 総括

広原第1遺跡では、縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代の遺構と遺物が確認された。

特に今回の調査により、縄文時代後期に関して、竪穴建物跡、貯蔵穴、土坑といった当時の生活文化を示す遺構を比較的良好な状態で検出することができた。これらは、当地域の縄文時代後期の集落形成や単位生活集團の在り方等を知る上でも貴重な資料であると考えられる。

そこで、最後に割合的に多くの情報が得られる縄文時代の特筆すべき項目に焦点を絞り、総括にかえたい。

## 第1節 縄文時代後期について

### 1 遺構

#### (1) 竪穴建物跡と貯蔵穴

本遺跡では、縄文時代後期の竪穴建物跡5軒、土坑16基が検出された。土坑16基のうち7基は貯蔵穴であると考えられる。第Ⅲ章で述べたが、中位から下位にかけて外方へ張り出すフラスコ状の形態となることや、種実遺物が検出されていること等、総合的に判断した。竪穴建物跡5軒、土坑16基については、遺構上面やVI b層から検出した遺物の殆どが縄文時代後期の遺物であることから縄文時代後期の遺構であると位置付けた。5軒の竪穴建物跡の類似性、7基の貯蔵穴の類似性、竪穴建物跡と貯蔵穴の共存性の立証が得たれるところである。

竪穴建物跡と貯蔵穴について現在までに分かっている類似性について概述する。まず、竪穴建物跡については、5軒とも中央土坑があり中央土坑の中に小穴がある。このような中央土坑を伴う竪穴建物跡は南九州における縄文時代後期の代表的な形態と言える。中央土坑の存在意味については、中央土坑で火を使っていた可能性を考えていたが、焼土をいずれの竪穴建物跡からも検出することはできなかつた。県内において、このような縄文時代後期の中央土坑を伴う竪穴建物跡が検出された遺跡として、竹ノ内遺跡（宮崎市田野町）、三幸ヶ野遺跡（串間市）等が挙げられる。

第13表 竪穴建物跡（縄文時代後期）概要

遺構名 (略記号)	位置 (グリッド)	平面形	中央土坑 の有無	中央土坑 ビット数	中央土坑外 のビット数	中央土坑の 焼土の有無
SA 1	E 5	円形か	有	5	16	無
SA 2	E 5	円形か	有	5	15	無
SA 3	F 4	円形か	有	5	12	無
SA 4	E 4	円形か	有	3	14	無
SA 5	C 4	円形か	有	4	17	無

次に貯蔵穴は、乾燥型貯蔵穴と低湿地型貯蔵穴に分類される。九州ではこれまで低湿地型貯蔵穴の検出例が多い（矢野2011）が、広原第1遺跡の貯蔵穴は全て乾燥型貯蔵穴に分類される。低湿地型貯蔵穴は堅果類のアケ抜きのために水辺に作られることが多く、乾燥型貯蔵穴は堅果類の保存のために作られる。堅果類は縄文時代の人々の主食で炭水化物の供給源として、当時の人々に重宝されていたと考えられる。本遺跡でも地下に掘った貯蔵穴に大量に堅果類等を保存していたと考えられる。また、本遺跡の貯蔵穴は断面がフラスコ型をしているが、フラスコ型にしたのは外部の空気を入りにくくしたり温湿度

を一定に保ったりするために考えられている。

今回VII a面上で検出された全ての遺構が時間的併行関係にあることの確証が得られれば、VII a面上で検出された土器の殆どが縄文時代後期中葉という短期間に集中していることから、縄文時代後期中葉に生活が営まれた集落であった可能性があることも付け加えておきたい。

## (2) 放射性炭素年代測定

遺構の時期を明らかにするために、今回、放射性炭素<sup>14C</sup>年代測定を行った。資料の抽出については、貯蔵穴の底から検出した炭化種子等で貯蔵穴の年代を測定するという観点で行った。

結果として、<sup>14C</sup>年代（年BP）では、SC 1は3565±20、SC 2は3585±20、SC 4は3660±20、SC 6は3595±20、SC 7は3540±20の年代値が得られた。今回はSC 3、SC 5については年代を測定していないが、検出遺物や貯蔵穴の形態等から、5つの貯蔵穴とほぼ同時期に存在したものだと考えている。

## (3) 樹種同定

貯蔵穴からはコナラ属アカガシ亜属2、ヤツツバキ2、カヤ1、散孔材2が同定された。いずれの樹種も当時の本遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。コナラ属アカガシ亜属が検出されたことで、イチイガシ等の木材が本遺跡周辺に存在したことを想像させる。ヤツツバキ、カヤ、散孔材についても生活を営む上で必要な木材である。ヤツツバキの木材は強韌で耐久性が強いことから、竪穴建物等の建築用材として使用されていたことを想像させる。カヤや散孔材も同様で建築用材や生活中に必要な道具や用具に使用されていたのかもしれない。

## (4) 種実分析

第14表 種実分析の結果

遺構・グリッド	層位	分類群	部位	個数
S C 1	Vlb 層	コナラ属-シイ属?	子葉?	4
	Vlb 層	イチイガシ	子葉	1
	Vlb 層	コナラ属	子葉	10
S C 2	Vlb 層	トチノキ?	種子	2
	Vlb 層	ササゲ属	子葉	1
	Vlb 層	ヒ?	果実	1
S C 3	Vlb 層	コナラ属	子葉	1
S C 5	Vlb 層	コナラ属	子葉	1
	Vlb 層	サンショウ属	種子	1
S C 6	Vlb 層	コナラ属	子葉	6
	Vlb 層	カラスザンショウ	種子	1
	Vlb 層	ミズキ	核	1
S C 7	Vlb 層	ササゲ属	子葉	2
	Vlb 層	コナラ属	子葉	9
	Vlb 層	コナラ属-シイ属	子葉	4
C 3	Vlb 層	イチイガシ	子葉	1
	Vlb 層	コナラ属	子葉	1
	Vlb 層	アズキ類	種子	13
C 4	Vlb 層	イチイガシ	子葉	4
	Vlb 層	コナラ属	子葉	1
	Vlb 層	コナラ属-シイ属?	子葉	2
D 3	Vlb 層	イチイガシ	子葉	1
D 3	Vlb 層	コナラ属?	子葉	1
D 4	Vlb 層	コナラ属	子葉	2
E 3	Vlb 層	イチイガシ	子葉	1

種実分析の結果では、コナラ属31、コナラ属? 1、コナラ-シイ属4、コナラ-シイ属? 6、イチイガシ8、トチノキ? 2、ササゲ属3、アズキ類13、ヒ? 1、サンショウ属1、カラスザンショウ1、

ミズキ1の合計72(遺構での検出41、VI b包含層での検出31)の種実が分析された。コナラ属、コナラ属?、コナラーシイ属、コナラーシイ属?がイチイガシだと仮定すると、イチイガシは50ということになる。ササゲ属がアズキ類だと仮定するとアズキ類は16ということになる。イチイガシは、コナラ属に属し、コナラ属やシイ属の中では唯一アケ抜きが不要であり、南九州の縄文時代後期においては食用として多用されていたと思われる。近隣の遺跡の縄文時代後期における自然科学分析でもイチイガシが分析された遺跡は多い。

本遺跡の7つの大容量の貯蔵穴の存在からすると、検出されたイチイガシの数はかなり少ないと言わざるを得ないが、九州において、乾燥型貯蔵穴の中に堅果類が保存されていたままの状態で検出された例はほとんどない。基本的にイチイガシ等の堅果類は、火等により炭化しなければ土中で現存できることはできない。本遺跡においても、堅果類が現存できない環境下にあった可能性と当時、貯蔵穴としての役割を終え、堅果類を保存していなかった等の様々な可能性を考え、少なくとも縄文時代後期中葉当時の本遺跡での生活においては、イチイガシを中心とした堅果類を貯蔵穴で保存していたと考えたい。また、本遺跡ではアズキ類も多数検出されている。アズキ類は、近年の種実遺体の研究や土器圧痕調査で縄文時代における栽培の可能性が検討されている。アズキ類が検出された地点は、遺構を検出したVII a上面よりも20cm~30cm上である。(他の種実遺体については、貯蔵穴の底の部分、VII a上面での検出である。)本遺跡のアズキ類の植生は縄文時代後期ではない可能性が高い。

## 2 遺物

貝殻文土器の市来式土器、草野式土器、丸尾式土器、磨消繩文土器の鐘崎式土器、北久根山土器については、全てVI b層から出土した。本遺跡においても、これまで構築されてきた南九州の縄文時代後期の遺跡から出土した土器の土器編年にはまる結果となった。

台付皿形土器は、貝殻文土器、磨消繩文土器と文様の類似性がみられた。それぞれがセット関係を示すと考えられる。つまり、台付皿形土器は、貝殻文土器、磨消繩文土器の深鉢形土器に付随する形で文様を取り込み、変化していくと考えられる。赤色顔料、白色顔料が付着した土器が台付皿型土器を中心にして数点あることを付加しておく。

円盤形土製加工品は8点出土した。一般的に円盤形土製品は、古くは縄文時代早期前半から存在し、新しいものは江戸時代の陶磁器を利用したものもあるが、縄文時代中期末から後期中葉頃に最も多く見られる。器としての機能をもつ粘土製品である土器とは異なり、土器の破片を二次的に利用して加工をおこなった円盤形の土製品である。円盤形土製品の用途については、お守り説や遊具・玩具説など様々な説が唱えられているが、いまだ不明である。県内の主な他の遺跡では、丸尾遺跡(宮崎県宮崎市田野町、989点)、崩野遺跡(日南市南郷町、274点)、三幸ヶ野遺跡(串間市、157点)、青木遺跡(宮崎市田野町、200点以上)、下弓田遺跡(串間市、10数点)等の遺跡での出土が報告されている。円盤形土製加工品は円形を形成する整形方法により2つに大別できる。研磨によって加工するものと周辺を打ち欠きで加工するものである。本遺跡の円盤形土製加工品7点は研磨によって、1点は打ち欠きによって加工されている。土器型式は、文様等から判断して市来式系あるいはその前後の土器形式に相当する可能性が高い。

## 3 生業

出土遺物から推察される生業についてふれてみたい。検出された食料の獲得具としては、狩猟具の石

鎌、漁労具の石鍤があげられる。石鍤を使用して狩猟で小動物を得ていたことは容易に想像できる。石鍤は、立地状況から周辺の河川にて漁労活動が行われていたことが推察される。さらに、伐採加工工具としての磨製石斧が見られ、食料加工工具としては磨石・敲石・台石・石皿がみられる。磨石・石皿からは植物の粉碎作業が考えられる。加工の対象となる食糧については、堅果類がまずは考えられよう。本遺跡においてはドングリ（イチイガシ）がその対象の一つとしてあげられよう。ドングリは從来の縄文時代の食糧の対象として馴染み深いものだが、実資料としてあげられる点は強い。

本遺跡では、狩猟、漁労、採集がバランスよく行われ、生活の活動に必要なカロリーを摂取していたのだろう。狩猟、漁労、採集に追加して、本節の（4）種実分析でも述べたが、アズキ等の植物を栽培していた可能性があることも追加しておきたい。

#### 4 生活

本遺跡の基本層序は、Ⅲ層が高原スコリア、Ⅶ層が牛の脛上部、Ⅷ層がアカホヤ火山灰、Ⅸ層が牛の脛下部である。いずれも霧島火山の噴火による堆積層である。本遺跡から霧島山系までは直線距離で約12kmしか離れていないことを勘案すると、霧島火山の麓で生きてきた先人達の生活は火山の噴火と共にあったと言っても過言ではないだろう。また、火山灰が降り積もった堆積層の上で生活しなければならなかった期間も短期間ではなかったであろう。本遺跡の7基の貯蔵穴はⅦ層が牛の脛上部の約30cm上から出入口をつくり、牛の脛上部とⅧ層のアカホヤ火山灰部分にプラスコ状に掘削し、Ⅸ層の牛の脛下部上部に底部がある。この事はただの偶然であろうか。降り積もった堆積層と共存した生活が展開されていたのかもしれない。

### 第2節 縄文時代後期後葉から晩期について

本遺跡では、ピット群が5群検出されたが用途や性格については不明である。考察を重ねたことについては第3章第3節に記述した。林潤也氏は縄文時代後期の掘立柱建物跡の特徴について「遺構の構造的な生活上、遺構自体の認定や時期比定の問題が付きまとだが、可能性のある資料を含めると、現時点で検出された遺跡は10遺跡を越える。特徴を列挙すると、①後期前葉には存在し、後期後葉以降増加する傾向がある。②現時点では鹿児島・宮崎での検出例が多い。③環状あるいは半環状の配置を示す事例がある。④1間×2間など小規模な建物が多いが、遺跡ごとの差異が著しい、などが挙げられよう。」と論述している（林2000）。本遺跡の5群のピット群も林潤也氏が掲げる縄文時代後期の掘立柱建物跡の特徴にあてはまると考える。

本遺跡のピット群の用途や性格が今後の研究によって解明することを期待したい。

### 第3節 終わりに

広原第1遺跡では、竪穴建物跡5基、土坑16基（内7基は貯蔵穴）、ピット群が確認された。ピット群については縄文時代後期後葉から晩期にかけてのピット群も検出されたが、他の遺構については、全て縄文時代後期の遺構と考えられる。縄文土器の多寡から推測すると、市来式の時期が最も大きな集落であった可能性が高い。

これまで高原町域では、多くの遺物量があるものの縄文時代の遺構は近年に至るまで確認されていなかった。2007年に吉牟田遺跡（高原町）において初めての縄文時代後期中葉から縄文時代晩期初頭の時

期に比定される遺構（土坑3基、竪穴状遺構1基、溝状遺構1条、ピット群）が検出された。本遺跡は、吉牟田遺跡に次ぐ縄文時代の遺構が検出された遺跡となる。

縄文時代後期の遺跡は南九州において数多く存在する。本遺跡では、特殊な遺物は検出されず、土器や石器や磨石等、日常生活を行う上で必要な遺物が殆どである。このことは、本遺跡が特殊な性格を帶びた集落ではないことを物語っている。今回、広原第1遺跡が発掘調査されたことにより、地理的に宮崎県と鹿児島県の縄文時代後期の遺跡を繋ぐ遺跡として位置付けられ、検出された遺構や遺物によってこれまでの南九州の縄文時代後期で考察されたことがより明確になることを期待したい。また、錦崎式土器や北久根山式土器等、多量の磨消縄文土器も出土していることから当時から北部九州や西九州との文化的交流があった可能性も考えられる。

近年、南九州の縄文後期の時期は本野原遺跡（宮崎市田野町）に代表されるような大規模な集落の存在もみられ、平畠遺跡（宮崎市）、竹ノ内遺跡（宮崎市田野町）等、これまで確認された遺跡も合わせ、その様相が解明されつつある。また、細井地区遺跡群（都城市高城町）も内陸部における集落の様相を示す遺跡として注目されている。こうした貝殻文土器を用いる南九州縄文文化の潮流を背景に、今回、霧島火山の麓で生きてきた先人達の生活の一端を垣間見ることができた。まとめにあたり特筆される項目に対し、総括を行ったが、今後の周辺遺跡の調査・研究に資することができれば幸いである。

#### 【参考文献・引文文献】

##### 《 報告書 》

- 宮崎県埋蔵文化財センター 1990『荒迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第11集  
宮崎県埋蔵文化財センター 1999『西下本庄遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第15集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2000『右葛ヶ迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第21集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2000『竹ノ内遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集  
宮崎県埋蔵文化財センター 1997『大谷遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第40集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2006『下耳切第3遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第125集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2007『吉牟田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第154集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2011『尾花A遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第195集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2011『内野々遺跡 内野々第2・第3遺跡 内野々第4遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第202集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2011『働く女木遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第205集  
鹿児島県埋蔵文化財センター 1997『干迫遺跡Ⅱ-1』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査書22集  
鹿児島県埋蔵文化財センター 1997『干迫遺跡Ⅱ-2』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査書22集  
鹿児島県埋蔵文化財センター 1997『干迫遺跡Ⅳ』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査書22集  
鹿児島県埋蔵文化財センター 2003『中原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査書54集  
鹿児島県埋蔵文化財センター 2005『桐木耳取遺跡Ⅲ』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査書91集  
鹿児島県埋蔵文化財センター 2011『芝原遺跡2』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査書158集  
宮崎県宮崎市教育委員会 1974『松添貝塚』宮崎市文化財調査報告書第2集  
宮崎県宮崎市教育委員会 1999『松添貝塚』宮崎市文化財調査報告書第37集

- 宮崎県宮崎市（田野町）教育委員会 2004『本野原遺跡一』宮崎市（田野町）文化財調査報告書第48集
- 宮崎県宮崎市（田野町）教育委員会 2005『本野原遺跡二』宮崎市（田野町）文化財調査報告書第52集
- 宮崎県宮崎市（田野町）教育委員会 2006『本野原遺跡三』宮崎市（田野町）文化財調査報告書第53集
- 宮崎県宮崎市（田野町）教育委員会 1990『丸野第2遺跡』宮崎市（田野町）文化財調査報告書第11集
- 宮崎県宮崎市（高岡町）教育委員会 2002『高野原遺跡』宮崎市（高岡町）文化財調査報告書第23集
- 宮崎県木城町教育委員会 2000『石川内本村遺跡』木城町文化財調査報告書第6集
- 宮崎県小林市教育委員会 2010『山中遺跡』小林市文化財調査報告書第4集
- 宮崎県都城市（高城町）教育委員会 2004『細井地区遺跡群』文化財調査報告書第14集
- 宮崎県えびの市教育委員会 2002『長江浦地区遺跡群』えびの市埋蔵文化財調査報告書 第32集
- 宮崎県日南市（南郷町）教育委員会 1990『崩野遺跡』日南市（南郷町）文化財調査報告書第2集
- 宮崎県日南市（南郷町）教育委員会 1991『崩野遺跡II』日南市（南郷町）文化財調査報告書第3集
- 宮崎県串間市教育委員会 1992『三幸ヶ野遺跡』串間市文化財調査報告書第7集
- 鹿児島県鹿児島市教育委員会 1979『大龍遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 鹿児島県末吉町教育委員会 1981『宮之迫遺跡』鹿児島県末吉町教育委員会第2集
- 鹿児島県鹿児島市教育委員会 1988『草野貝塚』鹿児島市教育委員会報告書第9集
- 鹿児島県志布志市教育委員会 1985『中原遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集

### 《文献（縄文編）》

- 前迫亮一 1992「異系統土器文化の一接点 一南九州における縄文時代後期中葉の一様相：丸尾式土器の提唱一」『南九州縄文通信No.6』南九州縄文研究会
- 横手浩二郎 1994「宮崎県西諸県郡高原町大谷遺跡表採の縄文土器I～松岡洋一氏コレクションの紹介～」『南九州縄文通信No.8』南九州縄文研究会
- 清田純一 1998「縄文後・晚期土器考－中九州の縄文後・晚期土器とその平行型式について－」『肥後考古』第11号 肥後考古学会
- 林潤也 2000「九州縄文集落と地域社会 一後期を中心として一」『月刊考古学第107号』雄山閣
- 東和幸 2009「組織痕土器研究の現状」『黎明館調査研究報告』第22集 鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 小杉康・他 編 2007「縄文文化の輪郭－比較文化論による相対化－」『縄文時代の考古学』第1巻 同成社
- 小杉康・他 編 2007「台地と森の中で－縄文時代の古生態系－」『縄文時代の考古学』第3巻 同成社
- 小杉康・他 編 2007「なりわい－食料生産の技術－」『縄文時代の考古学』第5巻 同成社
- 小杉康・他 編 2007「土器を読み取る－縄文土器の情報－」『縄文時代の考古学』第7巻 同成社
- 小杉康・他 編 2007「生活空間－集落と遺跡群－」『縄文時代の考古学』第8巻 同成社
- 小林達雄 編 2008『総覧 縄文文化』同刊行委員会

### 《文献（各時代共通編）》

- 宮崎県編 1989『宮崎県史 資料編 考古1』
- 甲斐亮典 監修 2007『図説 西諸・北諸の歴史』郷土出版社
- 矢野健一 2011『貯蔵穴と住居域との関係』季刊考古学114号 雄山閣



調査区と調査区周辺



調査区全景



現場風景①



現場風景②



基本層序堆積状況（調査区西壁）



基本層序堆積状況（C5区トレンチ）



作業風景



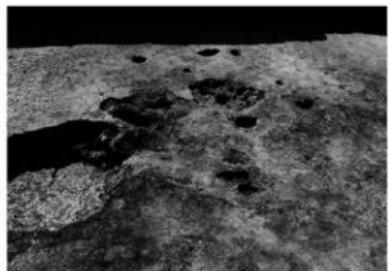
S A 1 完掘状況



S A 2 完掘状況



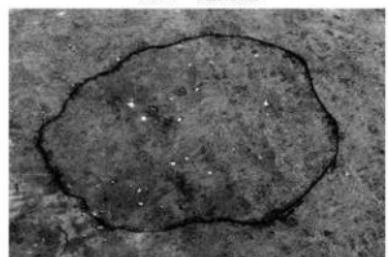
S A 3 完掘状況



S A 4 完掘状況



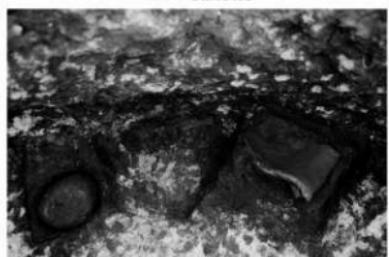
S A 5 完掘状況



S C 1 検出状況



S C 1 底面の遺物検出状況



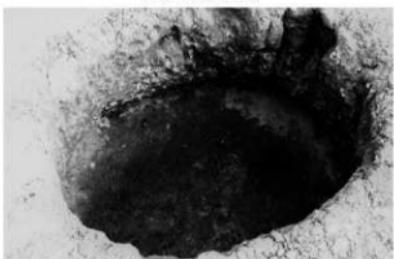
S C 1 底面の遺物検出状況



S C 1 完掘状況



S C 2 半裁状況



S C 2 完掘状況



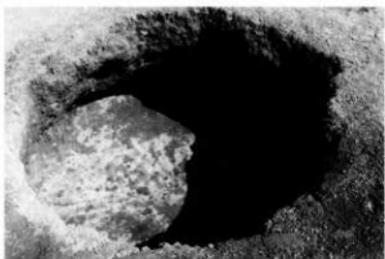
SC 3半掘状況



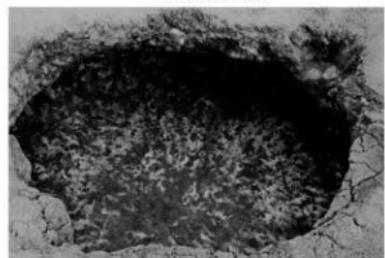
SC 3完掘状況



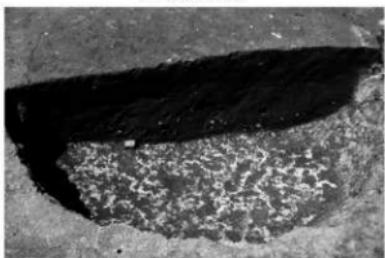
SC 4完掘状況



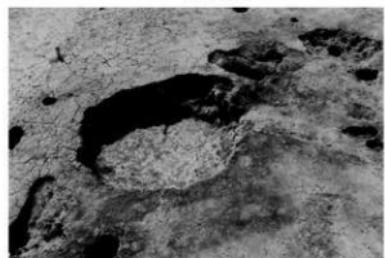
SC 5完掘状況



SC 6完掘状況



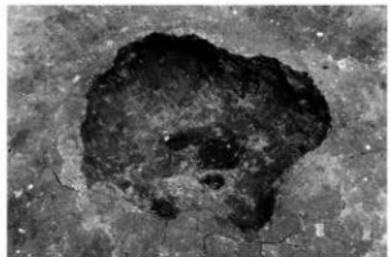
SC 7半掘状況



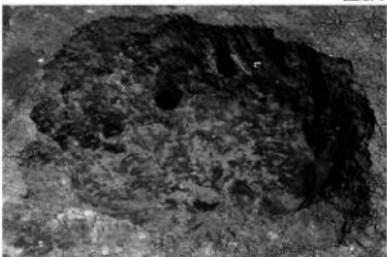
SC 7完掘状況



SC 8完掘状況



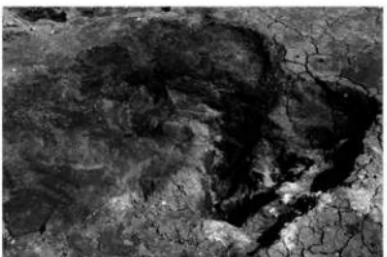
SC 9完掘状況



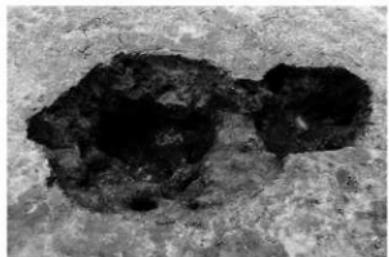
SC 10完掘状況



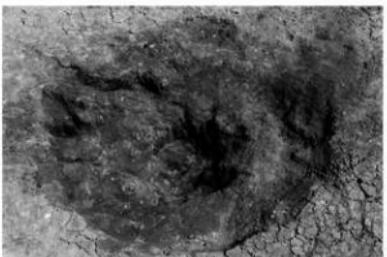
SC 11完掘状況



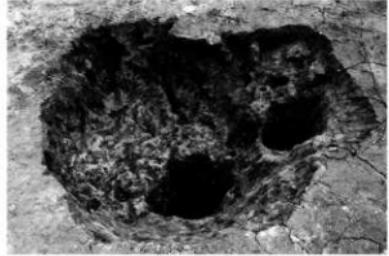
SC 12完掘状況



SC 13完掘状況



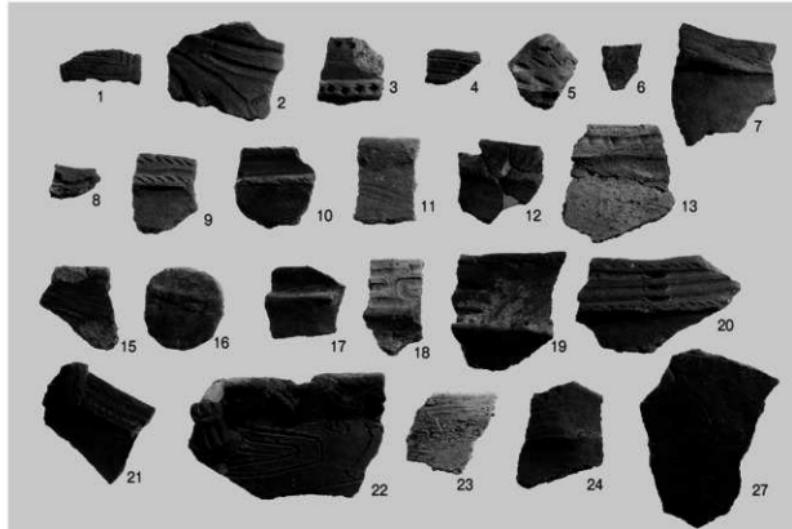
SC 14完掘状況



SC 15完掘状況



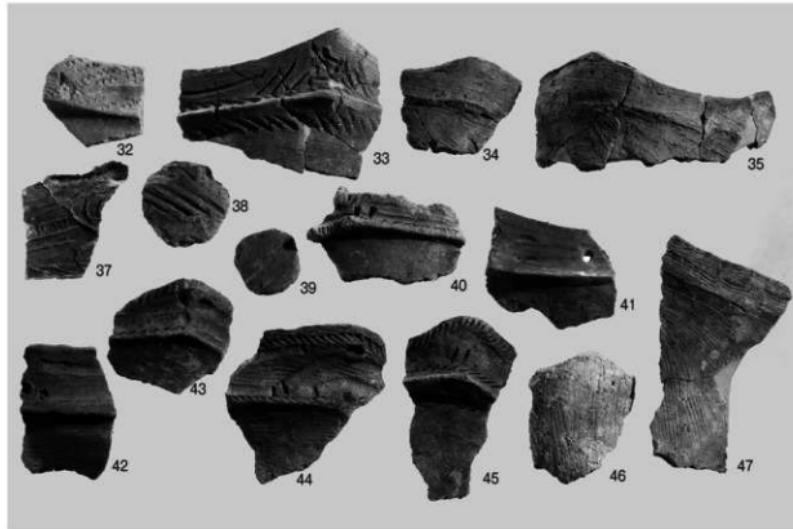
SC 16完掘状況



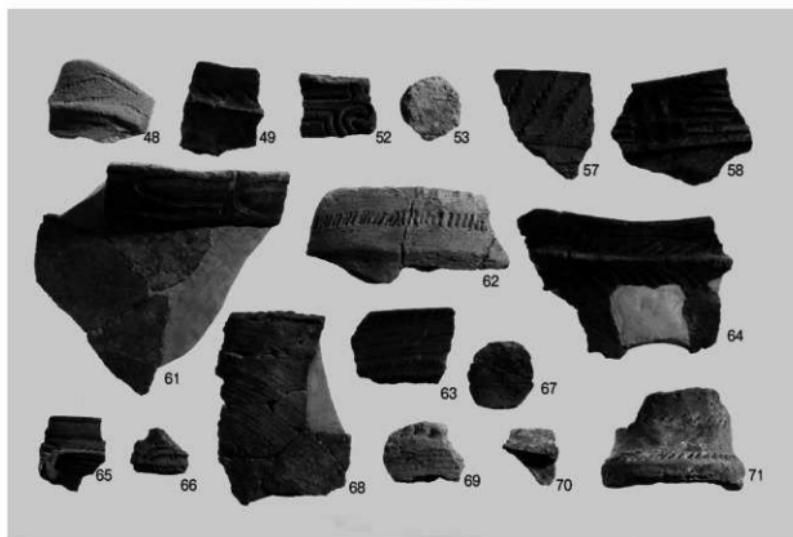
SA1、SA3、SA5、SC1、SC2出土の土器（\*1は縄文前期、2、3は縄文後期前葉土器）



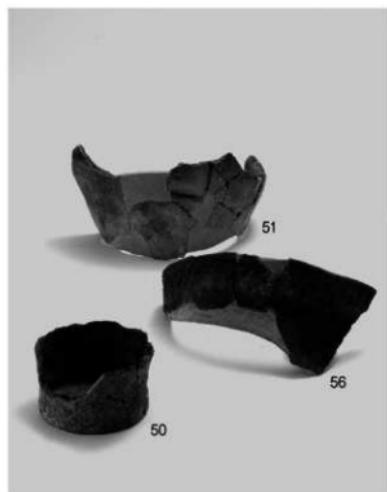
SC1、SC2、SC3出土の土器



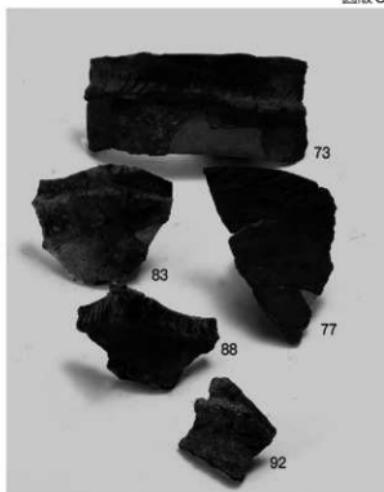
SC 3、SC 4出土の土器



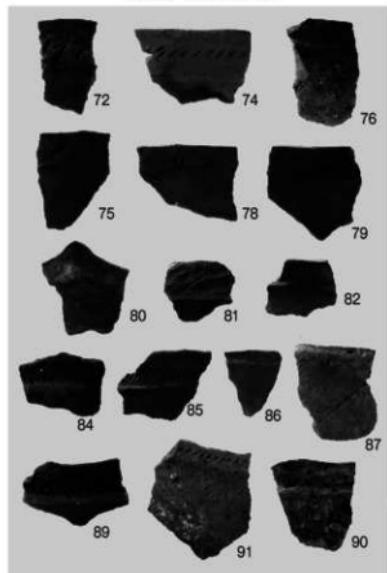
SC 7、SC 8、SC 9、SC 10出土の土器



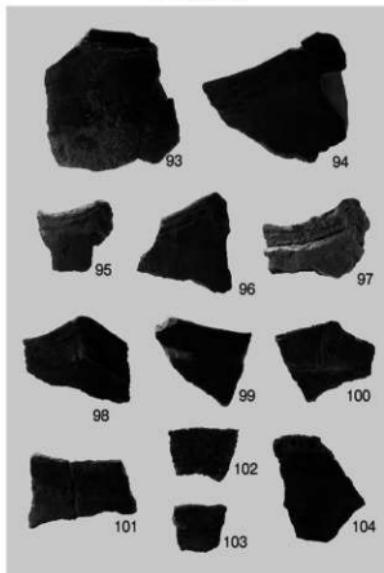
SC 5、6出土の土器



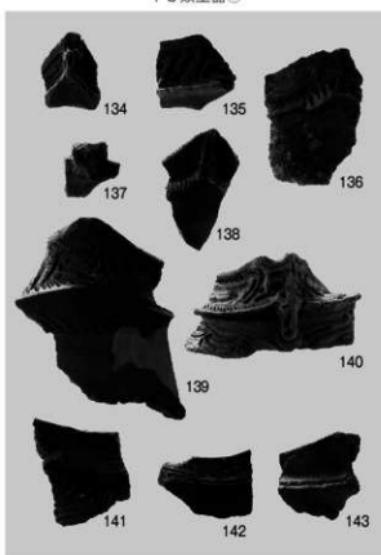
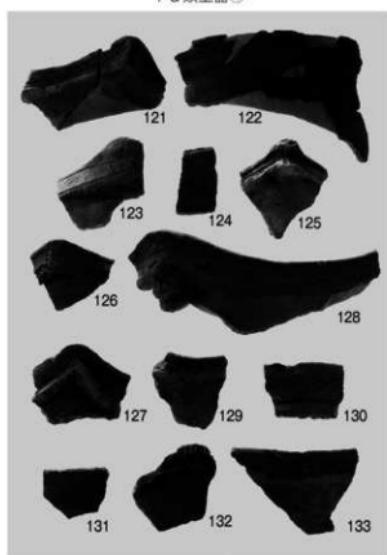
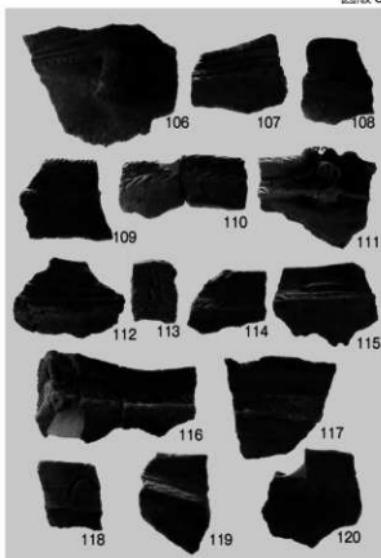
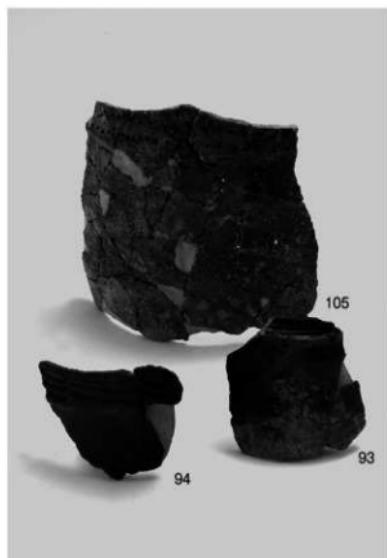
I a類土器①

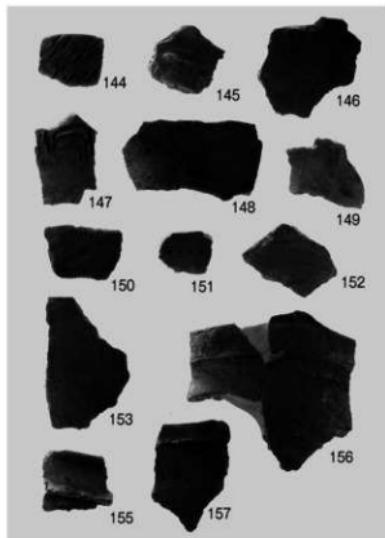


I a類土器②

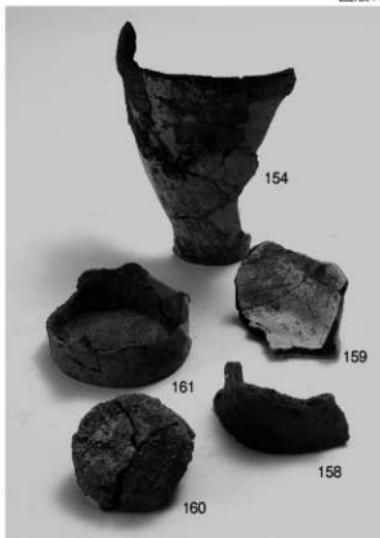


I a類土器③

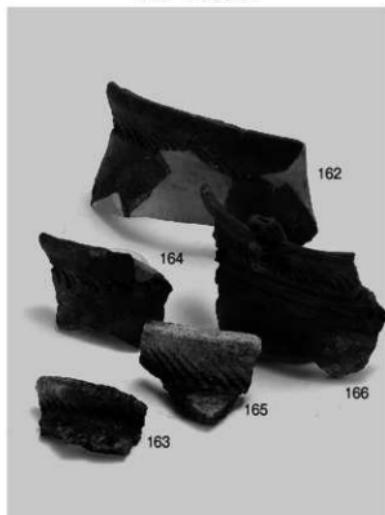




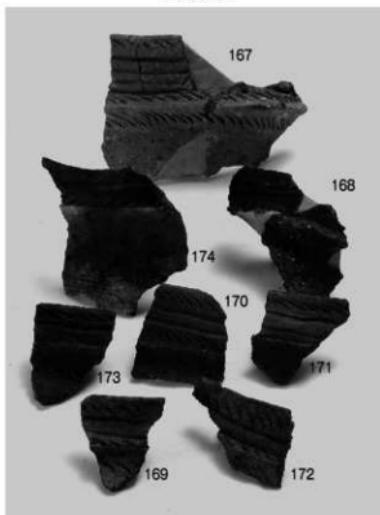
I d, I e 類土器



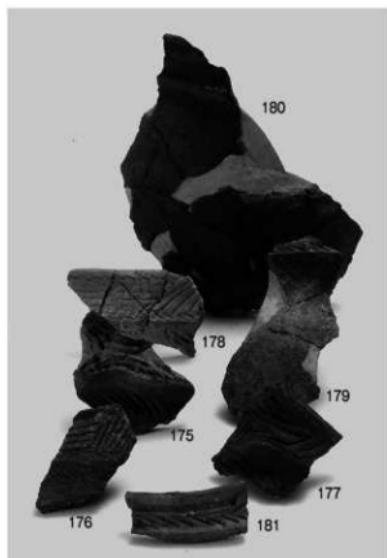
I e 類土器



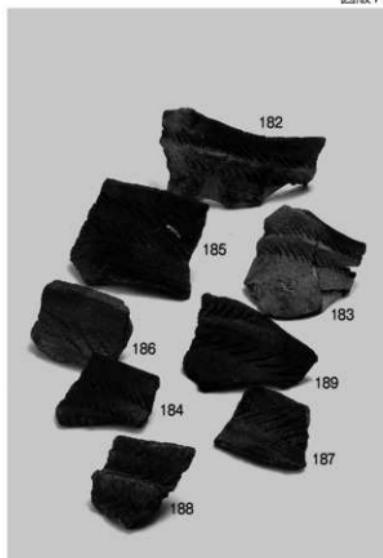
II 類土器



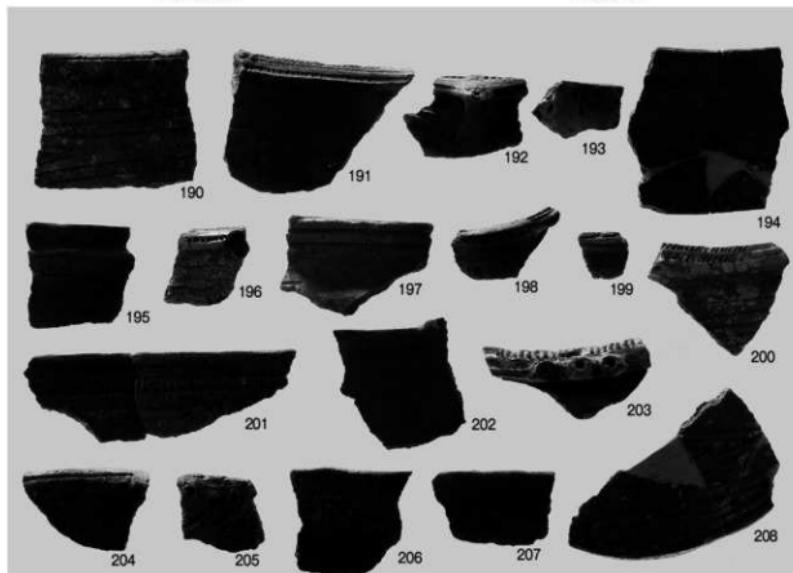
III a 類土器



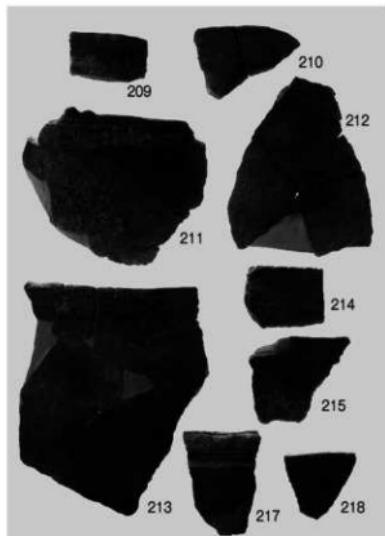
III a 類土器



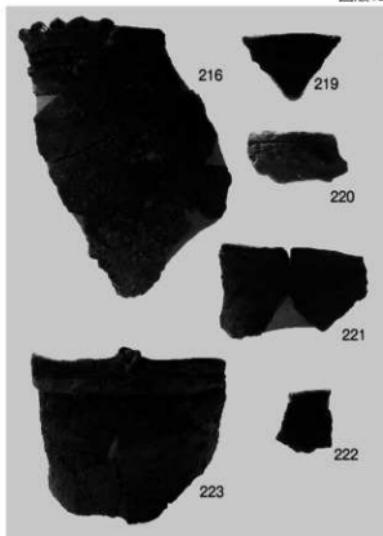
III b 類土器



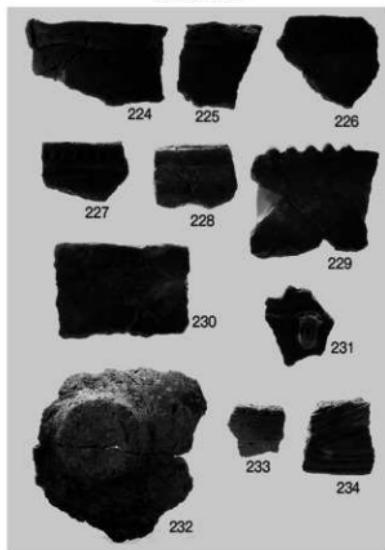
IV 類土器



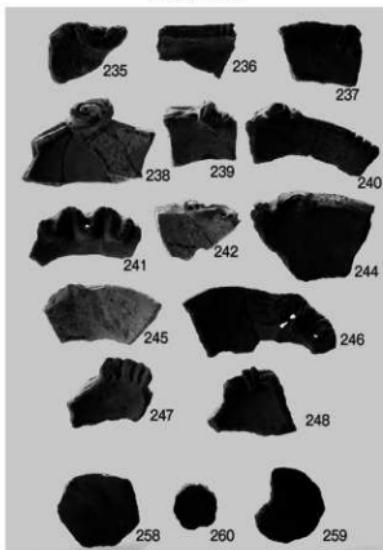
V a 類土器①



V a 類土器②



V b、VI 類土器



VII、VIII 類土器



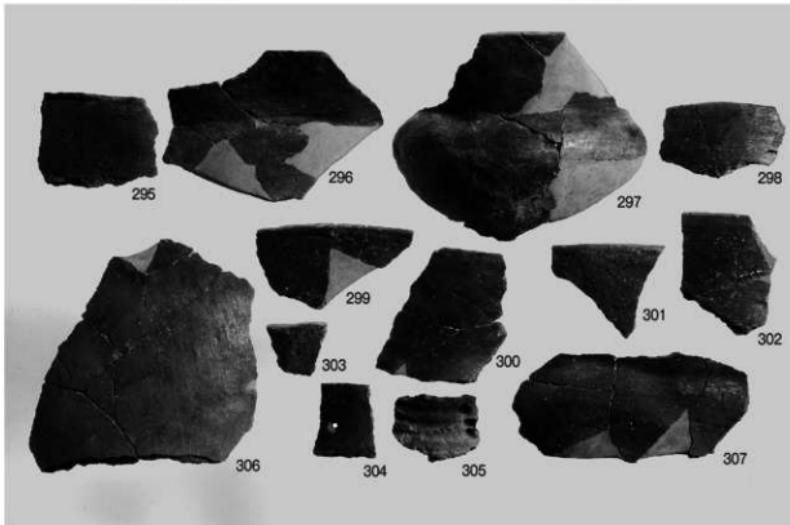
VII類土器①



三万田式土器①



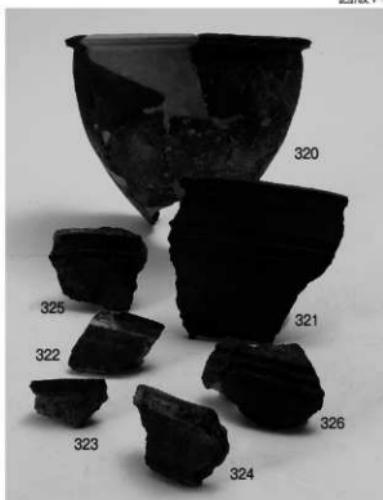
VII類土器②



三万田式土器②



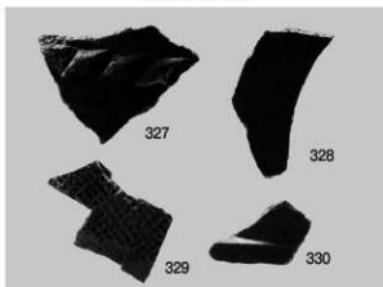
三万田式土器③



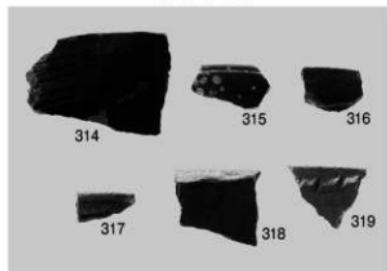
弥生時代の土器



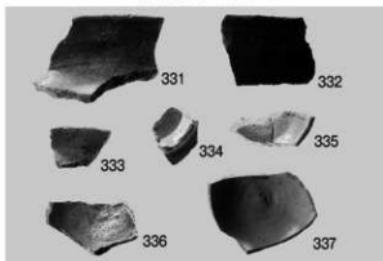
三万田式土器④



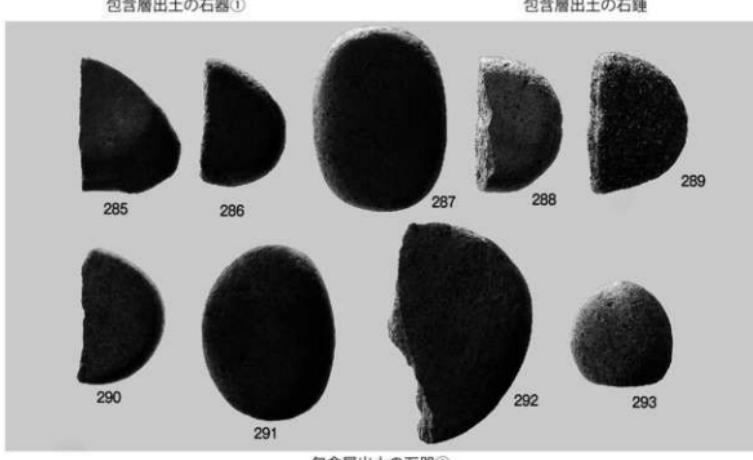
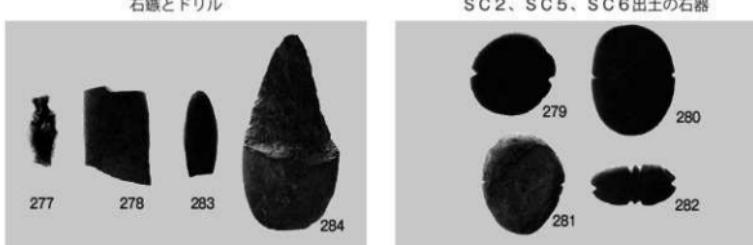
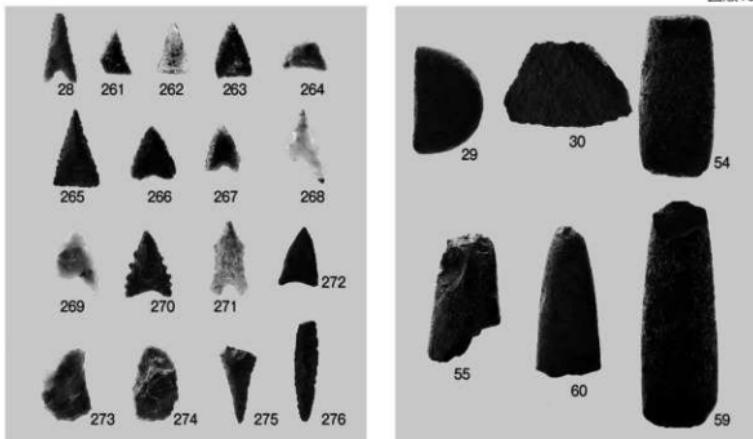
古墳時代の土器



縄文晩期の土器



古代の土器





## 報告書抄録

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第227集

ひろわらだい  
広原第1遺跡

西諸県地区総合性専門高校設置事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告集

2013年3月

編集 宮崎県埋蔵文化財センター

発行 ☎ 880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985-36-1171 FAX0985-72-0660

印刷 有限会社 鉱脈社

☎ 880-8551 宮崎市田代町263番地

TEL 0985-25-1758 FAX0985-25-1803

---







Takaharu Town

# HIROWARA 1 Site

The Excavational Investigation Report of Miyazaki Prefectural Archaeological Center  
vol.227

2013

Miyazaki Prefectural Archaeological Center